
私の妹がかように可愛きわけもなし

蝉ノ河

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の妹がかように可愛きわけもなし

【Nコード】

N4276X

【作者名】

蝉ノ河

【あらすじ】

尾張の国の大名の息子として生まれたおバカな子の信長君と、その妹の超絶美少女お市姫との物語。

ずっと河原で石投げたり、野原で犬を追っかけて遊んでいた信長君でしたが、ある日妹のお市が超絶美少女に成長していることに気が付きました。

兄妹で差が付きすぎて話しかけることすらままならなくなっていた信長君は、その日から戦国大名となることを決意しました。

特徴的なれどバカ揃いの部下を引きつれて、信長君は戦国大名へ

の道をひたすら走りだしたのです。

第一話『私の妹がかように可愛きわけもなし』の巻

むかーしむかしのことです。

尾張の国に信長君という、それはそれはおバカな少年がおりました。

「利家」。あそびいこーぜー」

「あ、信長のアニキ。どこ行く？」

「河原。石投げ競争しようぜ」

「オツケーっす」

これが幼児の会話であつたら問題はありません。

しかし信長君も利家君もすでに元服しているので、立派な大人です。大人がやつては大問題です。

しかも信長君は尾張の国の大名の嫡男でした。いつまでもおバカなままでいいわけがありません。

いつかキチンとした大名に目覚めるはず。

周囲はそれを期待しました。

が、結果は。

「やべーよ。石投げるの、超面白くね？」

「マジそうっすね。半端ねーっすわ」

……毎日こんな感じだったので、周囲はいつしか信長君を諦めておりました。

「ところで信長のアニキ。最近、お市様を見ないんですが」

「あ、市か？」

お市とは、信長君の妹です。

元服前の幼少期には、一緒に犬を追いかけて遊びまわった記憶があります。

「そっぴや、最近見ないな」

信長君の活動フィールドである野原、河原、山などでは最近お市を全く見ません。

「たまにはにっしょに遊びましょう。仲間外れはかわいそうっす」

「利家、お前優しいな。よし、呼ぶか」

信長君はお城に戻って、お市を探しました。

遊び仲間に入れるために。

ところが、です。

信長君はお城で見えてしまいました。多くの家臣に囲まれて、柔らかにほほ笑む超絶美少女を。

（あいつ、誰だ!?!）

面影はなんとなくわかるのですが、脳がそれを拒否します。

「お市様は今日も美しい」

「尾張一の美少女ですな」

「いやいや戦国一ですよ」

「うふふ。そんなこと、……あるわよー」

家臣たちが大笑いして、少女も優雅にほほ笑み返しました。

やはり美少女の正体は、妹のお市でした。

優雅な着物姿が似合っています。

教養がなければ身につかない気品もあります。

（そんな、バカな!?!）

信長君の記憶にある妹のお市は、鼻を垂らしながら一緒に野原を駆け回ったあたりで止まっています。

こんな美少女なはずないのです。

ないはずなのです。

「あらお兄様、今日は河原はいかないのですか？」

庭にいる信長君の姿を見つけたお市が、信長君に語りかけました。

一応の礼節は取っていますが、それは慇懃無礼と呼ばれる類のもので、敬意はありません。

「あ、いや」

お前も誘いに来た、とはとても言える状況ではありませんでした。

そしてお市が、受けるようには思えません。

お市の目には、兄に対する尊敬などかけらもなく、むしろ雑草でも見るかのような侮蔑が込められています。

(……当然か)

信長君は自分の着ている服を見ました。そこいらの野武士が着ているのとかわらないボロキレです。

教養をつけようとしたこともありません。

お市との差があります。釣り合いがまるで取れません。

あちらが菊の花ならば、こちらは雑草と思われても仕方ない状況でした。

「なんでも……ない」

「あら、そうですか」

信長君はそのまま城を後にしました。家臣たちが、「あれではとても大名は務まるまい」と陰口を言っているのが聞こえました。

信長君は利家君の待つ河原に行きました。

「あ、信長のアニキ。お市様は？」

「……来ない」

言葉少ない信長君の様子に、利家君も何かを悟りました。

「利家」

「ういっす」

「お市って、どうだ？」

「どづつて？」

「なにかしってることないか？」

信長君は、いつお市が蛹から蝶になるかのような変化を遂げたの
かを知りたかったのです。

「ああ、きれいって有名らしいですね」

しかし利家君のもっている情報は寡少でした。当然でしょう。利家君も名家の出ではあるものの、信長君と一緒に野原を駆け回っているのです。城内の情報は入ってきません

「そうか」

「ええ」

思いつめたように言う信長君の言葉に、利家君は何気ない様子で注目しておりました。

「利家。石投げも野原遊びも、今日でお終いだ」

「え？　じゃあ明日っから何するんで？」

「俺は明日から」

「明日から？」

「明日から俺は……戦国大名になる！」

信長君は河原に石を投げました。

川面で水が跳ねました。

おバカの信長君は、生まれかわる決意をしたのでした。

第二話『弟の信勝君と、筆頭家老の勝家君』の巻

超絶美少女となった妹に釣り合うために、戦国大名を目指すと決めた信長君。

しかしそのためにはまず、尾張の国の大名にならなければなりません。

信長君は決意を固めたその日から、猛烈に本を読み、戦術、政務の勉強を開始しました。

もともと出来が良かった信長君はメキメキ頭角を示しだしたのです。

そんな信長君に、大慌てした少年がいました。

次男の信勝君です。

「信長にーちゃん、いまさらそれはないんじゃないかな？」

周囲の者たちは、嫡男の信長君はずっと野原で遊びまわっていたので、次男の信勝君に家督を譲るべきだという機運が高まっていました。

信勝君も何となくその気になっており、大名になる気が満々でした。

美少女のお市とよく似た、美少年の信勝君は、兄の勝手な行動に不満でした。

ある日のこと。

信勝君は織田家家中で筆頭の勝家君を呼び出しました。

「勝家、お前はどっちにつく気カナ？」

「お、おでは……おでは、お市様の味方なんだな」

勝家君は一見するとウドの大木に見えませんが、実際はデブでバカで、そのうえロリコンです。ひどい外見よりも実像のほうかひどい珍しい例です。

しかし武勇比類なく、彼が味方にならないことには、信勝君は嫡男の信長君に勝てません。

「お市じゃなくって。信長にーちゃんと、ぼくのどっちにつくのカナ？」

「お、おでは、おではよくわからないんだな。命令に従うんだな」

「むー」

それでは信勝君は困るのです。次男だから。

「ちょっと待っているカナ」

信勝君は街で買った黒髪のカツラをかぶりました。

そこには妹のお市とよく似た美少女があらわれました。

「これでどうカナ……」

「おおおお。お市様なんだな。お市さまなんだな。結婚してほしいんだな！」

勝家君はその巨体でいつきに信勝君に襲いかかろうとしました。

「ちょ、待つカナ！ 勝家ストップ！ ぼくは信勝だ。お市じゃないのカナ！」

大慌てで信勝君はカツラを外しました。

大汗をかきながら、牛のように鼻息を荒し、勝家はようやく止まりました。

「すまなかつたんだな。思わず『掛れ柴田』の本領を發揮してしまつたんだな」

「こんなところで發揮するなカナ」

服を正して、先ほど訪れた貞操の危機に身を震わしながらも、信勝君は確信しました。

「それで勝家、お前は信長にーちゃんとぼくの、どっちの仲間カナ？」

「お市様なんだな！」

「……ってことは？」

「信勝様なんだな！」

「よし。それでいいかな」

「かな、なんだな」

信勝君と、筆頭家老の勝家君は固く握手を交わしました。

一方そのころ。

信長君も大名になるための足場固めを着々としていました。

「信長のアニキ。一緒に遊んでた悪がきどもも集めといたぜ」

「よし利家。そいつらは機動隊として組織するぞ」

「そしきって、なんだ？」

「それはこつちがやる。お前は先頭に立って戦ってくれればいい」

利家君はおバカでしたが、実は槍の又左と呼ばれるほどの槍の名手です。

それ以上におバカで派手好きなのであまり目立たないのですが、実はすごく強いのです。

「作戦も俺が考える。お前はただ真っ直ぐに、敵をなぎ倒せ」

「ああ、そりゃーいいや。目立つし。難しいのは信長のアニキに任せた」

「頼りにしてるぞ」

信長君もおバカであった期間が長かったので、頼りになる部下がいません。戦いとなったら利家君にすべてを任せるしかありません。

そして賢くなりつつある信長君は、戦いの日が近いことを感じていました。

敵は他国ではありません。弟の、信勝君です。

第三話『利家君のあかぞな』

ついに激突した兄、信長君と弟の信勝君。

信勝君には織田家筆頭家老の勝家君が仲間になっております。

「突撃するんだな。鬼柴田なんだな！」

柴田君の軍勢が信長君に襲い掛かります。

「来たか。利家、頼んだぞ。勝家に対抗できるのはお前だけだ」

「へっへー、任せといてくれよ」

利家君は自信満々に胸をたたきました。

しかし信長君には気にかかることがあります。

「ところで利家、その服装はなんだ？」

「へっへー。さすが信長のアニキ。お目が高い！」

利家君は赤いマントを見せびらかしました。

「なんだそれ？」

「東のど田舎に、すっげー強い『あかぞな』っていう奴らがいるんだぜ。赤ずくめの軍隊だよ。かっこいいよな。それに倣って、俺も赤いマントをつけることにしたんだ」

「あかぞなー？　なんだそれ？」

「甲斐、あたりだったかな？　信濃？　そのあたり」

利家君のあいまいな情報に、信長君は合致する情報がありました。

「……武田の赤備えのことか？」

赤備えとは、武田家の誇る戦国最強の軍団です。特徴は軍勢全員の具足をすべて赤で染で上げていること。敵軍は赤い軍隊をみるだけで逃げ出すといわれるほどです。

「そうそれ！」

「パクリか」

「オマージュと言ってくれ」

「オマージュっても、あれは赤い色の装備で全軍を揃えることで……。お前ひとり赤くても意味ないだろ」

「他の奴らも赤くつちや、俺が目立たないじゃないか」

利家君にとって、いかに目立つかが重要なのです。

「まあ、それはいいとして。なんでマントだけなんだ？」

利家君は赤いマントを羽織っています。

ですがその下は、袴だけで、上半身は裸です。

「ああ。赤く染めるのって金がかかってさ」

確かに赤い染料は高価です。

信長君は嫌な予感がしました。

「で？」

「マント染めたら、金がなくなっちゃって。そいで鎧売っちゃった」

「い、いつ？」

「昨日」

陣ぶれ（出撃直前の集合命令）が来てから鎧を買う貧乏人はいても、鎧を売るおバカは過去に例がありません。

信長君は頼りにする武将の奔放すぎる行動にちよつと眩暈を覚えました。

「……大丈夫か？」

「へーきへーき。商人のおやじに聞いたんだけど、鎧ってのは怪我しない為に着るんだぜ」

「それで？」

「そもそも掠り傷ひとつ受けなけりゃ、鎧は必要ないだろ。俺、頭

「いい！」

「う、む」

ついこの間までおんなじ位おバカだった信長君は、複雑な気持ちで利家君を見ていました。

それはともかく、今は利家君の槍又左と呼ばれる武勇が頼りです。

「ともかく、頼んだ」

「おお、じゃあ行ってくるぜ！」

利家君は異常に長い槍をもって、勝手に走り出していきました。

一人で。

何の指示も受けていない部下たちはボー然と見送るしかありません。

「……ぜ、全軍。利家の先駆けに遅れるな！」

信長君はあわててそう指示し、軍隊が動きました。

戦いは熾烈となりました。

「よし、主力はそのまま。別働隊は俺が率いる。横腹を撃つぞ！」

信長君は少数の騎馬を率いて勝家君の軍を攻めました。

「わ、わ。敵が向こうからも来たんだな。どっちに攻めればいいんだな？」

一方で、おバカな勝家君は大混乱です。

「しつかりするのカナ。勝家、お前が頼りなんだ」

信勝君は勝家君を励ましました。

が、励ますだけでした。

信勝君には軍隊を二つに分けて、片方を抑えるほどの武勇はなかったのです。

戦いはやがて、信長君の勝利に終わりました。

「負けたのカナ」

こうして信長君は、尾張の国の大名になったのでした。

第四話『秀吉君、仕官する』の巻

秀吉君は農民の出ですが、侍になりたいとおもっているサル顔の男の子です。

どうせ侍になるんだつたら偉くなりたい。偉くなるには、強い大名につくのが一番です。

「よし天下をとれそんな大名につくでヤンス〜」

秀吉君は東海の覇者、今川さんちの義元君こと、戦国おじゃる丸に仕官しに行きました。

しかし……。

「ほっほーい。サル顔はいらんでおじゃる〜」

実績もなく顔も悪い秀吉君は、相手にしてもらえませんでした。

「しくじったでヤンス。既に大大名になってるところじゃ、今からいっても偉くなれないでヤンス。これからでっかくなるところに仕官しないと」

秀吉君はいろいろと考えながら全国を旅しました。

「ここは尾張でヤンスか。……うん、ここはダメでヤンスな」

尾張の大名、信長君はバカで有名です。なんと元服した後も河原で石投げ遊びをしていたというのですから。

「バカの下について死にたくないでヤンス」

「ほー、信長つてのはそんなにバカなのか？」

そんな秀吉君に話しかけた若者がいました。商人っぽい格好をしています。

「あんた誰でヤンス？」

「気にするなよ。それで信長つてのはどんな奴なんだ？」

「まあ一言でいえば、ダメダメ大名でヤンスね」

「ほうほう」

「信長は多分、これから上京を狙っている戦国おじゃる丸に踏みつぶされるでヤンス。尾張はおじゃる丸のいる遠江から見て、ちょうど京への通り道でヤンスから」

「そうか。それじゃあなんでお前は、おじゃる丸のところに行かない？」

「それが厳しいでヤンスよ。あそこはもう家臣がいっぱいいて、オイラが入り込む隙間がないでヤンス」

「なるほどな。古豪には新参が入り込む余地はないか。他に強い大名はどこだ？」

「うーん。強いのは越後の上杉謙信、甲斐の武田信玄でヤンスね。」

でもこつちも……」

「もう入り込む隙間がない、と」

「大大名でヤンスから」

「尾張はこないだ身内で争ってたから、家臣も少なくなっただ狙い目だぞ」

「はっは。でも死ぬのは御免でヤンス」

「……そうか」

「それに、オイラ的には、ねらい目があるでヤンス」

「うん？」

「美濃にいる、マムシの道三。こいつは間違いなく、これからでっかくなるでヤンス。それに道三はもともと油売りの商人でヤンスから、家臣も譜代は少ない。新人が売り込むチャンハスたくさんあるでヤンス」

「なるほどなあ………で、そいつに比べれば、信長ってのはどうだ？」

「まあ足元にも及ばないでヤンスね。バカな上に、家臣もバカばかり。しかも戦国おじやる丸に狙われて滅亡確定。いいことなしでヤンス」

「そうか……。じゃあお前はこれから、美濃に行くんだな」

「それでヤンス。町で一泊したら、美濃にレッツゴーでヤンスよ」

「そっか、まあ頑張れよ」

若者は去っていきました。

「そっちも頑張るでヤンスよー」

基本的に人のいい秀吉君も、なにも自分のことは語らなかつた若者に元気よく手を振りました。

もちろんこの若者。変装した信長君です。こっそり市中の様子を聞きに来ていたのです。

「よー信長のアニキ、なに落ち込んでるんだ？」

町から戻ってからというものの、がっくりと肩を落としてうずくまる信長君に、利家君が話しかけました。

「バカで滅亡確定かあ。自分でも思ってたけど、人に言われると堪えるな」

「あん？　なんか言われたのか。気にすんなよ。バカっていう方がバカなんだって、勝家のとつっあんが言ってたぜ」

「それ、賢い奴のセリフじゃないよな。あーあ、結構がんばってるつもりなんだけど、まだまだ街中の噂はこんなもんか」

次男を倒して尾張の大名になったものの、なかなか好転しない自分への評価に、信長君は肩を落としました。

一方。秀吉君は尾張の街で運命的な出会いをしました。

といっても、相手は秀吉君とであったとはかけらも思っていないん。

「あ、あれは誰でヤンス？」

なんでもないかんざし屋の入り口で、なぜか黒山の人だかりができていました。

人だかりができるのも当然でしょう。そのかんざし屋には、戦国一の美少女、お市が来ていたのですから。

「うーん。店に来ればもつといいのがあると思ったけど、あんまり変わらないわねー」

店を貸し切ってお市は買い物に来了ました。

貸切られた店の外には、一目お市を見ようとしているやじ馬でいっぱいでした。その野次馬の一人が、秀吉君です。

「な、なんて美しい。まさに天女でヤンス。可愛さの宝石箱でヤンス」

「そりゃそうさ。あの方は尾張の誇る超絶美少女、お市様だぜ」

「おお、あの人がお市さまでヤンスか。なるほど。噂にたがわぬ……いや、噂以上の……いや、もう口に出すのもはばかられるほどの美しさ……」

「ああ、兄の信長様も最近はそこそただけど、やっぱり妹のお市様にはかなわないな」

やじ馬の言葉に、秀吉君は二度も二度も頷きました。

「お市様……。ああ、お市様。麗しゅうでヤンス」

秀吉君の視線は完全に釘づけられていました。

翌日のこと。信長君が出かけようとしたら、ぞつり取りに見慣れないサル顔の小男がいました。

見かけない顔ですが、知っています。

「あれ？ お前は……」

昨日、街中で信長君をくそみそに評価していた男こと、秀吉君です。

「オイラは、秀吉と申しますでヤンス。今日から信長様の草履取りとして働くことになったでヤンス。今後ともなにとぞよろしくお願いするでヤンス」

「いや、いいけど。お前、美濃はいいの?」

「何のことでヤンス?」

秀吉君は、信長君が昨日話した若者だとは気付いていません。信長君は変装してましたから。

「いや、まーいいけどさ。頑張れよ」

「はい、頑張るでヤンス!」

こうして秀吉君は、信長君の家臣になりました。

第五話 『戦国おじゃる丸が攻めてきた』の巻

今川さんちの義元君こと、戦国おじゃる丸がついに尾張へと進行してきました。

「ほっほーい。邪魔するものは踏み潰すでおじゃる〜」

戦力比はだいたい10対1。ふつーに考えれば、勝てるわけがありません。

信長君は考えました。

「よし、奇襲作戦だ。軍隊が伸びきる桶狭間あたりで戦うぞ」

家臣たちは平伏してその指示に従いました。

「まず勝家！」

「わ、わかってるんだな。お留守番、頑張るんだな」

信長君は立ち上がり、勝家君の頬をビンタしました。

「筆頭家老のお前が留守番してどうするんだよ。おい、鬼柴田！」

「き、奇襲は苦手なんだな。山道はおでが進むには狭すぎるんだな」

「奇襲ができないくらいまで太るな！今回は伸るか反るかの大一番なんだ。絶対来いよ！」

「わ、わかつたんだな」

しぶしぶ勝家君はうなずきました。

「あと、利家！」

「おう、めっちゃめっちゃ目立ってやるぜ！」

信長君は今度は利家君の頬をビンタしました。

「奇襲って言ったろ！ 目立ってどうするんだ。目立たない服に着替える」

「えー、じゃあ目立たなくねえ？」

「だから、目立っちゃダメなんだよ！」

「ちえ、信長のアニキは厳しいな。わかったよ」

しぶしぶ利家君はうなずきました。

「あと秀吉」

「はいでヤンス。頑張るでヤンスよ」

「……裏切るなよ」

「ええー！ 信長様それはないでヤンス。オイラは信長様のベスト
家来でヤンスよ」

「いや、だつてお前……」

秀吉君が、初めは戦国おじゃる丸の家臣になろうとしてたことを、信長君は知っています。

「まあいいや。全力を尽くせ」

「当然でヤンス。裏切りなんて、考えも……しないでヤンス」

「おい！ いま一瞬考えたなかつたか？」

「き、気のせいでヤンス」

秀吉君は平伏しました。

シンとなる軍議部屋。

どーにもこーにも、士気が上がりません。

「よし、じゃあ士気を盛り上げるために、俺が敦盛でも歌ってやる
う」

『人間五十年、化天のうちを比ぶれば……』そんな重苦しい歌詞の敦盛が、信長君は大好きです。

ノリノリで鼓を用意させましたが、いつも聞かされている家臣たちは嫌気がさしています。

「あ、あんまり聞きたくないんだな」

「アニキ、それはいいよ」

「まあ、信長様が歌いたいのであれば、黙って聞くでヤンス」

評判は芳しくありません。むしろ士気はさっきより下がっています。

「なんだよ。いい曲だろ敦盛。なあ!」

「ま、まあ」

曖昧に誰かが頷きました。

盛り下がる軍議のさなか、障子が開かれました。

「あ。……お市」

そこには戦国一の美少女、お市がいました。

尾張の国の危機と聞き、さすがにお市も心配になってやってきたのです。

お市はバカだった兄が大嫌いでしたが、最近は頑張っていますし、何より今信長君ががんばらないと、尾張の国は滅んでしまうのですから。

「ひ、久しぶり」

信長君は緊張してしまいました。実の妹だというのに。

「お兄様。このたびの戦、市は戦勝を祈願しております」

「あ、うん。がんばる、よ」

超絶美少女のお市が三つ指を突いて頭を下げると、もう信長君はガチガチです。

(まだまだ、格が違うな)

緊張しながら、信長君はそう思わざるを得ませんでした。

大名と姫。進む道は違えども、格の大小には違いはありません。

でもこの戦いで戦国おじやる丸を倒せば、もしかしたらその差は縮められるかもしれせん。

そうすれば昔のように兄妹で気兼ねなく話しかけられるようになることでしょう。

(よし、頑張るぞ)

「お市、俺は……」

「うばおお！ お市様、おで、頑張るんだな。鬼柴田、超頑張るんだな。奇襲大好きなんだな」

主君である信長君を差し置いて、勝家君がお市に必死のアピールをしました。

勝家君は既にオッサンなんです、ロリコンなので戦国一の美少

女のお市が大好きです。

「オイラもお市様の為に頑張るでヤンス」

同じく、お市のために信長君に仕官した秀吉君もアピールを忘れません。

というか家臣たちはみんなお市が大好きなので、お市の周りに取り巻きのように集まって自分をアピールしました。

家臣たちがお市の周囲に行って盛り上がる一方。

ポツンと、主君である信長君は取り残されました。

「……ほんとに、格の違いを、思い知らされるな」

呟くように信長君が言いました。

「気にすんなよ信長のアニキ。俺がついてるぜ」

ポンポンと、竹馬の友の利家君が肩を叩きました。

「利家、お前はいいかないのか？」

「ん？ 俺はもう、まっぴらだからな」

利家君は小指をたてながら言いました。

「え？ お前、彼女いるの？」

「彼女ってーか。毎日、超やりまくり。たぶんもう子供もできてると思う」

「はああああ！？　おい、聞いてないぞ！」

「来年には結婚予定」

「いや、遅いだろ！　子供産まれる前に結婚しろよ。ってーか、その前に彼女が……やりまくりって……。ツッコミがおっつかん！」

彼女いない歴〃年齢の信長君は、髪を振り乱しました。

「まま、結婚はできとーでいーじゃん。まっは俺のペースでいいって言ってくれてるし」

「いや、ダメだろそれ！」

信長君は深呼吸しました。

そして気を取り直して、信長君はお市の取り巻きと化している家臣たちの注目を集めようと思いました。

注目を集めるのは、やはり歌しかありません。

「よし、やっぱりここは敦盛しかないな」

膝をポンとうち信長君は言いました。

「いや、だからそれはやめとこーぜ。むしろ盛り下がし」

「そ、そうかな？」

「そうだって。心配するなよ、こんなこともあるつかと、まつがいのを用意してくれた」

利家君は、半紙を信長君に渡しました。半紙には歌が書かれています。

「なんだこれ？」

「まつが信長のアニキにつて。作曲してくれたんだ。美人だし、可愛いし、センスもいいし。俺にぴったりの超嫁だな」

「はあ、そうか」

「俺が鼓やるから、信長のアニキは歌ってくれよ」

「いや、でも俺は敦盛が……」

「敦盛なんて古臭いつて。今はオリジナルソングの時代だぜ。まつPが作った曲を「歌ってみた」してくれよ」

「う、うん。……わかった」

良かれ悪しかれ『古い』という言葉が大嫌いな信長君はその言葉に動かされました。

信長君は利家君の鼓に合わせて歌い始めました。

「尾張の信長のテーマソング」作詞作曲 まつP

赤い夕陽に駆け巡る

赤い母衣衆ここにあり

黒い闇夜の中でさえ

黒い母衣衆われもあり

ああ、あいつは、誰だ

ああ、あいつは あいつは あいつこそーは！

尾張の守護大名、信長！！

「……なんか、いい歌だな」

信長君は基本的なセンスはぶっとんでいるので、この曲を気に入りました。

歌が母衣衆だったの利家君視点であることも気にはなりますが。

「やっべ。さすがまつ。俺の嫁、超かっこいいな！」

信長君に輪をかけてぶっとんでいる利家君は、なんにも考えずにもノリノリです。

いきなり歌い始めた信長君に、家臣たちも驚きながら寄ってきました。お市と話せたこともあり、盛り上がりも好調です。

「よし！ 奇襲だ。桶狭間に行くぞ！」

「おっしや、行くぜ信長のアニキ！」

「わ、わかつたんだな。頑張るんだな」

「ヤンスヤンスヤンスう！ お市様の為、ついでに信長様の為に頑張るでヤンスよ！」

のりにのる信長君の軍勢。

そして桶狭間にて……。

「突撃！」

「負けたでおじゃる〜」

拍子抜けするほどあっさりと戦国おじゃる丸を打倒し、信長君は大名としての地位を着々と築いていくのでした。

第六話『お市と蘭丸君』の巻

戦国一の美少女、お市は迷っていました。

最近、兄である信長君が気になってしかたがありません。

(昔はあんなにおバカだったのに、どうしたのかしら)

お市は不思議でした。

信長君が、戦国一の美少女にして教養もあるお市に追いつこうと頑張っているなんて、お市は知る由もありません。

その信長君が、ついに東海の覇者である戦国おじやるまる丸を倒したのです。大名への第一歩を踏み出したといっても過言ではないでしょう。

(ほんと、いったいどうしちゃったのかしら)

兄はバカな人。そんな風に思っつと生きてきたお市にとって、常識が改変されていくようで居心地がよくありません。

信長君が気になって仕方がないのです。

「ふう」

お市はため息をつきました。

侍女の一人である男の娘、蘭丸君が心配して、お市に話しかけま

した。

「押忍。お市様、いかがしました？」

蘭丸君は見た目は完全な美少女なのですが、れっきとした武士です。

剛の者ぞろいの森家の次男坊なので、実力もあります。ただし「女装していないと死ぬ！」という本人の強い要望により、侍女の格好をしているのです。

本人の希望は信長君の小姓になることなのですが、信長君が断固断りお市のボディガード兼女官として仕えています

「蘭丸、お兄様って、最近どうしちゃったのかしら？」

「押忍、信長様はかっこいいですね。ぜひ自分の菊座を捧げたいと思っております」

蘭丸君は、信長君が大好きです。

一方、信長君は男色のけが一切ないので蘭丸君を遠ざけています。

「……あなた、男らしいんだか女々しいんだか、よくわからないわね」

「押忍、光栄です」

「褒めてないんだけど」

蘭丸君とお市が並ぶと美少女二人の談笑という図になって周りの者が話しかけずらくなるのですが、話している内容はいつもこんな感じですよ。

「ねえ、お兄様ってモテるの？」

「え？ 信長様は超絶かつこいなので、蘭丸抱かれない男ランキングではぶつちぎりの首位独走ですけど」

「いや、あなたのランキングはどうでもいいの。世間的には、どうかしら？」

「世間的………。いや、世間的にはあれは、草食系男子というか、喪男というか、そんなのですね」

「モテて、ない？」

「ないですね。まったく」

「そう、そうなんだ。ふふ、そこらへんは昔のままのお兄様ね」

お市は笑いました。昔のおバカなままの信長君を再発見できたみたいで、嬉しかったのです。

「気になるんですか？」

「き、気になってなんかいいわよ！ バカじゃないの。おバカ！ 蘭丸おバカ！」

「押忍、申し訳ございません」

蘭丸君は平謝りしました。

しばらく怒って息を切らしたお市は、また呟きました。

「お兄様モテてないんだ。じゃあまだ彼女いない歴更新中かな？」

「心の彼女としては、蘭丸がいつでも控えておりますが」

「いや、そういうのいいから」

「ふむ……、確かに、彼女いない歴は更新中ですな。大名になったのに正室も側室もないですね」

「うふ、よっぽどモテないのね。しょーがないな！。お兄様は。うふ、うふふふふふ」

「うれしそうですね」

「そっ？」

「押忍、蘭丸も嬉しいです」

「そっなの？」

「お市様が笑っていると、信長様は嬉しいと言っていました。信長様が嬉しいことは、蘭丸も嬉しいのです。押忍」

「ふーん。そう」

お市は眩きました。

その信長君に、お隣的美濃から結婚の申し出がやってきたのは、
翌週のことです。

相手は美濃の大大名。マムシの道三の娘、濃姫。相手に不足は、
全くありません。

第七話 『信長君、結婚を決意する』の巻

信長君に、結婚の申し出がやってきました

お相手はお隣の美濃の大名、マムシの道三の娘の濃姫です。

「け、け、結婚の申し出だと?!」

信長君は自分にやってきた驚きの状況に動揺をかくせませんでした。

モテない歴〓彼女いない歴〓年齢の信長君にとって、急激すぎる変化です。

「と、利家。どうしよう」

「いいんじゃないの? 信長のアニキもここいらでどーんと正室を
持てば」

「いや、しかし。こういうのはまずお付き合いをして、徐々に相手の
気持ちを確かめ合っただなあ……」

「じゃ、そーすりゃいいじゃん」

「そ、そうだな」

信長君は「まずはお友達から始めませんか?」という返信書状を
書き上げました。

書き上げたものの、信長君はちょっと不安です。

利家君も常識がないので、相談相手になりません。

そこで信長君は、一応諸国を放浪した経験のある秀吉君に聞いてみることにしました。

「……ということだ。秀吉、どう思う？」

「ふむ、この書状だと、相手は100%断られたと思うのでヤンスな」

「そうか？」

「当たり前でヤンス。結婚申し込んでお友達から始めましょうじゃあ、話にならないでヤンス」

「むー。難しいな」

「どーんと受けちゃえばいいでヤンスよ」

秀吉君の意見も利家君と違いはありません。

確かにママシの道三は強力な大名なので、婚姻関係を結ぶのは正しい選択にも思えます。

しかし……。

「あ、信長様」

「なんだよ秀吉」

「ついでだから言いますが、オイラも来月結婚するでヤンス」

「はあ！？ お前が？」

サル顔の秀吉君を、信長君がまじまじと見ました。顔で言つなら信長君の方が美男子のはずです。

「あ、あいては？」

「ねねでヤンス」

ねねは尾張城下町でも評判の器量よしの娘です。

「うそ！ 全然釣り合わないだろ」

「そんなことないでヤンス。ねねはオイラの魅力にメロメロでヤンスよ」

「う、むう」

本人がそういうのでは、どうしようもありません。

「新居は利家殿のお隣に住むことにしたでヤンス。ついでだから利家殿もまつ殿とおんなじに日に結婚することにしたでヤンス。ダブルウェディングでヤンスよ」

「え？ 利家からはなにも聞いてないぞ！」

「利家殿はあんまりそういうことを気にしてないので、こっちで全

部手配をしてるでヤンス。あとで結納の案内状を出すでヤンス」

信長君は一気にいろいろな新情報がやってきて混乱してしまいました。深呼吸をして、まずは気分を落ち着くかせます。

「……………えーと、だ。俺は新郎の上司として、スピーチしないといけないのか？」

「もちろんでヤンス。とうか信長様は仲人ということにしているでヤンスから、よろしく頼んだでヤンスよ」

「え、仲人って。結婚式あげるのを聞いたのは今日なんだけど」

「だから今、ちゃんと頼んだでヤンス。よろしくお願いするでヤンスよ」

「う、むう。わかった」

「はいでヤンス。それで信長様の方でヤンスが……………」

いろいろと周囲の変化を聞いた信長君は、自身の覚悟も決めました。

「いい、俺も決めた」

「お？」

「結婚する！ 秀吉、俺も結婚するぞ！」

「おお、その意気でヤンス。信長様、頑張るでヤンスよ」

「おおよ！ ……………時に秀吉。内密に聞きたいことがある」

「なんでやんしょ？」

信長君は、秀吉君を呼び寄せて耳打ちしました。

「濃姫って、マムシの道三の娘だよな？」

「それでヤンス」

「青大将みたいのが来たら、その場で追い返しちゃダメかな？」

「もちろんダメでヤンス」

「ダメか？」

「ダメでヤンス。もし青大将が来たときは…………」

「来たときは？」

「覚悟を決めて、青大将の旦那さんになるでヤンス」

信長君は頭を押さえて、畳の上でジタバタしました。

「やっぱりかー。くそー、お前も利家もずるくないか？ 美人の嫁さんもらって。なんで大名の俺が、見たことない娘なんだよ」

「器量については聞いたことないでヤンス」

「うっ、それはやっぱり……」

悪いから、と言おうとした信長君を、秀吉君は手を横に振って否定しました。

「違うでヤンス。尾張にすむお市様が有名すぎるから、隣国の姫の評判は全然伝わってこないでヤンスよ」

「ああ、そういうことか……」

お市の美貌は、すでに京でも評判になっているほどです。

お市の凄すぎる評判の前では、隣国の姫の評判なんて霞となって消えてしまつてしょう。

「お市、か」

「ん どうかしたでヤンスか？」

「いや、俺が結婚するって言ったら、お市がどう思つかないと」

「どうも思わないと思うでヤンスよ」

「いや、そのちょっと嫉妬とかしたりとか」

「はっはっは。ありえないでヤンス。気にせず結婚して問題ないでヤンス」

「そうか、気にする必要ないか」

「ぜんぜんないでヤンスよ。お市様は、信長様なんて眼中ないでヤンスから」

「はっは、そうかそうか」

「それでヤンス」

「はっはっは」

「はっはっはでヤンス」

「はは……………秀吉、お前降格。明日っからまた草履取りで再スタートな」

「ええええ！ そんな。ようやく足軽頭になれたのに。ひどいでヤンスよ、信長様」

「ダメ。もう決めた」

こうして、信長君の結婚がきまりました。お相手は濃姫。尾張であつたことがある人は、誰もいません。

第八話『信長君、結婚する』の巻

今日は信長君の結婚式です。

元々ちーっともモテたことがない信長君は、ガチガチに緊張していました。

ぶるぶる震えながら、隣にいる利家君の袖を引っ張りました。

「とととと利家。おおお、俺、へんなとこ、ないか？」

「緊張しすぎだよ、信長のアニキ。大丈夫だって」

「そ、そ、そ、そんなこといってもだな」

信長君の情けない様子に、秀吉君も口を挟んできました。

「もっとどっしり構えてほしいでヤンス。信長様は尾張の国の大名なんでヤンスよ」

「お、おう。わかった」

信長君は形だけは重々しく、深く腰を落ち着けました。

「おけーでヤンス」

「いい感じだぜ。信長のアニキ」

その時、障子が開かれ、一人の少女が入ってきました。

いよいよ来たか、と中腰になった信長君の目に入ったのは、妹のお市です。

「あ、お市」

「お兄様、祝言を上げるそつで。おめでとつございます」

「あ、うん。ありがと……」

信長君はふと、結婚のことを全くお市に相談していなかったことを思い出しました。

理由は『忙しかった』というのがなくはないのですが、仮に忙しくなかったからといっても、超苦手分野である女性関係の相談を、信長君は妹のお市にはしなかったでしょう。

そしてお市の顔は、最近見たことがないくらい冷徹な感じですよ。

まるで昔に戻ったかのような、冷たい冷たい様子です。

（気にしてるかな）

信長君は覗き込むようにお市の顔を見ました。

お市は無表情です。無表情でも戦国一美しいその容姿は、影を差すどころかまた別の美しさがあります。

「お市。あの、さ。もしかして……」

「はい？」

「もしかして、もしかすると」

「早く言ってください」

「結婚のこと相談しなかったの、怒ってる？」

「……なぜ、そう思うのですか？」

「いや、その……なんとなく」

「そうですね。残念ながら、はずれです。市はお兄様がどこの馬の骨と結婚しようが、ぜんぜん気にしてません」

「あ、う」

「どーぞご勝手に」

「う、うん」

（めっちゃ怒ってるっ）

信長君は秀吉君を呼び寄せました。

「おい、市は俺が結婚することを怒ってるみたいだぞ。話が違ったりしないか！」

「あれね？ うーん。多分、思春期にありがちな情緒不安定でヤンスよ」

「そ、そうなのか？ やっぱり相談しといたほうがよかったかな？」

「いや、ここはあえて突き放すでヤンスよ。冷たい態度をとって、後でそつと抱きしめるでヤンス」

「おお！ それいいな」

「ただ信長様は新婚なので、抱きしめる役はオイラがやるでヤンス。オイラも家には新妻のねねがいるでヤンスが、これも宮仕えの辛いところ。任せてほしいヤン……」

信長君は秀吉君の鼻っ面を思いっきり裏拳で殴りつけて、話題を中断させました。

鼻血を噴出させる秀吉君。

さておき、別の少女が部屋に乱入してきました。

「押忍、信長様。本日はおめでとつございます」

「うわ 蘭丸！」

姫衣装を着た美しい少女……に見える男子。尾張随一にして唯一の男の娘、蘭丸君です。

そして蘭丸君は信長君が大好きです。

「信長様は魅力あふれる男子。いつかは結婚なさると思っておりました。これも仕方のないことです」

「ああ、うん。だから俺のことはもう諦めて……」

「蘭丸は側室でも全然オツケーです。夫婦関係がこじれて悶々とした夜は、ぜひ寝室におよびください。押忍」

「お前、それは結婚式にいう言葉じゃないだろ！」

「あと蘭丸は性別上は男子です」

「いや、性別上も何も、お前は100%まじりっけなしに男子だろ」

「だから戦場にもお供できません。押忍」

「……で？」

「悶々とした戦場の夜には、ぜひ陣幕におよびください……」

「蘭丸、お前も帰れ！」

「そつよ、蘭丸。帰るわよ」

お市も立ち上がりました。

そうです。蘭丸はお市のボディガードでもあるので、蘭丸が帰るといふことは、お市も帰るといふことです。

「あ、いや。違つぞ。蘭丸に帰れといったんで、市はいてもいいんだ」

「いえ。もうお暇いたします。それでは」

去ろうとするお市。

信長君は立ち上がり、勇気を出して言いました。

「お市。俺は今日結婚するけど、お市は俺の一番大切な妹だ。一番大切にしている妹だぞ」

それは信長君の偽らざる本音でした。この点に関して、少年期から信長君は変わることが一切ありません。

「……お兄様」

少し振り返り微笑むと、お市は去っていきました。ついでに蘭丸君も。

信長君は糸が切れたようにどっかりと座りました。

しばらくして、美濃から濃姫がやってきたというしらせがききました。

信長君がいる隣の部屋。

退出したはずのお市は、こっそりとここにいました。

「蘭丸、ここなら隣から気づかれないわね？」

「押忍。絶対に大丈夫です」

「そう」

「お市様も、ちょっとドキツとしちゃったんじゃないですか？ 信長様の最後の言葉には？」

「そ、そんなことないわよ」

お市は真つ赤になつて否定しました。なぜ顔が赤くなつてしまうのか、自分でもよくわかりません。

「蘭丸も信長様にあんな言葉をかけて欲しいです。そしたら蘭丸は、もう地獄の底まで信長様とお供できます」

「あなたは幸せね。でも私はそこまで単純じゃないわ」

「押忍。なぜですか？」

「お兄様は最近頑張つてきてるけど、根はとーってもおバカなの。それに男はみーんなスケベなの」

お市は偏つた世界観を持っていました。ただ信長君は確かにおバカであった期間が長かったですし、お市のそばに来る男性はほとんど下心があります。

「そうとは限らないと思いますが」

「そうよ。絶対そう」

「そうですか？」

「だこうやって隣に潜んでいれば、絶対にボ口を出すわ。私がいる時だけキチンとしようとしても、無駄なんだから」

「お市様、信長様はそういう人ではありません」

「黙って。いい？ 今にわかるから……」

隣から信長君の声が聞こえてきました。

ワイワイ、ガヤガヤ。

「いや。美人だ美人だ。素晴らしい。濃姫は本当にお美しい」

「そんな、信長様。濃は照れてしまいますわ」

「いやいや。照れる姿も美しい。なあ、秀吉！ 利家！ ねねやまつにも負けていないだろ。なあ！」

「はっは。……いつそほんとに青大将が来ればよかったでヤンスに……」

『ははは……調子に乗りすぎだぜ、信長のアニキ……』

『いや美しい。本当に美しい。この人が俺の正室になってくれるなんて。今日はなんていい日なんだ』

『もう、そこまで言うただけだと。濃もつれしゅつごいませす』
ワイワイ、ガヤガヤ。

隣の部屋では、信長君が人生初のモテ期を満喫していました。

啞然とするお市と蘭丸君。

「……………予想以上だったわね」

「押忍。ちょっと予想の斜め下をきました。いやでも蘭丸はそんなダメダメな信長様もラブですよ」

「あ、そ」

こうして信長君は美しいお嫁さんを得ると同時に、大好きな妹からの評価ポイントを大幅ダウンさせたのでした。

第九話 『信長君、離婚の危機』の巻

秀吉君は農家出身ですが、野心のある男です。

「いつか武士になって、一国一城の主になるでヤンスよ！」

その甲斐あって今のところ尾張の武士にはなれたのですが、一城の主となるとなかなか難しいです。というか、農家出身の一介の武士ではとても不可能です。

(でもお城を持ちたいでヤンスよう！)

悶々としている日々を過ごしている秀吉君でした。

そんな中、信長君とお隣の美濃との仲が一気に険悪化して、緊急軍議が開かれることになりました。

「あれ？ 一昨日、濃姫様とご結婚なされて、美濃とはハッピーフレンドになったんじゃないかなかったでヤンスか？」

秀吉君が当然あるであろう質問をしました。

「むうー」

秀吉君の問いに、信長君は仏頂面です。

それ以上に、お隣にいる清楚な感じの濃姫は、ふてくされて唇を尖らしています。

またその一方に座るお市と蘭丸君は、うつむいたままじっと下を見していました。

秀吉君はおるか、他の者もわけがわかりません。

信長君が仏頂面のまま、状況の説明をしました。

「今朝、美濃から連絡が来てな。濃のおやじ殿、つまりマムシの道三が……」

「ええ」

「……息子の下剋上でコロツと殺された。美濃は現在、息子の義龍が治めてる」

「へ？ でヤンス」

「ぼかーんとする秀吉君。」

義龍君は、父親である知恵に長けたマムシの道三とは全く異なり、血気盛んな猛将です。

「義龍は我々との同盟を破棄するそうだ」

「え、えーと。そうするところちらの濃姫は？」

秀吉君が唇を尖らしたままの濃姫を指さしました。

「義龍からの書状によれば『離縁するから美濃に送り返せ』ということだ」

「……はあ、なるほど」

下を向いていたお市が肩を震わしました。

「ぷっぷぷぷ。ダメ、もう我慢できない。お兄様、あんなに喜んでたのに。二日で離縁。ぷぷぷ」

「笑っちゃ悪いですよ。お市様」

「でも蘭丸。お兄様ってよーやくモテ期が来たのに。美人のお嫁さんだって自慢してたのに。新婚旅行どころか、50時間も持たなかった。ぷぷぷぷぷ」

どうやらお市が下を向いているのは、笑いをこらえていただけのようです。

家臣たちもまた、全員結婚式での信長君の浮かれっぷりをみていたので、その点では笑えました。が、国元に送り返される濃姫を思うとシャレにならないので、笑うことなんてさすがにできません。

「えーっと。では濃姫とはいっ離縁をなさるので？」

「う、む」

信長君は濃姫を見ました。

唇を尖らせたまま、それでも濃姫は気丈にしています。昨日までと異なり、今日から尾張はまた敵陣に変わったからです。

「ええと、濃」

「呼び捨ては気やすづいざいます。信長様」

「あ、ごめん……」

信長君はしょぼんとなりました。

「それでね。濃姫。ちょっとひどいことを言っていていい？」

「はい」

「じゃあ、言っよ」

「どうぞ。覚悟はできております」

濃姫は背筋を伸ばし信長君のまっ正面を向きました。

「うん。……濃姫の故郷。美濃を滅ぼすけど、いいかい？」

「……………え？」

家臣全員の視線が信長君に集まりました。

「俺はさ、欲張りなんだよね。もらったものは返したくないんだ。

濃姫はもう俺がお嫁さんにん貰ったんだから、絶対に返したくない。まして父殺しのところなんて、もってのほか。だから美濃を滅す。濃姫は絶対に返さない」

「そ、その……………」

濃姫は返事をする事ができませんでした。言葉の代わりに、濃姫の目からは涙があふれて頬をつたいました。

「ごめんね。泣かせちゃった」

「いえ、信長様、これは違うのです」

濃姫は深く深く信長君い頭を下げました。

「どうぞ、信長様のお気の召すままに。よろしくお願いいたします」

「侵略するよ?」

「どうぞ」

「お兄さんの義龍は、たぶん生かしておけないよ」

「はい。濃は、尾張の住民です。信長様に生涯従わせていただきませす」

「うん、わかった」

「それと一つだけ」

「うん?」

「なにとぞ、なにとぞ亡き父の仇を討ってくださいませ。濃の希望は、それだけでございます」

父を失った娘である濃姫が涙ながらに言うと、信長君は濃姫をそっと抱きしめました。

と、そこで信長君が、今は軍議中でありこのラブロマンスを家臣全員が見ていることに気が付きました。

「ひゅー　やるねえ信長のアニキも」

「感動したんだな。感動したんだな」

「いや、よいものを見せてもらったでヤンスよ」

利家君が大喜びで指笛を吹き、勝家君が大げさに拍手をし、秀吉君が笑いながら冷やかしました。

その中で、一人テンションが下がっている人がいました。

「……本気？　お兄様？」

お市です。

お市の方は先ほどまでの笑い顔から一変して、冷徹な顔で信長君を見えています。

「おおともさ。一度娶ったお嫁を、おめおめ返せるか！」

どや顔で見えを切る信長君。家臣たちがやんやんやと盛り立てました。

「ふーん」

お市はポリポリと髪を掻きました。

なんだか先ほどまで信長君と濃姫を笑っていた自分が、どうしようもなくかつこ悪く思えてきました。

照れ隠しに何か口を開いても、憎まれ口しか出てきなそうです。

(これってもしかして。私はお兄様の度量に負けたのかしら?)

それはお市が生まれて初めて感じた、おバカな兄、信長君への敗北感でした。

「そう……頑張って」

お市はそう一言だけ口にして、立ち上がりました。

まるで捨て台詞のようですが、『頑張ってほしい』という言葉に嘘はありません。

「ああ、頑張るよ」

「うん」

お市は部屋を去っていき、あわてて蘭丸君もその後を追いました。

濃姫もまたさすがに軍議お開始と合わせて離席しました。

「よし、美濃攻略だ！」

「おお。それで信長のアニキ、誰が行く？ どう攻める？」

「うーん」

信長君は肝心のところで頭を掻きました。

美濃はマムシの道三が築いた難攻不落の城砦と化しており、攻めるのは一苦勞です。

とにかく川が多く、とがしている最中に弓を撃たれたらひとまわりもありません。

「墨侯あたりに城を建てられれば、楽になるんだな」

「むー。あそこか」

利家君は築城の知識はからつきしですが、それでも墨侯という急な川と川に挟まれた三角州に城を建てるのがどれだけ大変だかわかります。

「あんなところに城は、建てられないんだな」

一応、築城の心得もなくはない筆頭家老、勝家君も当たり前前意見を述べました。

「しかしあそこに城があればなあ」

「ねえものを言っても仕方ねえだろ。しっかりしよつぜ。信長のアニキ」

「墨侯城が立てられれば、建てたやつを城の城主にしてやってもいいんだが……」

信長君の一言に、秀吉君は激しく反応しました。

千載一遇のチャンスです。

幸運の女神の前髪を、秀吉君は初めて見ました。

「はい、オイラがやるでヤンス！」

秀吉君は高く高く拳手をしました。

「おお、秀吉。やってくれるか!？」

「もちのロンでヤンス。任せてほしいでヤンス。成功すれば城主にしてくれるのは、間違いないでヤンスね」

「ああ、約束する」

信長君も報酬をキチンと約束しました。こうして秀吉君は、美濃攻めの為の墨侯築城の任を受けたのでした。

第十話『シンデレラお市』の巻

尾張が誇る絶世の美女、お市が城の外にある自分のお屋敷の縁側でぼけーとしていました。

お市の脳裏には、たった二日前に来たばかりのお嫁を離さないとお見得を切った信長君のことが離れません。

朝からお昼近くなっても、ぼけーっとしたまま縁側に佇んでいました。

さすがにお屋敷の者が心配しました。

そこで尾張が誇る絶世の男の娘（兼お市のボディガード）の蘭丸君がお市に話しかけました。

「押忍。お市様」

「……」

返事ありません。

「お市様！」

「……」

かなり大声で言っても、返事ありません。

「……信長様……」

「へ！ お兄様？ どいどい？」

そうとう小声で言った呟きに、お市は反応しました。

でも信長君がいないとわかり、お市は恥ずかしそうにうつむきました。

「押忍、お市様。信長様が気になるなら、お城に行ったらどうですか？」

「い、いいわよ別に。お兄様なんて気になんかしてないし」

「我慢は毒ですよ」

「我慢なんてしてないもん」

「してませんか？」

「してないって言うてるでしょ！ バカバカ、蘭丸おバカ！」

「……押忍、すみません。じゃあお市様は、今日はお出かけにならないのですか？」

「でーまーせーん」

「絶対？」

「でー！ まー！ せー！ んー！」

「押忍。そうですね。それでしたら蘭丸はお出かけします」

「なによ。蘭丸は何か用があるの？」

「ええ。お市様がお屋敷でおとなしくしているのでしたら、ボディガードの蘭丸は必要ないでしょう？」

「まあ、そうね」

「じゃあ蘭丸はお城に行きます。愛する信長様に会ってきます」

「え！　ずる……」

ニヤツと蘭丸君が笑いました。それを見てあわててお市は否定しました。

「……くなんてないわよ。いってらっしゃい」

「そうですね。では、行ってきます」

「う、うん……」

お市は目を伏せて、手を振りました。

「ああ、ところでお市様」

「え？　いいわよ。べつにそんな。私はお城には一緒に行かないわよ。お兄様に用事なんてないだから。ほんとよ。嘘じゃないんだから」

「別にそんなこと言ってません」

「なんだ。そうなの」

「ええ。実は勝家様から伝言を頼まれているんです」

「え？ 勝家が、なによ？」

「ファンクラブイベントに使うので、色紙にサインをして欲しいそうです」

「……は？」

聞きなれない言葉です。

というか、聞いたことない言葉です。

「ファンクラブって、誰の？」

「もちろんお市様です。勝家様はお市様のファンクラブを作られたそう。会員1000名突破を記念して、ファンクラブイベントを開くそうです。その為にぜひ色紙にサインをして欲しいと言っていました」

「はあ〜」

ぼかんと口を広げたまま、お市はうなずきました。いろいろと言わなければならないのですが、出てきた言葉は一つでした。

「あのオッサン、なに考えて生きてるの？」

「押忍。それは蘭丸にはわかりかねます」

「まあ、いいや。どうでも。……色紙、ねえ。サインなんてしたことはないんだけど」

「色紙はお城にあるから、できれば取りに来てほしいと言っていました」

蘭丸君の言葉に、お市は大声を張り上げました。

「はあああ？　なんで私が取りに行くのよ。自分で持ってくるのが筋でしょう！」

「押忍。蘭丸もそう思います」

「そうよね！」

「では勝家様にはそうお伝えしますね」

「ええ！　というかサインなんて断るわ……」

「あ、断ります？」

蘭丸がわざわざと確認しました。

しばしお市は黙って考え、自分の意見を引っ込めることにしました。

「……いや。まあ、いいわ。気が変わった。サインしてあげる。色

紙も受け取りに行つてあげる」

「そうですね。」

「あくまで、あくまで色紙をとり！ お城に行くわ」

念を押すお市の言葉に、蘭丸君はにこつと笑って頭を下げました。

「押忍。では一緒にいきましょ」

「ええ。……ところで、お兄様はお城にいるかしら？」

「いると思われませう。最近、美濃攻略で忙しいそうですから、軍議部屋にこもっているでしょう」

「そう。ふふふ。頑張つてるのね」

「押忍。信長様は頑張り屋です」

「そうですね。それは認めてあげてもいいわ」

「押忍」

「……話は変わるけどさ」

「押忍？」

「なんで勝家が尾張の筆頭家老なの？ 役に立ってるのを見たことないんだけど」

辛辣にして、尾張の侍たちみんなが考えたことのある疑問を、お市は口にしました。蘭丸君が答えられるはずがありません。

「押忍。それも蘭丸にはわかりかねます」

「後でお兄様に聞いてみようかしら」

「勝家様が泣いてしまうので、やめたあげるのが武士の情けだと思われませう」

「そう。難しいわね」

「男心は複雑なのです」

「蘭丸を見ると、なんとなくそれも納得できるわ。理解したくはないんだけど」

「押忍。蘭丸は男心も乙女心もわかってあげられる、理想の男の娘を目指しています」

「そうなの。まあ頑張ってる」

「押忍。では出かけしましょうか」

「ええ。あ。ちょっとまって少しお化粧直してから行くから」

「では蘭丸も一緒に化粧直しをします。もしかしたら夜に信長様にお呼ばれするかもしれませんので」

「それはないわよ。ぜったい」

「こうしてお市と蘭丸君は、今日も仲良くお城に行きました。

そんなこんなでお城の軍議室そばの廊下。

お市と信長がばったり出会いました。

「お、お兄様。こんにちわ」

「よう、お市。こんにちわ。最近、よく城で見るね」

「べ、べつにお兄様を見に来ているわけじゃないわよ。勘違いしないでよね!」

「う、うん。しってる。そんなこと言ってないだろ」

「言って……ないわね」

「ないよ」

「そう、ね。じつはちょっと勝家に用事があつて……」

「うおおお!! お市様あ。おで、お市様に会えて嬉しいんだな」

目ざとくお市を見つけた勝家君が、廊下を走って張ってきました。

デブの勝家君は、走っただけ額から汗が噴き出てきます。

「うわ！ 勝家、いたの。あんまり近寄らないでよ。汗臭いんだから」

「……あれ？ さっき勝家に会いに来たって言わなかったか？」

信長君が首をひねりました。

マズイといった顔をしたお市。言ったと同時に同じような顔をした信長君。

二人はあわてて否定しようとしたが、もはや間に合いませんでした。

お市が大々々だい好きな勝家君が、大興奮しはじめたのです。

「ぶおおお！ お市様がおでに会いに来てくれた。おで、嬉しくって嬉しくって、もう今日死んでもいいんだな！ 死んだってかまわないんだな 君のためなら死ねるんだな！ 赤ちゃんはどこから来るのかな！」

まるで野生動物に戻ったかのように、大声で叫び、暴れながら喜びを表現する勝家君。

もはや危険ですらあるので、信長君は勝家君からお市を庇うようにしました。

(……あ)

信長君とお市の手が触れました。

兄と妹の手が触れる。

たったそれだけのことですが、それはもうはるか昔、幼少期にしかなかったことです。

信長君も気が付いたらしく、顔を赤くしながら、お市の手を握っていました。

「ぎゃあ〜 信長様〜」

蘭丸君が勝家君の巨大な腹に吹っ飛ばされて、中庭に転がっていききました。

第十一話『魔人ハンベール』の巻

秀吉君は弟の秀長君といっしょに美濃へと出かけました。

墨俣に城を築くためです。

「施工はどこに頼むべきでヤンスかな？」

秀吉君が、弟の秀長君に相談しました。

一事が万事できとーな秀吉君に比べ、弟の秀長君は万事そつなくこなします。

「うーんと、築城から公衆トイレまで何でも施工を請け負ってくれる、蜂須賀テクノスに任せるのが一番じゃないでゴザルか？」

「なるほどでヤンスな。じゃあさつそく……」

秀吉君と秀長君は、美濃の南部にある蜂須賀テクノスの本社に足を運びました。

「はい次の方。12番の秀吉さん」

「あ、順番でヤンス」

本社で見積もり依頼をかけて、回答待ちをしていた秀吉君と秀長君。

待合室でかなり待たされましたが、ようやく見積もりが出たよう

です。

担当者は小六君というベテラン営業マン。張り付くような営業スマイルで名刺を差し出してきました。

そして肝心の、小六君から出された見積書を見て、秀吉君は驚きました。

予算の三倍を超える金額です。

「ちょ、これは高いでヤンスよ！」

「もうしわけございません。お客様のお申し出の土地は非常に施工が難しく、土台工事に通常の数倍も費用が掛かってしまうのです」

「むう。しかしいくらなんでもこれは……」

「兄上、信長様から頂いた予算じゃ、絶対足りなくてゴザルよ」

秀吉君の耳元で、秀長君が小声でささやきました。

「むう……なんとか安くならないでヤンスか？ この通り、お願いするでヤンス」

「こちら商売ですので。赤字を出すわけには……」

営業の小六君も、新規の受注は欲しいものの、いきなり値切られて困り顔です。

「なんとか、もうちょっとだけ負けてほしいでヤンス！」

「もうちょっととは、いかほどでしょう？」

「今の金額から……7割引いてほしいでヤンス」

「お客様、お帰りはあちらです」

小六君は冷たく言い放ちました。もはや一切の感情はありません。

「あ、ちょっと待つでヤンス話は終わってないでヤンスよ」

「お帰りください！ はい次の方、13番の一徹様」

こうして秀吉君と秀長君は、蜂須賀テクノスをたたき出されてしまいました。

とぼとぼと美濃の街を歩く秀吉君と秀長君。

「むう、困ったでヤンスよ」

「兄上……さっきお団子を買ってきたときに、ちょっと噂話を聞いたでゴザル」

「なんでヤンス？」

「東にある竹林に、魔法の茶壺が封印されているらしいでゴザルよ」

「……魔法の茶壺？」

「なんでも築城の秘術を封じた壺らしいでゴザル」

秀吉君に、天啓が舞い降りました。もはやこれは運命としか思えません。

「それでヤンス！ もうそれに縋り付くしかないでヤンスよ！」

「でも東の竹林ってだけじゃ、探しようがないでゴザル」

「信長様からもらった、築城の資金があるでヤンス」

秀吉君がにやりと笑いました。

逆に秀長君の顔が青ざめました。

「……まさか」

「このお金を全部、魔法の茶壺探しにぶっこむでヤンスよ！」

「あ、兄上！ それはいくらなんでも無謀でゴザル。茶壺はただの団小屋の噂話でゴザルよ」

「どっちにしてももう時間がないでヤンス。もし茶壺が見つからなかったら……」

「見つからなかったら？」

「出奔でヤンス。近江の浅井家あたりに仕官しにいくでヤンスよ」

「兄上……」

秀長君は説得しようとしたが、結局秀吉君が『押し切って魔法の茶壺探しが開始されました。』

「こんなの、あるはずないでゴザル。自分で言っついてなんでゴザルが……」

「あつたでヤンス！」

「うそお!?!」

秀吉君の手には、黄金の茶壺が握られています。

茶壺のふたをこすると、中から美しい青年が現れました。

『我が名は魔人ハンベール。どのような願いも、三つ叶えてやる』

魔人ハンベールは、ぱっと目にはただの青年だが、異様なほど整った容姿に、病的に白い肌、赤い瞳、鋭い犬歯と爪をもっています。明らかに人間ではありません。

そんな人外な風貌のハンベールと、秀吉君はにこやかに握手をしました。

「す、すごいでゴザルよ。兄上。神がかってるでヤンス。さっそく墨俣に築城を頼むでヤンス」

魔人ハンベールに少しおびえながら、秀長君が言いました。

「うん、そつでヤンスね……いや、その前に。ハンベールさん」

『何かな?』

「三つ願いをかなえたら、ハンベールさんはどこにいくでヤンス?」

『また茶壺に封じ込まれ、茶壺もどこかに飛んでいく』

「そ、そうなんでヤンスか? かわいそつでヤンスね」

『そついう決まりだ』

「じゃあ初めの願い事でヤンス。ハンベールを、茶壺に戻らなくってよくしてあげるでヤンス」

「ちょ、兄上!」

『よいのか!』

「三つも願い事があるんだから、別に一個ぐらいはいいでヤンスよ」

『妙な人間だ。三つしかない願いを、我を茶壺から出すことで使ってしまうとは』

「構わないでヤンスよ。あと二つも願い事をかなえてくれるだけで十分でヤンス」

『ふむ、ありがたい』

「いいことでヤンス。じゃあさつそく二つ目の願い事を言つでヤ

ンス」

『おお、何なりと。できる限り叶えてやるぞ』

「墨侯に城を築いてほしいでヤンス」

「お安い御用だ。ほら」

魔人ハンベールが軍配をふるうと、軍配のさした場所、墨侯に城ができていました。

「おおお！　すごいでヤンス」

「ハンベール妖術『イチヤジヨウ』。如何かな？」

「ばっちりでヤンス！」

『では三つ目の願い事はなになかな？』

「うーんと。今はちょっと思いつかないでヤンス」

『む、それは困る。今日中をお願いしたい』

「えーと、えーと。じゃあハンベール、しばらくオイラの部下になってほしいでヤンス」

『むむ！？』

「ああ、なるほどでゴザル」

ハンベールが驚き、秀長君が「なるほど」と手を打ちました。

魔法を使えるハンベールを部下にしてしまえば、魔法を使ってもらい放題というやり方もありません。

『ふっふっふ。はーっはっは！ 単なるお人よしかと思いきや、意外と奸智に長けているな』

「え？ 何のことでゴザルか？」

秀吉君はわかっていません。

ただ思いついたことを言っただけです。

『我を部下にしたところで、我は魔法をもう使わぬぞ』

「構わないでゴザル。気が付いたことを、たまに助言してもらえば十分でござるよ」

『……なるほど。魔人の魔法ではなく、魔人の頭脳が欲しいということか』

「そう。そんな感じでゴザル」

『ふむ、まあいいよいだろ。封印の茶壺から出してもらった御礼だ。しばらく貴様のお傍にいまするか』

「おお、助かるでヤンス」

『ではあらためて。我の名は魔人ハンベール。コンゴトモヨロシク』

こうして茶壺の魔人、ハンベールが吉君の部下に加わりました。

ハンベールの力によって築かれた墨俣城の力により、信長君は一気に美濃を攻略。秀吉君も無事に墨俣城の城主として、一国一城の主となったのです。

第十二話 『光秀君と濃姫』の巻

信長君の部下には有名な人が四人います。

まずは信長君の幼馴染にして、やたらと強い派手好みの傾奇者、前田さんちの利家君。

「へへ。戦場じゃあどんだけ目立つかが、勝負の分かれめだよ。なあ、信長のアニキ？」

そして織田家筆頭家老のロリコンデブ、柴田さんちの勝家君。

「お市様LOVEなんだな。可愛いお市様の為に、おでは頑張るんだな」

それに足軽から登って行った出世頭、羽柴さんちの秀吉君。

「もつともつと偉くなるでヤンスよう！」

そして最後の一人。

美濃の斉藤家、越前の朝倉家を渡り歩いて尾張にやってきた、新参者。

新参者ですが、織田家の他の人にはない才覚を持っていたので、とても重宝されています。

才覚とは、お金もつけです。

武勇一辺倒の織田家では、誰も持っていない才能です。

新参者の名前は、明智さんちの光秀君といたしました。

「ドウフフ。信長様は銭の力というものを、ご存知ですか？」

その光秀君が、信長君い新しい商業奨励の提案をしてきました。

「ああ、もちろん」

「ドウフフ。どの程度？」

「……いろいろ買い物ができるから、とても便利」

「ドウフフフ。合っていますが、違います。いろいろ買い物ができるのではなく、何でも買えるのです」

「うん？」

「銭は城、銭は石垣、銭は堀、債権は味方、負債は敵。金融を制する者が、世界を制するのです」

「う、むう」

信長君は昔おバカでしたが、今は急速に頭がよくなっていました。

それが可能となったのは、信長君の驚異的な呑み込みの速さです。

信長君は銭がすべてを制する世の中を想像してみました。

(なんか、いけそうな気がする。けど……)

「でも武力も必要だろ？」

「もちろん。しかし槍なんぞはもう古い。あんなのを振り回すなんて、バカのやることです」

「利家にはいっつなよ。怒るぞ」

「ドウフフフ。バカにバカにされるのはかまいません。ともかく今は鉄砲の時代です。あれは素晴らしいです。全軍に持たせたい。でもその為には……」

「銭が必要、か」

「ドウフフフ。理解が早くて助かります」

「うん。わかった。じゃあお前の提案の『樂市樂座』ってのをやってみるか」

「ドウフフ、では早速……」

そこに、女性が姿を現しました。

「信長様。お忙しいところすみません」

信長君のお嫁さん、濃姫です。

濃姫は、光秀君を見つけて、目を丸くしました。

「あれ、みつちゃん！」

光秀君も濃姫の姿を確認し、大慌てで背筋を伸ばして、まるで初々しい若武者のような澁刺とした顔をしました。

「やあ、どうも。お久しぶりです、濃姫」

「もうー、みつちゃんったら、いつも間に尾張に来てたの。言っ
てよ。美濃の人がいなくて、寂しいんだから」

「す、すいません」

「怒ってない怒ってない。みつちゃんも昔みたいにバシバシ戦場で働いてよ。みつちゃんは先陣でこそカツコいいんだから」

「ええ。もちろん！」

光秀君は若々しく、二の腕をパンと叩きました。

そんな光秀君を、信長君はみたことありません。

(え。なに？ なにがおこってるの？)

信長君はだまってこの推移をみているしかできませんでした。

そんな夫の心情などつゆ知らず、濃姫がじゃべり続けます。

「みつちゃんの槍は、お父様も褒めてたからね」

「はい！ 槍の光秀の力、ご期待くださいー！」

光秀君が笑いました。

(お前、さっき槍は古いとか言ってたな?)

一方で、信長君は困惑するばかりです。

「うん。じゃあね。あと信長様」

濃姫が信長君に向き直りました。

「……………え、あ。はい?」

「今晚の夕食は、カレーでいいでしょうか?」

どうやらやってきた本当の理由は、夕食の献立だったようです。

「ああ、はい。けっこうです」

「ん。じゃあね。あ、みっちゃんも食べてく?」

「いやー!。濃姫のごはんでしたらいくらでも入ってしまうんですが、もう夕食は用意してしまったので」

「そう、残念。じゃあまたね。信長様も、ご相談の最中、失礼いたしました」

「うん……………」

信長君が人形のようにうなづく、濃姫が去っていきました。

しばし沈黙したままの信長君と光秀君。

初めに口を開いたのは、信長君でした。

「……………光秀」

「ドウフッフ、はい？」

「なんか、いつもと全然キャラが違くない？」

織田家に来た時から、光秀君はドウフドウフ不気味に笑っていました。

口にすることは銭のことばかりです。

あんな健全な若武者っぽい光秀君は、見たことがありません。

「濃と、知り合いだったっけ？」

「ドウフッフ、まあ。親戚というか、幼馴染というか、そういうのです」

光秀君は視線を外しながら、答えました。

光秀君と濃姫は、すでに滅亡した土岐一族の末裔同士でもあり、血は遠いですが縁の濃い親戚です。

「ふーん」

信長君の発令した商業奨励の樂市樂座は大当たりし、信長君はジワリと財力を蓄えていったのでした。

第十三話 『お市、結婚を決意する』の巻

信長君は部下である織田家四天王の利家君、勝家君、秀吉君、光秀君に支えられたり支えたりしながら、その勢力をどんどん拡大していきました。

そんなある日のこと。

お市に求婚の申し出が来ました。

戦国一の美少女であるお市には今までも沢山の求婚が来ていたのですが、今回はわけが違います。

戦国一のイケメン、浅井さんちの長政君からです。

『信長君。ユーのシスターお市を、ミーはお嫁さんに欲しいんだよ』
『〇』

信長君は、その書状を見て目を丸くしました。

「なんだこれは？ 何かの冗談か？」

「いえ。間違いなく、浅井家の書状でヤンス」

信長君の隣にいた秀吉君が、首を振って否定しました。

「ふざけているようにしか見えないな。よし、これは断ろう」

「それでヤンスね。オイラもお市様がお嫁に行くなんてまっぴら御

免の大反対でヤンス」

「だよな。お市がお嫁にいくなんて、まだ早いよな」

「その通りでヤンス。じゃあ書状は犬にでも食わせておくでヤンスよ」

「ああそうして……」

「ドウフフ。あいやしばらく。信長様、この光秀は、こたびの婚姻に賛成です」

予定調和のように反対で結論していた信長君と秀吉君の会話に、光秀君が割って入りました。

秀吉君の「空気読もうよ光秀え」という視線にもめげず、光秀君は言葉を続けます。

「織田家のため、この婚姻はぜひ成立させるべきです」

「なんでさ？」

「長政殿は戦国一のイケメン。諸外国からの人気も高く、しかも近江は京に近い。信長様が天下を取るのですたら、必ずや力強い味方となりましょう」

「む、天下かあ」

信長君は悩みました。

おバカであった頃より目指し続けていた戦国大名。その究極の形は、今日に上洛して天下人になることです。

しかしその為の道具にお市を使うつもりはありません。

しかもこんなわけのわからない相手になんて、絶対に嫌です。

「お、おでもお市様が遠くに行くのはやなんだな。ぜったい、やーなんだな」

お市ファンクラブ会長である勝家君は、もちろん大々反対でした。

「うーむ。筆頭家老の勝家も反対してるしなあ」

「ドウフフフ。この場合はむしろ、勝家殿の筆頭家老としての資質に疑問がありますな」

その意見には、実は信長君も秀吉君も賛成でした。が、あえて何も言いません。しかし勝家君が黙っているはずがありませんでした。

「ななななな。侮辱は許さないんだな。おでは織田家の最古参なんだな。新参者に言われたくはないんだな！」

「ドウフ。むかし謀反を起こしたくせに」

「あ、あれは信長様の弟の信勝様がかわいかったから仕方ないんだな。カワイイは正義なんだな！」

「ドウフ、意味が分かりませんよ」

「とにかく反対なんだな！ 絶対反対なんだな！」

「オイラも勝家様にさんせーでヤンス。結婚反対でヤンス！」

「反対なんだな！」

「反対でヤンス！」

口々にやかましく言う勝家君と秀吉君。一方で光秀君は、冷静に囁くように信長君に進言しました。

「ドウフフフ。もっと多角的な視野に立つのですよ、信長様。ここは婚姻の一択です」

「う、むう」

三人に言い寄られ、信長様は黙ってしまいました。

そこで気が付きました。

意見を言っているのが三人ということは、織田家四天王の最後の一人である、利家君が残っています。

「利家、お前はどう思う？」

利家君は、信長君と同じくお市の幼馴染でもあります。幼少時には三人とも、一緒に川遊びをした仲でもあります。

その後お市は美少女にクラスチェンジし、信長君と利家君はなかなか川遊びから抜け出せなかったわけなんです。

「信長のアニキよお」

「おお、お前の意見を聞かせてくれ！」

「こーゆーのは、お市に決めさせるのが一番じゃねえのか？」

「む……」

信長君は黙りました。

「ドゥフフフ。そのような受動的なことで、戦国の世は渡れるはずが……」

光秀君が反対しようとしたが、その言葉は信長君の耳には届きませんでした。

「利家……お前、たまに冴えてるな！」

「だろ？ やっぱ本人の意見が一番よ。なあ勝家のオッサンも、秀吉もそう思うだろ？」

「むー。反対でヤンスが、お市様の意見は尊重したいでヤンス」

「うんうん、そうなんだな。相手の意見を尊重する選択肢が、好感度ゲージをあげる基本なんだな」

秀吉君、勝家君もその意見には賛成です。

「だよな。そうしようぜ信長のアニキ」

「よし、決まりだ。いいな？ みつひ……、あれ？ 光秀はどこ行った？」

信長君が意見を取りまとめたころには、光秀君はいずこかへと消えておりました。

お市の部屋にて。

お市と蘭丸がぼんやりとしゃべっていると、いずこからか不気味な声が聞こえてきました。

「ドゥフフフ」

「ひ、なによこの気持ちの悪い声は？」

「お市様、蘭丸の後ろに隠れていてください！」

ボディーガードとしての役割を思い出した蘭丸が、声の方向に向かって刀を抜きました。

「ドゥフフフ。心配ご無用。光秀でございます」

「あ、あら。あなたが新参者の光秀？」

光秀君が、障子をあけてその姿を現しました。

「さようぞ。ドゥフフフ」

「濃さんの親戚だつて聞いてたけど……」

お市はマムシの娘とは名ばかりの清楚な感じの濃姫と、いかにも腹に一物ため込んでいそうな光秀君を、脳内で見比べました。

「……似てないわね。すごく」

「ドゥフフフ。それは残念」

「で、なによ。あなたが私の部屋に来るってことは、なにか話があるんでしょう?」

「ドゥフ。これは話が早い。信長様の妹様だけあつて聡明だ」

「……ふん」

「お市様は、信長様をどう思われておりますか?」

「えー! ど、どどどどど。どつって、なにがよ?別に、なにも思つてないわよ」

「そんなことはないでしょう」

「おもつてません!」

「立派な戦国ぢあみようになつてほしい、天下人になつてほしい。そう思っているのではないですか?」

「……は? ああ、そういふこと」

「ドウフフ。それ以外に何か？」

「いえ、別に……まあ、そうね。昔はダメダメだったけど、最近頑張ってるし。天下人を目指すのも、いいんじゃないの？」

「ドウフフフ。そうでしょうそうですね。それでお市様」

「なによ」

「天下人を目指す戦国大名の妹は、どうするべきかはご存知ですか？」

「……は？」

「信長様は口には出さずとも、お市様に望んでおられるのですよ」

「なにを？」

「戦国大名の妹としての責務を。戦国大名の信長として」

「……あんだ、なにいつてるの？ 頭おかしいの？」

「ドウフフフ。今日はこれくらいにしましょう。それでは失礼いたします」

光秀君は去っていきました。

蘭丸君がお市に話しかけてきました。

「大丈夫ですか。お市様？」

「ええ。平気よ。でもなんなのかしら、あいつ。光秀、ね。なんだか凄く気持ちが悪いわ」

「ええ。危険な感じがします」

「ゾワゾワする」

「それは、勝家様よりも？」

「いえ、あのペドロリ変態のオッサンほどじゃないわ」

「ハハハ、それはひどいですよ」

「うふふふ」

二人は笑いあいました。

お市が光秀君の訪問の意図を知り、その顔から笑みが完全に消え去ったのは、翌日のことです。

信長君がお市に正式に浅井家からの婚姻の話を持っていたのでした。

「お市。お前に婚姻のお話が来たんだ。相手は近江のイケメン、浅井の家の長政だそうだ」

信長君はなるべく私心を排して、冷静に状況を説明しました。

そうでないと、お市に決めさせたことにならないからです。

「わたしに、結婚の申し出？」

「ああ」

「……………」

『戦国大名の妹』

『その責務を』

『信長殿も望んでおられるのです』

光秀君の言葉が、幾度となくお市の頭でリフレインされました。

「お兄様、その長政というものは、織田家にとって有用なのですか？」

「う、うん…………それはまあ、すぐく」

近江を支配する長政君と婚姻関係を結べれば、もはや上洛は目前です。

軍略的な話で言うと、光秀君の言ったとおり、婚姻するのが最良の選択に間違いありません。

「そう、なの」

そして賢いお市には、それがきつちりと理解できてしまいました。

「でもな、お市。その……強制は全くしない。どちらかと言えば断ってほしい（小声）。お市がどうしたいかを、ありのままに言ってくれ」

信長君はお市に問いました。

お市はずっと考え、その間ずっと信長君の目を見ていました。

長い沈黙でした。

信長君はその間、ずっとお市の返事を待っていました。

お市は信長君の言葉を待っていましたが、その言葉はついに言ってもらえないと悟り、ようやく口を開きました。

「お兄様は……わたしにどうして欲しいか言ってくれないのね？」

「え？」

「……いいわ。わかった」

お市は過去の信長君とは比べようもないほど立派な大名になり、もはや天下人と道が開けている信長君を見て、その覚悟を決めました。

「お兄様」

「うん」

「お市は……」

「うん」

「お市は、お嫁に行きます」

「!!!!!!!!!!!!!!」

浅井家と織田家の婚姻。

戦国一の美少女と、戦国一のイケメンの婚姻。

そのニュースは織田家はおろか、全国津々浦々に激震を走らせたのでした。

閑話休題『キャラクター紹介』の巻

今回は結構増えた登場キャラを整理する意味で、キャラの紹介回にいたします。

本編とはかんけないので、読み飛ばしOKです。

信長の野望つぼく、出てくるキャラの能力とかを一覧にしてみました。

あと性格付けをわかりやすくするうえで、各キャラの愛読漫画とかも書いときました。

よりわかりづらくなるかもしれませんが、フィーリング&ファジーでお願いいたします。

織田信長（信長君）

知力7 武力7

愛読書『ワンピース』、『バクマン』

お市

知力8 武力1

愛読書『よつばと』、『おおきく振りかぶって』

前田利家（利家君）

知力2 武力8

愛読書『クローズ』、『アバウト』

羽柴秀吉（秀吉君）

知力4 武力5

愛読書『はじめの一步』、『弱虫ペダル』

柴田勝家（勝家君）

知力1 武力9
愛読書『コミックL0』

森蘭丸（蘭丸君）
知力5 武力3
愛読書『おと娘』、『わあい！』

明智光秀（光秀君）
知力9 武力7
愛読書『極悪がんば』、『ミナミの帝王』、『グラゼニ』

織田信勝
知力2 武力3
愛読書『きのう何食べた？』、『大奥』

竹中半兵衛（魔人ハンベ）
知力10 武力5
愛読書『乙嫁語り』、『ヒストリエ』、『テルマエ・ロマエ』、『ドリフターズ』

今川義元（戦国おじゃる丸）
知力8 武力9
愛読書『つらつらわらじ』

浅井長政（長政君）
知力5 武力8
愛読書『エアギア』、『リボーン』

第十四話 『織田家 やる気0%』の巻

浅井家に嫁いだお市。

「ミスお市、ミーたちはユーを歓迎するYO!」

戦国一のイケメン、長政君がもろ手を挙げてお市を歓迎いたしました。

が、お市の顔色は優れません。

「どうも」

「おや？ ご機嫌がすぐれないYO。長旅で疲れたのかな？」

「そんなことは……」

「じゃあ早速祝言だ！ それから初夜だYO。立派な子どもを産んで欲しいYO」

「……ありますので、ちょっと休ませてください」

「そうかい。残念だYO」

「お布団を用意させるよ。ええと枕は二つ……」

「一つで、お願いします!」

お市は強く言い切り、新婚の相手となる長政君を押し切りました。

「押忍。お市様、大丈夫ですか？」

心配になった蘭丸君が聞きました。

「あれ？　なんで蘭丸が付いてきてるの？」

「押忍。蘭丸はあくまでお市様のボディガードの男の娘ですので、どこまでもお供します。たとえ近江だろうが、薩摩だろうが。お市様と一緒にです」

「貴方、お兄様のこと好きなんじゃなかったっけ？」

「はい」

「いいの？」

「押忍。かまいません」

「……なんで？　あ、もしかしてわたしに乗り換えるとか？　貴方も一応男だし。でもわたしこれから、結婚式なんだけど」

「押忍。お市様は好きですが、蘭丸は信長様一筋です。蘭丸は一本筋の通った男の娘です」

「そうなの。じゃあ、なんで近江に来たの？」

「押忍……乙メンの勘ともうしましょうか。蘭丸は近江にいることにしました」

「ふーん。まあ、いいけどさ」

「新婚初夜まで、お供いたします。押忍」

「来なくっていいから！」

そんなこんなでお市の気分は多少、同郷の蘭丸君がいることで晴れましたが、相変わらずの曇り模様のまま結婚式を迎えました。

一方、尾張では。

「やる気がしないでヤンス」

ぐてーとやる気を喪失している秀吉君に、軍師役の魔人ハンベーが叱咤しました。

『我が主秀吉よ。今は手柄の上げ時ではないか？』

「お市様が結婚した。自分は今もうだめでヤンス」

『関係なかつ。もともと結ばれる可能性はゼロだったのだ』

「うっ、でも……それとこれとは話が別でヤンス。アイドルと結ばれることができるか、アイドルが結婚しちゃったかは、まったく別問題でヤンスよ」

『むう。人の心は難しいな』

ハンベールは頬を掻きました。隣国の浅井家と同盟を結んだ今こそ、領土拡張のチャンス。手柄の上げ時なのですが。

『筆頭家老の勝家殿も登城を断って屋敷に引きこもっているらしいぞ。今なら、筆頭家老にまでなれるチャンスなのだ』

「ううー、むしろ勝家殿の気持ちがよくわかるでヤンス」

『そんなことでどうする！ 我を仲間に取り入れた時のやる気はどうした。ほら、立て！ 信長殿の陣ぶれが来ているのだ。伊勢の北畠を攻めるぞ！』

「あー。光秀ががんばるから、いいんじゃないでヤンスか？」

『新参者に負けてどうする！ 我の知恵を貸してやるから、頑張るのだ。我を部下にした者が、織田家中で埋もれて終わるなんて認めぬからな！』

「ううー。わかったでヤンス」

魔人ハンベールに尻を叩かれ、どうにか秀吉君は起き上がろうとしました。

織田家中は深刻な状況でした。

筆頭家老の勝家君はすでに半病人。

秀吉君もやる気なし。

勝家君が率いていたお市ファンクラブもなし崩し的に解散し、織田家中のファンクラブ会員は、深く絶望していました。

さすがにこの事態に、信長君も困りました。

いよいよ隣国の伊勢を支配する北畠を攻略するとなったのに、家臣たちの端から端までやる気がありません。

「なんだか最近、家臣たちの士気が低いな」

信長君が利家君に相談しました。

「お市は人気があつたからなあ」

「そうだな。この結婚、やっぱり失敗だったかな？」

「今さら言っても仕方ねえだろ。お市が決めたことだ」

「そうだけどさ……。利家、頼りにしてるぞ」

「おお、任せとけ！ と、言いたいところだけど、ちょっと今回はいけねえや」

「ん、どうした？」

「まつにまた子供が生まれそうなんだ」

「え？ またか？」

利家君とまつは戦国一のおしどり夫婦です。

のちの世にわかることですが、二人の間には子供が八人も生まれることとなります。

「四人目だぜ。まつが可愛いすぎてな、ついつい（放送禁止）に（放送禁止）しすぎてよ」

「聞きたくないぞ」

「へっへっ。そんなわけで、俺はちょっと産休な。今回の出兵はパス」

「……は？ いやまで、男が産休をとるのはおかしいだろ？」

「あれ、そうだったか？ じゃあ育児休暇？」

「それも違う！ まだ生まれてないだろ」

「ともかく今回は一回休みで頼むわ。まつが難産っぽくてよ」

「まてまて。伊勢を一気に攻略するんだぞ。勝家が使い物にならないのだ。お前まで行かなくてどうする？」

「そいつはよくわからねえが、とにかく俺はダメだ。今のまつには俺が必要だ」

「いや、なんとかならんのか？ 必要なのは多分、産婆さんとかだろ」

「産婆なんていらねえ。俺がいれば十分だ。俺がいなくちゃダメなんだ」

「いやいやいや。難産に武将のお前が付いててどうする気だ？ 必要なのは産婆さんだろ？」

「まつには俺が付く。産婆には戦場に行ってもらおう」

「逆だろ！ 産婆さんに戦場で何をさせるつもりなんだよ！」

「とにかく、今回だけはダメだ。信長のアニキ。頼んだぜ」

「う……」

今まで散々利家君を頼ってきた信長君。こういわれると、黙るしかありません。

「……わかった。じゃあ今回は俺と、秀吉とで頑張るか」

「あれ？ 光秀は？」

「朝廷工作で手いっぱいだ。京に上洛するにはいろいろ前準備が必要らしい。そういうことができるのは、あいつだけだから」

「よくわかんねえな」

「まあ上洛するのは大変なんだ」

「そっか。まあ、とにかく今回は頼んだぜ。お土産は伊勢神宮の土産お守りで頼む」

「わかった。まつには宜しく伝えてくれ」

「おおよ！ そっちも頑張れよ。じゃあ家でまつが待ってるから、俺はもう行くぜ。じゃーな」

利家君が去っていきました。

「……………利家、これないか」

頼りにしていた右腕が来ないとあって、信長君は落ち込みました。

「失礼、魔人ハンベ―仕りござ候」

「おわ！」

秀吉君の軍師である魔人ハンベ―が、音もなく信長君の影から姿を現しました。

片手には、すごいやる気のない秀吉君を担いでいます。

「相変わらず人外だな。ハンベ―」

「ふっふっふ。我は魔人にて、人の理は通用しませぬ。それと我が主の秀吉を連れてまいりました」

「……………ヤンス」

「やる気ないな、秀吉」

「ないでヤンス……でもとりあえず頑張るでヤンス」

「頼りにして……いいわけじゃなさそうだな」

「ヤンスー」

信長君はやる気が全くない部下を引き連れ、伊勢の北畠を攻略に向かいました。

もともと北畠にはさしたる武将もなく、兵も多い信長君の圧勝のはずだったんですが。

「あーあ」

「なんか、のらないな」

「だなー」

兵の士気が全く上がらずに思わぬ大苦戦。

どうにか伊勢を攻略した時には、大きなダメージを信長君の軍隊も負っていたのです。

第十五話 『信長君とお公家衆』の巻

ボロボロになりながらもどうにか伊勢、伊賀を陥落させて、信長君はついに京へと上洛しました。

これで信長君は天下人です。

信長君は京の人々の大歓声の中、京に入りました。北畠との苦戦により軍勢はボロボロでしたが、さして信長君は気にせずこの一瞬を楽しんでいました。

「俺が京に上洛して天下人になれるなんて。感無量だ」

「喜ばしいでヤンス。オイラも天下人の部下だからお給料大幅アップでヤンスよ」

秀吉君と喜びを分かち合う信長君。

そこに光秀君が割って入りました。

「ドウフフ。では信長様。早速、朝廷へのあいさつをお願いします」

「おう」

信長君は光秀君と一緒に京の御所へとむかいました。

御所には白粉を顔面に塗りたくって、頬に薄い赤丸を書き、眉を丸く黒で書いた、気味の悪い公家が集団でおりました。

「……う、なんだあいつら？」

「ドゥフフ。信長様、思ったことを口に出すのは悪徳です。ここは京。彼らは先住民で、我々は新参者です。転校初日の学生のように、万事控えめでおねがいします」

「そう、だな。オツケ。わかった」

「ドゥフ、くれぐれも、控えめに。彼らの支持を失えば、信長様は木曾義仲のような憂き目にありますよ」

「う、む」

信長君は、せつかく上洛したのに裏切られてはたまらないと、公家衆に丁重に頭を下げました。

「はじめまして。信長です」

「によほほ。信長さん、ずいぶんとお疲れのようぞ」

「によほほ。これからは京の為に」

「によほほ、足利幕府の為に」

「によほほ、我々、公家の為に」

「によほほ、より一層働くことを期待しております」

公家たちは口々に勝手なことを言いました。

「は、わかりました」

気持ちを抑えて、信長君はぐっと頭を下げていましたが、その脇を光秀君がつつきました。

「なんだよ？」

「ドウフフ。気持ちはわかりますが、合わせてください」

「は？」

「お公家衆のしゃべり方に合わせるのです。それが朝廷での礼儀です」

信長君はその言葉を聞き、あらためてによほによほ笑う公家集を見ました。

公家たちの視線は、田舎ものを見るような冷たいものになっています。

態度が冷たくなった理由。それは言葉遣いに他なりません。

「…………マジで？」

「ドウフフ。マジです」

「なんで俺が戦国おじやる丸みたいなしゃべり方で…………」

「ドウフフ。思えば今川義元殿は、駿河に居ながら京の朝廷をみておりました。信長様も負けたくはないでしょう？」

「つく。わかった」

信長君は覚悟を決めて、公家衆に向かい合いました。

「によほほ、信長さん、いかがしたでおじやるか？」

「によ。ニヨホホ……」

「によほほ。信長さん、も京の言葉を使われるでおじやるか？」

「ニヨホホ。ええまあ。ぼちぼちつかれます……で、オジャル」

「によほほ。それはなにより。一刻も早い京の水になじむことを期待するでおじやりますよ」

「によほほ」

「によほほ」

「はは、はい。ニヨホホ……」

信長君の屈辱的な到底訪問は、こうしておわったのでした。

信長君は肩を怒らせて、お城に戻りました。

「くっそー。俺があんな変なしゃべり方をさせられるなんて！ 濃
やお市には絶対見せられん！」

「ドゥフフ。その公家衆との交渉をずっとやってきた私の功績をお

忘れなく」

「いや、光秀は大丈夫だろ。「ドゥフフ」を「によほほ」に変えるだけだし」

「ドゥフフ。これは手厳しい。私にもストレスなのですよ」

「そうなのか？」

「ドゥフフ。当然です」

「そっかー。まあそうだよな。普通の人間は、いやだよな」

「当たり前です。ドゥフフ」

信長君と光秀君が話していると、そこに秀吉君が来ました。

「信長様あ〜」

「おお、秀吉か」

「によほほ〜。ナウなお公家にバカ受けのしゃべり方をマスターしたでヤンスでおじゃるよ〜」

「……………」

走りこんでくる秀吉君に、信長君と光秀君は無言でダブルリアリティを食らわしました。

一方そのころ。

朝廷では公家たちが信長君のことについて話しておりました。

「によほほ。信長さん、あまり京のことが好きではないようでおじやるな」

「というか、我々が嫌いなのかも。によほほ」

「によほほ。北畠ごときに苦戦をする貧弱な軍勢が、調子に乗っているでおじやりますな」

「によほほ。まったく」

「によほ。戦国おじやる丸殿が上洛してくれていれば、このようなことはなかったでおじやるのに」

「過ぎたことは仕方ないでおじやるよ。によほほ」

「によほほ。浅井さんちと同盟を結んで、調子に乗っているようぞ」

「によほ、では？」

「によほほ。まずは仲たがい。誰でもよいから、信長さんを討ち取っていただきましょうか」

「によほほ。あのような貧弱な軍勢、誰でも討ち取るのは簡単でしょ」
「よ」

「によほ。で、討ち取った者がまた上洛したら？」

「その者もまた別の者に討ち取らせればいいでおじやるよ。によほ
ほ」

「によほ、それでいずれは？」

「によほほ。またあの懐かしき。平安の世が来るのでおじやります」

「によほほ、素晴らしい。歌と蹴鞠の楽しい日々でおじやりますな」

「によほ。朝廷の朝廷による朝廷のための平安時代でおじやります
よ」

「によほほ。では、そのように」

「」「全ては我ら公家衆のため」「」

「によほほ」

「によほほ」

「によほほ、でおじやりますな」

公家たちの陰謀により、信長君の様々な悪評が京から日本全国へばらまかれることとなりました。

寺を焼いた。僧侶を殺した。農民を虐殺した。大仏燃やした。

そんな信長君の事実無根な悪評がばらまかれ続け、信長君がまったく知らないうちに、信長君は世界を暗黒へ落とす魔王のように語られるようになっていきました。

いつのまにか信長君の周りは、敵だらけになっていたのです。

第十六話 『信長君は同盟国が少ない。略してはがない』の巻

お公家衆の流言飛語により、すっかり嫌われ者になった信長君。

京の町を歩いていても、みんながみんな信長君の姿を見るや否や反転して逃げていきます。子供に話しかけると泣き出されます。大人に話しかけると財布を出して許しを請われます。

もともと人から褒められるのが大好きで、反面打たれ弱い性格の信長君にとって、これは堪えました。

「どーせ俺は嫌われ者」 悪の元凶魔王様 今日生きてて
ごめんなさい」 ハ、ハハハ……」

お気に入りの茶室に引きこもり、自虐的な歌に乗せて乾いた笑いをうつかべる信長君。

京に上洛した天下人の、その地位とはあまりにかけ離れた状況に、さすがに周りに者も心配しました。

プチ引きこもりな信長君を立ち直らせるため、織田家の四天王である利家君、秀吉君、勝家君、光秀君が集まって、対策会議をおこなうこととなりました。

「やべえぜ、信長のアニキ。ぶっ壊れる寸前だ」

信長君の幼馴染である利家君が言いました。

「ドウフフ。いっそ本当に魔王になってくださるほどの豪胆さがあ

ってもよいのに」

とは、四人最高の知恵者の光秀君。

「そりゃ無理でヤンスよ。信長様は、人から褒められたいとか、人をびつくりさせたいとか、そんなワンパク子供気質が満載でヤンスから」

意外と鋭い、けど口が悪いのは秀吉君です。

「でもこのままじゃあ困るんだな。おではあんな信長様、見てたくないんだな」

筆頭家老の勝家君が言いました。

三人の視線が、さておき勝家君に集中しました。

「勝家のとつつぁん。もう復活したんだな？」

「ご心配をかけたんだな。もう大丈夫なんだな。鬼柴田は不滅なんだな」

利家君の疑問に、勝家君は胸板を叩いて答えました。肥満しすぎのでっ腹が、叩いた振動でポヨンと動きまわりました。

勝家君はお市の結婚に一番ショックを受けており、ずっと食事を立ってストレスで過食の毎日を過ごしておりました。もともと肥満しすぎの体には、さらに肉が増して肥えています。

「お市様のことはショックなんだな。でもいつまでもクヨクヨして

ても仕方ないんだな」

「そうだけ。落ち込んでても仕方ねえって」

「お市様はいつまでも生きているんだな。おでの心の中に」

「いや、ちゃんと物理的にも生きてるでヤンスよ。近江で。子供も生まれたって聞いたでヤンス」

「……まぶたを閉じれば、今でもお市様の姿が浮かぶんだな。10歳で、夏で、薄着をして、水遊びをして、ちよつと服が透けている。お美しいくも健やかなお市様……」

うつとりと自分の妄想をしゃべる勝家君。

全員がげんなりとそれを聞いておりました。さすがにお市ファンでは同士である秀吉君も、勝家君ほどの妄想力はありません。

「脂肪にくわえて変態性も増してやがんな」

「ちよつと気持ち悪いでヤンス」

「ドウフフ。いつそあのまま頭を丸めて出家でもしてくれればよかったのに」

三者三様の引きように、勝家君が大声を張り上げて反論しました。

「みんな黙るんだな！今は信長様の話をしてるんだな！」

「いや、話をそらしたのは勝家様でヤンスよ」

「そらしてないんだな！」

勝家君はジタバタと暴れながらも、大声で主張しました。

「信長様にはお市様が必要なんだな！ お市様が褒めてくれないと、信長様は駄目なんだな！」

「ドウフフ。なにを馬鹿なことを」

「さすがにありえないでヤンスよ」

光秀君と秀吉君が言いました。

が、利家君は何も言いませんでした。

幼馴染である利家君は、信長君の大馬鹿だった時代をよく知っています。

どうしようもなくお馬鹿であった信長君が、人が変わったように大名を目指しだしたきっかけがありました。

それは確かに。間違いなく。

「お市、だ」

利家君がつぶやきました。

記憶違いなどではありません。信長君は、確かにお市が戦国一の美少女になったのに感化されて、自分も戦国一の大名を目指しだし

たのです。お市においていかなれないために。信長君にとって、妹のお市が氣力の根源にも近かったのです。

それに気が付くと同時に、利家君は悩みました。

今さらどうしようもないからです。

お市はもう浅井さんちの長政君に嫁いでしまいました。長政君は、いまや敵だらけになった信長君にとって、たった一人だけ残った貴重な同盟国です。お嫁さんを帰してほしいなんて、絶対にいえません。いえるわけがありません。

長政君が、信長君に反旗を翻さない限りは。

一方そのころ。近江にて。

お市を遠巻きに見ながら、女中たちが噂話をしていました。

ヒソヒソヒソ

「ほら、あれが……」

「ああ……魔王の妹の……」

「長政様もかわいそう……あんなお嫁を……」

お市が耳には届く小声のおしゃべりに耐え切れなくなって女中達を見ると、女中たちは一礼してどこかへ行ってしまうのでした。

そしてしばらくするとまたヒソヒソ声が聞こえてくるのです。

お市は深くため息をつきました。はつきりいって、最近のお市の生活は針のむしろです。民にも家中にも人気絶頂の長政君のお嫁であるから直接的には何も来ないのですが、かわりに陰口は叩かれ放題。

その気苦労は限界にきていました。

「押忍。お市様、おいたわしい」

護衛役として尾張から来ている美貌の侍女、の格好をした男子である蘭丸君が、お市を励ましました。

「ああ、蘭丸……。べつに。どうってことないわよ」

お市が微笑みました。戦国一の美少女といわれたお市の美貌は、三人の子供を生んだ今となってもまったく衰えていません。美貌は衰えていないのですが、気疲れでこけた頬が痛々しく、蘭丸君の心に突き刺さりました。

「信長様が噂のような悪逆非道をするはずがありません。これは絶対、誰かが……」

「あたりまえよ！」

蘭丸君の言葉を最後まで聞くこともなく、お市はぴしゃりと言いつ切りました。

「……押忍」

「お兄様は、おばかで、頼りなくって、へなちよこで、もてなくって、甘いものが大好きで、新しもの好きで、ほんとうに子供みたいなひとだけど……。でも酷いことはできないわ。ねえ、わかっているでしょ?」

「押忍。蘭丸はわかっています」

「じゃあなんでみんなも、わからないのよ!」

「押忍」

蘭丸君は何も言うことができず、ただ頭をたれました。

信長君の悪評の伝播には、実は他国の大名達の微妙な心理も作用しておりました。

いってしまえば他国の大名にとって、天下人になった信長君は全然歓迎できない存在なのです。そんな大名達の心理は家中にも伝播し、広く民衆にも伝わります。

公家衆の信長君への悪口が急速に広まった理由には、そういった意味もあります。

「長政様も、悪口をとめてくださればいいのに。お兄様の同盟国なんだから」

「押忍。そういう指示は出ていません」

「なんでよ!」

「……蘭丸にはわかりません」

「もう、蘭丸の役立たず。まったく、もう……」

ヒステリックに言いつつも、お市はその明晰な頭を回転させました。

その思考はやがてある仮説を生み、仮説は推測となり推測は推理となりました。

そうしてお市は気がついてしまったのです、長政君にとっても悪影響が出るはずの同盟国の悪口を、長政君はまったく食い止めない理由を。

「蘭丸。長政様は、まったく悪口を止めていないわね?」

「押忍。残念ながら」

「それは止めてないの? それとも、積極的にばら撒いてる?」

蘭丸君はしばし黙っていましたが、やがてゆっくりと口を開きました。

「……押忍。言いたくはありませんが、じつは積極的にばら撒いている側です。長政様にとって、信長様は義理に兄に当たるのに。信長様ラブの蘭丸は、とっても悲しいです」

「そう、なの」

お市は自分の推理が当たっていると確信しました。それは信長君にとつて、悲劇的な結末を迎える推理です。

なんとしても回避しなければなりません。信長君が破滅しない為に。

「……蘭丸。茶々と初と江を連れてきて」

お市は自分と長政君との間にできた三姉妹をいいました。三人ともお市にとつて、なによりも愛おしい娘たちです。

「押忍。なにか火急の用事ですか？」

蘭丸君が確認すると、お市は小さくうなずき小声で蘭丸君に告げました。

「あせらず、急がず、誰にも気づかれずに。でも大至急、旅支度をして。出来るわね？」

それで全てを察した蘭丸君は、大言壮語はせず、ただうなずいて一言だけ言いました。

「全て蘭丸にお任せを」

「あと蘭丸、一個だけ確認しておきたいんだけど」

「押忍」

「蘭丸は……。お兄様のことは、まだ好き？ みんなから魔王とか

いわれて、嫌われてるけど？」

蘭丸君にも、迷いはありません。今日この日のために蘭丸君は近江まで来たのだと、自分で確信すらしております。

「蘭丸は一途な男の娘ですので。一生お婿にもお嫁にも行かずに、信長様ラブでいく所存です」

その答えは、お市と蘭丸君がまだ尾張にいた時と、まるで変わっておりませんでした。あまりの変化のなさに、お市はつい笑ってしまいました。

もう近江に輿入れしてから、三年もたちます。

「うふ、そう。蘭丸って、馬鹿みたいね」

「押忍。激烈にラブってます故、馬鹿と言われてもぜんぜん平気で」

「強いわね……わたしも、嫌いじゃないわよ。お兄様のこと」

「存じ上げてます」

「そっか。じゃあ、帰ろうか。お兄様のところに」

「押忍！」

久しぶりに見せたお市の素晴らしい笑顔に、蘭丸君の元気のいい返事しました。

それから数時間後。

お市の部屋にあわただしく一人の男が入ってきました。

長政君です。

「マイスイートお市！ とても残念なお知らせがあるんだYO。僕はみんなのために、魔王、信長と戦わなくっちゃならなくなっただ！ でも魔王を倒すのは勇者である僕の……。あれ？ お市はどこかYO？」

長政君がいくら探しても、お市も護衛の蘭丸君も、娘の茶々、初江も、見つかりませんでした。

翌日、長政君は信長君へ宣戦布告をし、約三年にわたるお市と長政君の結婚生活は終幕を迎えたのです。

信長君にはいよいよ最後の同盟国もなくなり、京に上洛したまま孤立することとなったのです。

第十七話 『打倒 長政君だYO』の巻

せつかく上洛したというのに、信長君はみんなの嫌われ者となつてしまいました

反信長君勢力によって、完全に包囲網をしかれてしまったのです。

そんななか、頼りにしていた義弟の長政君までもが、ついに信長君に反旗を翻しました。

「魔王信長！ 天下万民のために、容赦なく討伐させてもらうYO」

信長君に満を持して宣戦布告した長政君。

信長君の陣営は動揺しました。

「うち、長政のやつ、裏切りやがったか！」

「許せないんだな。倒すんだな」

「それでヤンス！」

「ドゥフフ。確かに。ここで長政殿を討伐できなければ、他の大名からも一気に攻められておしまいです。逆に、勝てれば他への睨みもきかせられる」

攻めるより他なし！

利家君、かつ家君、秀吉君、光秀君という、性格のまったく異なる

る織田家四天王の意見が、珍しく一致しました。

四人そろえば敵なし、と言いたいところですが、心配事はまだ残っています。

茶室に引きこもっている当主の信長君を、どうやって引っ張り出すかです。

「ドゥフフ。いつそ魔王として君臨するつもりで、一気にそちら方面で盛り上げたらいかがだろうか？」

光秀君の提案に、勝家君が首を振りました。

「むりだと思っんだな。信長様は、魔王つてのが嫌いなんだな」

「むしろ勇者になりたい側の人間でヤンスからね」

勝家君の言葉に、秀吉君も同意します。

「ドゥフフ。では、どうしたものか……」

話し合う三人に、利家君がきっぱりと言い放ちました。

「いい案があるぜ」

「とは？」

「俺に任せとけ」

胸を叩く利家君に三人とも同意する以外になく、すべてを一任す

ることとなりました。

利家君は信長君が引きこもっている茶室にいきました。

茶室は硬く閉じられておりました。

引き戸の中心には半紙で『入室厳禁。破ったら切腹を申し付けると大書されています。』

半紙の右下にはご丁寧に信長君の花押が書かれておりました。

「信長のアニキ、いるか？」

「利家か？」

「ああ、入るぜ」

「字が読めないのか。入室厳禁だ。破ったら腹切だぞ」

「おお」

望むところとばかりに利家君は半紙を破り捨てて、茶室に入りました。

ずっと引きこもっていた信長君は、久しぶりに開かれた障子から差し込む日の光に目をくらませました。

「利家、切腹と言ったぞ」

不健康そうな顔で信長君は言いますが、利家君は気にしません。

「おお、あとで切つてやる。ところで信長のアニキ、浅井の長政が裏切つたぜ」

「知ってる……」

そのニュースは信長君をますます落ち込ませていました。

「……せつかくお市がお嫁に行つたのに、意味なかつたな」

「だな」

「こんなことなら、お嫁に行くのに反対してればよかつた」

「だな」

「俺のせいだ。お市はどうしてるだろ。帰つてこれるかな……むりかな。魔王の妹だしな」

信長君は深く深く、どこまでも深く落ち込んでいきました。

が、利家君はそんな信長君を一切思ひやることなく、まるで無視して言いました。

「信長のアニキ、ちっと俺は出かけてくるぜ。切腹はその後でな」

「いいよ、別に。……腹なんて切らなくつても」

別に脅しで言っているだけで、信長君に部下を切腹させる度胸はありません。そもそも今はそんな気力もありません。

「そっか。そりゃ助かる」

「うん……で、どこ行くんだ？」

「近江」

「へ？」

「幼馴染が難儀してるみたいだからな。ちょっと行ってくるわ」

「……」

信長君は利家君の言っている意味がわからず、しばらく考えてしまいました。

近江は、長政君が治めている領土です。

信長君の幼馴染である利家君は、お市の幼馴染でもあります。

「は？ え？ え？」

利家、お前何言ってるの？ という言葉が信長君の口よりでてくるよりも早く、利家君はその理由を言っていました。

「お市を取り返してくる。ついでに長政もぶん殴ってくる。じゃあな」

いうだけというと、利家君はパシッと障子を閉めてしまいました。

呆然と茶釜を見ている信長君。

数秒後、めきめきと血色を取り戻し、勢いよく立ち上がりました。

「おおおおお！」

抹茶をそのまま手づかみで口に放り込み、すっかり冷えた茶釜をもちあげて水を飲みました。

「とーしーいーえー！」

天岩戸と化してた障子を豪快に開いて、信長君が叫びました。

「おお。なんだよ信長のアニキ」

出て行ったと思われていた利家君は、障子のすぐ前で待っていました。

「お市を取り戻しにいくぞ！」

「おお」

「ついでに、長政もぶっ倒す！」

「あいよ。じゃあ陣ぶれだ」

「全軍出撃だ！ 裏切った不貞の義弟をたたき切ってやる」

信長君に気力が戻りました。

信長君は軍勢をそろえ、一気に近江へと攻め込みました。

包囲されている信長君が、まさか全軍をもって攻めてくるとは思っていないかった長政君は、完全に不意をつかれたかっこうです。

「そんな。信じられないYO。武田も上杉も本願寺も毛利もいるのに。なんで全軍がうちにくるのかYO?」

長政君の問いに答えられるものはいませんでした。

これは完全に偶然ですが、他の大名たちも漁夫の利を狙っていたのです。

京から最寄の長政君と信長君が全力でつぶし合ってくれば、他の大名にとってこんな都合のいいことはありません。

泥沼の決着がつくまで、他の大名は様子を見ることにしておりました。

「ドウフフ。これは好都合。一気に長政を倒せば、包囲網の一角を落とせますな」

戦略眼豊かな光秀君が言いました。

信長君も賢くはあるのですが、今はそんなことは考えられません。とりあえずお市を救い出すことに神経が集中してしまっています。

長政君の居城を前に、信長君がたちが叫びました。

「お市〜！ 助けに来たぞ！」

「迎えに来たぜ、漬垂れお市！」

「助けに着たんだな！ お市様を、おでは助けるんだな！」

「お迎えにあがったでヤンスよ！」

信長君＋四天王のうち三人が叫びました。

自然、最後の一人の光秀君に視線が集まりました。

「ほら、光秀も」

空気をまったく読まない利家君が、光秀君にいいました。

「ドウフフ。わたしは、そういうのは……」

謙譲というか、本気で嫌がっている光秀君に、信長君が言いました。

「光秀もいえつて。まずはこっちが叫んで、人質になってるお市を励ますんだ」

「いや、しかし……」

「濃が捕らえられているとおもって、本気で叫べって」

「……濃姫が？」

光秀君の目が本気になりました。

堂々と立ちたち、長政君の城に怒鳴りあげました

「長政！ 離反したなら姫を帰すのが筋であろう！ この根性なしの変な語尾の近江かぶれのヘナチヨコめが！」

予想以上の啖呵に、思わず拍手する信長君と他三人。

光秀君はわれに返り、恥ずかしそうに「ドゥフフ。失礼おば」といいました。

その後も信長君たちの呼びかけが続きました。

一方そのころ。

信長君の陣営のすこしうしろの草むらにて。

「ねえ、蘭丸」

「押忍。お市さま」

「すっごく、ものすっごくね」

「はい」

「出て行きずらいんだけど」

それは長政君の裏切りを事前に察知して、城を脱出したお市と蘭丸君でした。

すでに信長君の陣の後ろまで来ているというのに、その身を案じて呼びかけをする信長君たち。

出てきて安心させなければならぬのはならないんですが、どうしてもその勇気が出ません。

タイミングが悪すぎます。

「これは……いつそ脱出せずに囚われの姫君としていたほうがよかったかもしれませんね」

「そういうわけにはいかないでしょ」

蘭丸君の提案に、さすがに反論するお市。

そのちよつと前方で、必死になってお城に囚われている（と思っている）お市に呼びかけを続ける信長君。

「ほんと、……おバカなんだから」

お市はしみじみと言いました。

「そうですね。蘭丸は信長様に惚れ直しました」

「なんでおバカなのに惚れ直すのよ」

「それはたぶん、お市様と同じ理由です」

したり顔でいう蘭丸君に、お市はぼかぼかとたたきました。

「バカバカバカ、蘭丸おバカ！ なに言ってるのよ、もう！」

その声は、草むらに潜んで言うのにはあまりにも大声でした。

「……あれ？」

いつの間にか、信長君たちの呼びかけの音が止まっておりました。

お市がひょこつと草むらから顔をだして、信長君のいる陣の様子を見ようとすると、

「お市？」

草むらを凝視していた信長君と目がばっちり合いました。

「あ

「お市、お市……！」

ダッシュで駆け寄る信長君と部下一同。

お市は恥ずかしそうに髪を掻きながら草むらから出てきました。

「お兄様……」

「うん」

「かえってきちゃった。いい？」

「もちろん！」

信長君は子供を三人抱えて出戻ったお市を、満面の笑顔で受け入れました。

「ありがとう、お兄様……嫌いじゃないわよ」

「俺は好きだぞ、お市！」

「うん。……ほんとにおバカなんだから……でも、ありがとう」

「おお」

「それじゃあ、お兄様」

「おお」

「いってらっしゃい」

お市は少し前まで自分が暮らしていた長政君のお城を指差しました。

「ああ。行ってくる！」

信長君は全軍を持っていつきに長政君を攻め立てました。

攻勢に出たつもりが、落城の危機を迎えた長政君。

「な、なんだＹＯ。なんで武田も上杉も本願寺も毛利も、みんな助けにこないんだＹＯ。なんで相手は一致団結してるんだＹＯ」

長政君は困惑して言いました。

信長君包囲網を組む他の大名から、援軍が来る予兆はありません。

信長君は苛烈に長政君を攻めたてております。落城もまじかです。

滅亡の覚悟を決めた長政君は、最後に一言だけつぶやきました。

「ミーもここまでかＹＯ。でも魔王信長。これはミーがユーに敗れただけで、浅井家がユーに負けたわけじゃないＹＯ。滅してもなお絶えることのない浅井家の血脈、覚えておくがいいＹＯ」

焼け落ちる城の中、長政君は自害して果てました。

妹の婿をいつさい容赦せずに滅ぼした信長君は、魔王の汚名に磨きをかけました。

しかし信長君が気にすることは、もうありませんでした。

それからしばらく。

お市の娘、茶々がお市に話しかけました。

「おかーさまー」

「はい、どうしたの茶々？ 京はもうなれた？」

「うん。都会だし、とっても暮らしやすいYO」

その語尾に、お市はそこはかかない不安を感じずに入られませんでした。

第十八話 『祝 巨星落つ!』の巻

戦国を震わす甲斐の虎。巨星、武田信玄が病没しました。

この衝撃的ニュースは京にいる信長君にも伝わり、信長君はすぐさま行動に動きました。

「えー、じゃあ信玄坊主がこの世からよーやくいなくなったことを祝して。かんーぱーい!」

「かんぱーい、でヤンス」

信長君は主要な部下を集めて、祝賀会を開きました。屏風に張られた横断幕には

『祝 武田信玄 彼岸行き もう帰ってこないでね』

と書かれています。

信玄君は鬼のように強く、更に賢く、部下も優秀な猛者ぞろいです。

信長君はこれまで徹底的に信玄君との戦いを避けてきました。

「いやー。めでたいめでたい。あの坊主。鬼のように強かったからな」

「それでヤンスな。同じく鬼の上杉謙信が抑えてくれなかったら、とっくに織田家は滅ぼされてたでヤンス」

秀吉君は好き勝手に言います。しかしそれは諸国を放浪した秀吉君の正直な感想であり、おそらく間違っていないこともみんな知っています。

「越中の本願寺も倒せたし、いいことづくめだな」

信長君は近江の長政君を倒した後、越中の本願寺と、それに呼応する雑賀衆も倒しました。

お市が帰ってきてくれたことにより、いいところ見せたい家臣&信長君本人の頑張りが大きいです。

これにより京周辺の地盤を確固たるものにできました。

ただどう戦力分析しても戦えば負ける甲斐の信玄君が目の上のたんこぶだったんですが、信玄君の病没によりその心配もなくなりました。

信長君は超ご機嫌です。

家中を集めて、パーティーを開いてしまっくらい。

「ドゥフフフフ。これで日ノ本は我らのものですね」

不気味に笑いながら、光秀君が言いました。

「光秀が言つと俺たちが悪の結社みたいになるな」

「これは手厳しい。ドゥフフ」

光秀君も上機嫌です。戦わずに敵が消えてくれて、うれしくない人はいません。

一人を除いて。

「俺はつまんねーぜ、信長のアニキ。目立つ機会が減っちゃった」

戦い大好きで目立ちたがり屋の利家君は不満でした。

「そういうなよ。信玄坊主はつえーぞ」

「っへ」

「戦が減ったら偉くなる機会が減るでヤンスが、死んだらもともこうもないでヤンスよ」

「そうなんだな。戦うのは疲れるし、家でこたつに入ってゲームしてたいんだな。できれば一日中外に出たくないんだな」

不機嫌な利家君をフォロースるように、秀吉君と筆頭家老の勝家君が言いました。

「っち。まあいいか」

利家君は髪を搔いて黙りました。

「ドウフフ。荒ぶる利家殿はともかく、勝家殿は年々ダメ人間になっ
つていきますなあ」

「なんてことをいうんだな光秀！ そんなことはないんだな。おでは筆頭家老として、頑張ってるんだな！」

「ドゥフフ。それが信じられないのです。あの二ト直前の生活で、なぜ猛将としての強さが維持できるのか」

理論派の光秀君には理解不能な勝家君の武力です。

勝家君はその後も肥満を続け、もう鎧もオーダーメイドの5Lでないと入りません。

が、戦闘力だけは織田家中ナンバーワンなのです。

「萌えなんだな。子持ちでも美しいお市様に萌え続ける熱き魂が、おでを強くするんだな」

勝家君が得意げに言いました。

「ドゥフ。燃える熱き魂ですか。わからなくはないですな」

光秀君が聞き間違えをしましたが、意味はおおよそ通じていたので気が付きませんでした。

それはさておき、パーティーもたけなわです。

信長君を筆頭に家中もスーパー強い信玄君と戦わなくなってほっとしており、弛緩した空気がパーティーをほんのり盛り上げていました。

そんななか、襖が開かれました。

そこには数人の女性陣が立っておりました。

先頭に立っているのは、信長君の妹であるお市と、妻の濃姫です。

濃姫が涙を流さんばかりに、パーティーの横断幕を見ておりました。

「なんと情けなや……。天下人たる信長様が、強敵が病没したことを喜んでるなんて」

「ほくらやっぱり。お兄様は絶対、無邪気に喜んでるって言ったじゃない」

そう濃姫に言ったのは、隣のお市です。

「天下人が……。強敵が消えてむしろ悔しんでいると信じておりましたのに。濃は情けなさを通り越して悲しゅうございます」

「濃さんはお兄様に期待しすぎたって。お兄様は楽な方に楽な方に流されているんだから。うちの家中はみんなそう。お兄様に感化されて、楽な方に楽な方に流れてるの。ね！」

ね、の部分でお市はおもいきりパーティー会場みんな見ていました。

笑っていますが、その目は心から苦境を避ける男子を蔑んでいません。

信長君は日ごろの努力で積みあがってきていたお市からの好感度

ポイントが、今日のイベントで大幅ダウンしたことに焦りました。

「い、いや。違うんだぞ、お市。濃も。俺は武田家と争う必要がなくなりそうで、ささやかながらその喜びを家中と分かち合おうと……」

「城で一番大きい広間を使い切って祝賀パーティーを開いて、なにが『ささやかながら』よ！」

お市の辛辣な指摘が信長君に突き刺さります。

濃姫は光秀君を悲しげな眼で見っていました。

「みつちゃん。もっと荒ぶる武者だと思ってたのに……」

「いや。違いますぞ。これはその……信長様に言われて、仕方なく」

「え、ずる！ お前、さつきまで一緒に喜んでたじゃないか」

信長君の突込みにも、光秀君は聞く耳を持ちません。

光秀君にとって、主君の信長君よりも濃姫にいいところを見せる方が比重が重いのです。

「わたしはあくまで、武田家との正面からの決着を望んでいましたよ。濃様」

「そう、なの？ みつちゃん？」

「ええ、もちろん。戦場で生きる男、槍の光秀ですから。ただ宮仕

えゆえ、信長様の命令には逆らい難く……」

「そう、みっちゃんも大変だったのね」

濃姫は恨みがましいめで信長君をみました。

「いやいやいや。誤解だ。みんな信玄坊主が死んですっごい喜んで……」

信長君は、先ほどまでたくさんいたはずの味方を探しましたが、周囲には誰もいません。

利家君とまつのおしどり夫婦も仲良く話しています。

「まつう。俺は戦いがなくなってつまんねーぜ」

「うん。でもまた戦場がとし君を呼んでるから。そしたら頑張ろね」

「そっか。そっだよな。信長のアニキは周り中、敵ばっかだし」

「そっだよ。とし君がいなくちゃ、信長様は即死モノのうつけなんだから」

二人はアツアツラブラブな雰囲気ですり合っています。

君主がくそみに貶されていますが、信長君は気にする暇がありません。

信長君の目の前に、長身の美女が立ちはだかりました。

口には長いキセル、浅黄色の着物に虎柄の前掛けをつけている、近寄りがたい雰囲気のご婦人です。

この場にいるんでしたら誰かの奥方か姉妹のはずなんですが、信長君にはその顔に見覚えがありません。

「え、ええと」

「信長様、うちの旦那がお世話になっております」

口先だけは礼を言い、まったく頭を下げる雰囲気のないご婦人。

隣には小姓が付いており、キセルの灰をこんと灰皿で受け止めました。

「はい、どうも……それで、あの……。どちらの奥方でしたっけ？

あれ？ 誰かの姉？ 妹？」

「結婚式の時にお会いしましたが、おぼえてませんか？」

信長君は一生懸命このおっかないご婦人を脳内検索かけましたが、どうしてもその顔が出てきませんでした。

「そうですか」

つまらなそうに婦人は言いました。

小姓がキセルに煙草をつめ、再度火をともしました。

その煙を思いつきり信長君に吹き付けながら、婦人は信長君に言

いました。

「秀吉の妻の、ねねです」

「えええ!!!」

信長君は秀吉君とねね、利家君とまつのダブルウェディングに、仲人兼新郎の上司として出席しております。

その時のウェディングドレスを着たねねの雰囲気と、今のねねの雰囲気とは天と地の違いがあります。

違いがあり過ぎて、顔が同じでもわかりませんでした。いまでも双子ですと言われれば信じてしまっくらいの別人っぷりです。

「まあ結婚式的时候は、ちょっと猫をかぶってましたが」

ねねは言いますが、信長君は胸中で「五、六枚じゃ足んないぐらい猫を被ってましたね」とツッコミを入れました。

もちろん口には出せませんが。

よく見ると、ねねの小姓だと思っていた人は、秀吉君の弟の秀長君です。秀長君は非常に有能な男で、もう侍大将になっている立派な武士のはずなんです。ねねにとっては小姓と変わらない位置づけのようです。

「それで、秀吉はどこですか?」

「ええと。あれ。どこいったかな?」

信長君はパーティー会場をきよろきよろと見まわしましたが、いません。

「どこかだろ。逃げたかな？」

「ああ、みつけました。信長様、失礼ですが邪魔ですの」

「え？」

「どけ」

「あ、はい。どうぞ」

信長君が風格に押されて横にどきました。

ねねは信長君に一瞥もせずにあつすぐ進み、横断幕が張られた屏風を蹴っ飛ばしました。

「うわーでヤンス」

屏風の裏に隠れていた秀吉君が、まるで子ネズミのように出てきました。

「あら禿ネズミが出てきたと思ったたら、私の旦那様でしたか。気づきませんで。そんなところに寝そべって、どうしましたの？」

「う、……その……違つでヤンス！ おいらは信玄と戦いたかつたんでヤンスが、信長様に言われて仕方なく……」

「あら残念。その小芝居はさつき見ましたの」

冷徹に言うねね。後ろで光秀君がぶいっと横を向きました。

「いや、ですからその……」

「本願寺との戦い、頑張ばりったそうですね」

キセルでこんこんと秀吉君の頭を叩きながら、ねねが言いました。

「う、うん。それでヤンス。おいら頑張ったでヤンスよ！」

「そうですね。それはようございました」

ねねは再度キセルの灰を捨てて、秀長君に煙草をつけさせて一息入れました。

その間、秀吉君は正座してじっと待っていました。

「旦那様」

「はい、でヤンス」

「次も励みなさいな」

まるで大名のような言葉ですが、秀吉君のうちではこれが普通です。

「は、はいでヤンス！ おいら頑張るでヤンス。もっと頑張って国もちの大名になるでヤンスよ！」

ねねはその言葉を聞いて、含み笑いのようなほほえみを浮かべました。

そういつとねねは翻り、利家君と話すまつの方に歩いていきました。

ねねとまつ。

お互いにかなり性格は違いますが、幼馴染で親友同士です。

「ほら、まつ。旦那とのラブタイムはおしまいよ。ここで
ま
でやるつもり？」

「あーん。とし君とのお話がまだあるのにい」

「年がら年中、ラブラブしてるんじゃないの。いくつ子供つくるつもり。私のところはまだ一人もいないのに」

「あゝ、ねねちゃん、気にしてるの？ 一人あげようか？」

「いいりません。ほら帰るから」

ねねに引つ張られて、まつ部屋を後にしました。濃姫、お市も信長君に太めのくぎを打つことを忘れません。

「しっかりしてくださいまし、天下人様」

と、濃姫。

「ほんつと、ダメダメねお兄様。もつとしっかりしてくれないと、茶々に恥ずかしくって見せられないわ」

と、お市。

二人も去り、ようやくパーティー会場は当初の武将たちのみ残り
ました。

ですがさすがにパーティーを続ける雰囲気ではありません。

そんな中、伝令が入りました。

「一大事です！ 信玄の跡を継いだ息子の勝頼が、わが軍に向かっ
て宣戦を布告。攻め込んできました！」

「え！ じゃあすぐに和平交渉を……」

反射的に言いかけた信長君は、あわてて口をつぐんで言葉をのみ
こみました。

「……じゃなくって、開戦だ！ 正々堂々、戦って勝ってやる！」

「それでヤンス。オイラたちは真っ向勝負が大好きなの、男の子でヤ
ンス」

「ドゥフフ。天下人たる織田家の強さを示さねばなりませんな」

「のってきたねえ、信長のアニキ。いつちよやったるか！」

「お市様は強い男が好きなんだな。おでは強いんだな。武田よりも

強いんだな」

信長君、秀吉君、光秀君、利家君、勝家君は口々に言いました。

ここに数年越しに持ち越されていた織田家VS武田家の争いが、開戦されることとなったのです。

第十九話 『決戦 武田軍』の巻

なんだかんだあつて甲斐の武田家を継いだ勝頼君と戦うことになった信長君。

今日は家臣たちを集めて作戦会議です。

「えーでは、武田と戦うことになったわけだが。俺にいい考えがある。とつておきの作戦でな……」

信長君は長年温めていた戦術をまとめた書類を取り出しました。

書類には『鉄砲三段撃ち大作戦』と書かれています。信長君が考えた、対武田騎馬隊用決戦作戦です。

「ちょっと待つてほしいでヤンス。とりあえず武田の四天王について報告したいでヤンス」

秀吉君が信長君を遮りました

信長君は自分が関あげた案を発表したくつて仕方なかったんですが、後から出した方がみんながより驚くと思つて引っこめました。

「おけ。秀吉、報告しろ」

「はいでヤンス。信玄坊主は無事に（？）病没してくれたんでヤンスが、息子の勝頼が後を継ぎました。勝頼は……よくわからないでヤンス」

「まーこないだ後継いだばっかりだしな」

「そーでヤンス。問題になるのは信玄に仕えていた武田四天王でヤンスので、彼らについて報告するでヤンス」

「武田四天王？ 俺たちみたいなのか？」

利家君が聞きました。

織田家の四天王は、利家君、秀吉君、光秀君、筆頭家老の勝家君を指します。

「そーでヤンスな。武田家は風林火山の旗印の下、それぞれに呼応する家臣がいるでヤンスよ」

「ふーん。詳しく言ってくれ」

「まずは『風のババ・バリシア』。風を操る魔術が使えるらしいでヤンス」

「……は？」

信長君は目が点になりました。

しかし気にせず秀吉君が報告を続けます。

「次に『林のコーサガッツォ』。津波が起こせるらしいです」

「……」

「お次は『火のヤマガカンテ』。炎の魔法にもたけてるらしいでヤンス。赤備えで有名でヤンスな」

「俺が昔パクツ……。インスピレーションを受けたとこだな」

懐かしそうに利家君が言いました。

「最後は『山のナイトーリョーネ』。毒を使うらしいです。以上、風林火山の四天王を踏まえたくうえで、対策を立てる必要があるでヤンスよ。信長様」

秀吉君が信長君に振りしました。

「え、えーえと。武田つて、魔法とか使えたっけ？ 騎馬隊で有名だった記憶が……」

「騎馬隊『も』有名でヤンスな」

「ドウフフ。本来であれば何としても避けなければならぬ難敵。信長様も開戦を覚悟されたからにはなにか案がおりなのでしょう？」

光秀君が言いました。

別に意地悪でハードルを上げているわけではありません。信長君は、作戦会議の前日、光秀君に「すっげーいい案があるから安心して」と言ってしまったのです。

光秀君にとっては、信長君へのアシストくらいのもりでした。

が、信長君は固まってしまいました。

「か、仮に、だな。えーと。例えば柵を立てて、鉄砲を三段撃ちで騎馬隊の足を止めるってのは、どうかな？」

おずおずと信長君が言いました。

もちろんそんな案は、秀吉君が鼻で笑いました。

「そんなの絶対無理でヤンス。まず柵がヤマガカンテの炎で燃やされるでヤンスよ」

「ドウフフ。そもそも津波で火縄銃なんて使えないでしょう」

光秀君も当たり前のようにダメ出しをします。

「ハ、ハハハ。だよな……」

信長君が机の下で、そつと作戦書をおしぼりのように絞って握りつぶしました。

(や、やばい。どうしよう)

信長君は困ってしまいました。

武田家が強いとは思っているのですが、こうまでバケモノ揃いとは思いませんでした。

「ええーと。よし……じゃあ作戦は、だな」

「作戦は？」

「作戦は……………あ！」

「あ？」

「あ、イタタタ。おなかが痛い。ちょっと休憩。みんな30分くらい休憩な」

信長君は逃げるように、ほんとうに逃げ出す体で軍議室を後にしました。

ぼかんとみんな信長君の後姿を見送りましたが、仕方がないので信長君が帰ってくるまで待つことにしました。

信長君は軍議室から離れた縁側で頭を抱えていました。

「はあー。どーしよー」

30分後には軍議室に戻って、作戦を決めねばなりません。今さら無策であることを言うわけにもいきません。

「武田も桶狭間あたりで油断してくれないかなあ。もういつかい奇襲でけりつつけるのに……………」

しかし考えれば考えるほど、武田軍が奇襲しやすい場所に布陣する可能性はゼロパーセントです。

基本は騎馬隊なので、関東平野を突っ切ってくるでしょう。

「あら、お兄様。軍議中じゃなかったっけ？」

縁側で物思いにふける信長君に話しかけたのは、娘の茶々をつれたお市でした。

「あ、お市。どうした？」

「どうしたって……茶々の散歩よ。ほら、茶々、お兄様に」挨拶な
さし」

「はい、信長さま。」ぎげんYO」

「ああ、御機嫌よう。利発そうな子供だな」

「うふ、でしょう。茶々も初も江もみーんな器量よしよ。お兄様に
似ないでほんとによかった」

「ほっとけ」

「うふふ。……ところでどうしたの？ 落ち込んでるみたいだけど。
こないだ怒ったのがまだ気にかかっているの？」

「いや。そんなことは……」

間接的には、あります。信玄君が死んだことを喜んだことを責め
られなければ、信長君は間違いない武田家とあらゆる手を駆使して
和平工作に走っていたことでしょう。

「もしかして。武田に負けそうなの？」

「そそそそそそそ、そんなこと、あるわけ。ないじゃないか。俺は天下人だぞ」

「そう」

お市はそれ以上突っ込みませんでした。じつと顔を見るだけです。

しばらく我慢していた信長君も、最後には観念してこうべを垂れました。

「ゴメン。ちょっとキツイかも」

「そうなんだ。……もしかして、わたしせい？」

「いや。そんなことはない！ そんなことは一切ないぞ、お市！ 開戦は俺が決めたんだ」

「そりゃそうだけど……。武田家って、そんなに強いのか？」

「うん。ちょっと常識を超越しててね。ビックリした。ほんとに」

「そうなんだ。いい案がないかしらね」

お市は聡明なのですが、さすがにもっている情報が少なすぎて思いつく案はありません。

「お市かーさま。武田はどこから来るのかYO？」

「あら茶々。武田って覚えたのね。偉いわ。武田はね。えーと。甲斐から出てきて、三河あたりを通過してくるかしら？」

お市が目線で信長君に確認すると、信長君も頷きました。

三河が戦場になるのはほぼ間違いありません。

「じゃあ。三河には誰がいるのかYO？」

「え？ むかしは戦国おじやる丸の土地だったけど。今は……誰かしら？」

「へ？」

信長君も首をかしげました。戦国おじやる丸を迎撃して以降、信長君はずっと京方面を気にかけてきたので、後方の三河を気にしたことはありません。

「三河に今いる人と協力すれば、武田だって倒せるんじゃないかYO。土地勘は大切だYO」

茶々は言いました。

あまりに的を得た意見に、お市と信長君は目を合わせました。

「そう、だな」

信長君は天啓のような言葉を受け、それを頭に刻みました。

お市と茶々と別れた信長君は、軍議室に戻りました。

「軍議室では信長君を待つ家中が、熱のこもった眼で信長君を見えています。」

「信長様、おなかの具合はよくなったでヤンスか？」

「え、腹？ …… ああ、腹痛な。うん、正露丸飲んだら、治った」

「そりゃよかったでヤンス。そしたら早速、作戦をお願いするでヤンス」

「ちよいストップ。作戦を立てる前に、確認しておく。三河をいま統治しているのは誰だ？」

「へ？ ええと。三河は…… 戦国おじゃる丸が滅びた後は……」

秀吉君がペラペラと書類をめくって確認しました。

「北条あたりが進行してたかっけか？」

「いえ…… ああ、タヌキの住処になったらしいでヤンス」

秀吉君が言いました。

「なに？」

「当主はタヌキの親分である化けタヌキ、家康タヌキが統治してい

るよつでヤンスよ」

「う、む。今日は予想外のことがよくおこる日だな。ともかくその家康タヌキと連絡を取れ。協力して武田と戦うんだ」

「いや、しかし我々は皆の嫌われ者でヤンスよ？」

嫌われ者の信長君と、同盟を結んでくれる国が出るかは微妙です。

「向こうだって、このままじゃ武田に滅ぼされるだろ。俺たちと同盟せずに滅びる道を選ぶんじゃないが、可能性は十分にある」

「わ、わかったでヤンス」

大急ぎで使者が三河の家康タヌキに送られました。

家康タヌキも滅びたくはないので、信長君の申し出に快諾したのです。

「信長殿の申し出、お受けするでためたぬ」

三河に住み着いたタヌキ軍団との驚異的な共同作戦を張りました。

そして決戦当日。

武田軍の騎馬隊の先頭に立つ勝頼君が、呟きました。

「ふふふ。僕の呪われし邪気眼が疼く。不純物なき螺旋、残滓、天

佑、傀儡たる身を乗り越えて凄愴苛烈のカタルシスを起こす。三河の地を呪われた聖櫃にするのだ」

勝頼君は重度の厨二病でした。

「殿、『呪われた』がかぶっています」

勝頼君の隣にいるヤマガカンテが疲れた顔で言いました。

「む。今のはなしだ」

「はは」

「えー。僕の禁じられた……いや。違うな。深遠なる武田菱が……。これも違うな。あー、もーいいや。全軍突撃だ！ 僕に続け！」

「え？ ちょっと、殿。お待ちください。今、ババ・バリシアが台風を呼び寄せております」

「待てない！ じっくりぞー！」

勝頼君は厨二病で、かつ致命的なほどにおバカでした。四天王がどれほど強くても、補いがたいくらい。

一方、信長君の軍も、不思議に思っていました。

武田軍から一騎だけ、騎馬が突っ込んできたのです。

後ろからあわてて他の騎馬隊も走ってきていますが、先行する馬が早すぎて追いつけないようです。

「あれ？ 先頭で走ってるのは勝頼じゃないか？」

「ドウフフ。影武者ですな。間違いなく。総大将が先陣を切るわけではないです。とりあえず一斉射撃で影武者を殺しましょう」

「だな。撃てー」

ズキューンズキューンズキューンズキューンズキューン

「ぎゃー！」

「あ、勝頼様〜！」

こうして勝頼君は、偉大過ぎる父をまったくおいつけず戦場に散ったのでした。

司令官がいなくなった後、武田四天王は魔術の駆使して戦いました。

しかし司令官不在の為に連携がうまく取れず、信長君に敗れたのでした。

「おお。なんとか勝てたな」

「ドウフフ。勝頼がバカで助かりましたな」

「というか、あのタヌキ軍団侮れないでヤンス」

タヌキ軍団は家康君に盲目的に心酔しており、命を惜しまず働き

ました。

やがてそれが敵に回った時にわずかな恐怖を感じながらも、信長君は宿武田家との決着をつけたのでした。

第二十話『お宅訪問 秀吉君ち』の巻

武田家を倒した信長君でしたが、相変わらず世間では嫌われ者です。

公家衆の暗躍によって、新たに仲間になった人はすぐに裏切ってしまう、有能な武将がそろいません。

「によほほ。もっともつと信長をせめるでおじゃる。」

信長君が目をかけていた松永さんちの久秀君が裏切り、それをよやく鎮圧したと思ったら今度は荒木さんちの村重君が裏切りました。

信長君はもうへとへとです。

「お兄様」

そんな信長君に、妹のお市がなにげなく聞きました。

「うん、なんだお市？」

「お兄様ってさあ」

「うん」

「もしかして、もしかして」

「？」

「人望ない？」

「!!!!」

そのお市の一言は、とっても傷つきやすい信長君のハートにクリティカルヒットしました。

でも妹の前ではカッコよくいた信長君は、なんとか踏ん張って笑顔で切り返しました。

「ハハハ。ソンナコト、ナイアルヨ」

頑張ったつもりでしたが、これが信長君の限界でした。

お市はジト目でそんな兄の信長君を見ました。

「お兄様。顔と言葉がとっても変よ」

「顔はほつといてくれ」

「ふふふ。でも部下がどんどん裏切るのはまずくない？ いつか致命的な場面で誰かに裏切られちゃわないかしら？」

「はっはっは。そんなことはない。うちは利家、勝家、秀吉、光秀と四天王が俺に忠誠を誓っているからな」

「そうかな」

「まあ新参者が裏切ることはあるかもしれないけど、腹心がしつか

りしてるから問題ない」

「そう。ならいいんだけど……」

お市は心配でした。

四天王の名前が並んでいる四人のうち、信長君に絶対の忠誠を誓っていそなのは利家君しかいません。

「ところでお兄様」

「なんだ？」

「最近、秀吉の陣営がどんどん人を入れてるみたいね」

「ああ、あいつは身内が少ないからな。新参者でもなんでもどんどん人いれろと言っておいた」

秀吉君は農家出身で親戚が少なく、武士になってくれたのは弟の秀長君しかいません。

腹心を血縁者でそろえるという戦国の基本が使えないため、秀吉君の部下は赤の他人ぞろいです。

にもかかわらず……。

「なかなかまとまりのある軍勢になってるみたいね」

お市はそう聞いております。

「……そうだな」

信長君の視線と、お市の視線が交錯しました。

「参考にしたら？」

「俺がサルの？ 悪い冗談だ」

信長君ははっきりと断言しました。

自分の草履取りをしていた秀吉君を部下として使うならともかく、人心掌握術の参考にするのはプライドが許しません。

「まあいいけどね」

お市は去っていきこうとしました。

その後ろ姿を見ながら、信長君は考えていました。

「や、ちょっと待った。お市！」

「うん？」

「……秀吉って、そんなに人心掌握がうまいのか？」

「よくわかんないけど。なんだかすごいっぱいわね。私も蘭丸に聞いただけだから、よくわかんないんだけど」

「……興味、ある？」

「え？ わたし？」

「うん」

「ないけど」

お市はべつに戦国武将ではないので、秀吉君の人身掌握術などに興味はありません。

「そっか……」

信長君は心底しょぼんとした顔になりました。

お市はそんな信長君の動きを観察して、心で嘆息しながらも信長君に近寄りました。

「うそ。ちょっと興味あるから、お兄様連れてってくれない？」

「おお！ じゃあ秀吉の屋敷に行こう。今行こう。すぐ行こう」

信長君は張り切ってお市の手を引っ張りながら、秀吉君の屋敷へと向かいました。

信長君とお市は事前に連絡せずにお忍びで、秀吉君の屋敷にこっそりと入りました。

屋敷は人の出入りが激しく、中庭では有望そうな少年たちがやりの鍛錬をしています。

そこら中で始終怒鳴り声があり、とても生活の場とは思えません。

「なんか、訓練場みたいだな」

「そうね。ちょっとびっくりした」

でも聡明な信長君とお市は、その屋敷の機能性を見抜いていました。

秀吉君の屋敷はまるで鎌倉時代の武家のような、戦うことのみの特化した造りとなっております。

「あいつ派手好きのはずなのにな。こんな家に住んでるのか」

「っていうか、よく奥方のねねさんが文句言わないわね」

「抑え込んでるのか。大したものだ」

信長君は素直に驚嘆しました。

以前見たおっかない奥方、ねねをこんなやかましい館に住まわせているなんて。秀吉君を尊敬せずにはいられません。

そんな時。

「やでヤンス！ やでヤンス！」

秀吉君の大声が奥のほうから聞こえました。

信長君とお市はその声のする部屋に向かいこつそり部屋の様子を見ると、秀吉君が部屋の中央で熱転がって、手足をバタバタしていました。

幼児が駄々をこねているようにしか見えません。

それを冷徹に見つめる女性が一人。

秀吉君の奥方、ねねです。

「帰ってきたら好きな茶器を買ってもいいって言ったでヤンス！
約束でヤンス！」

秀吉君がゴロゴロころなりながら叫びました。

「そうでしたか。はて？」

ねねはそんな見苦しい秀吉君などどこ吹く風で、愛用のキセルをふかしながら首をかしげました。

「ハンベー。カンベー！ でてくるでヤンス」

秀吉君の声に呼応して、秀吉君の影から二人の魔人が現れました。

『ハンベー参上』

『カンベー。ログイン仕りじぎ候』

一人はハンベール君。秀吉君が美濃を攻めの時に見つけた、茶壺に封印されていた魔人です。

もう一人はカンベール君。同じく秀吉君が雑賀衆を攻めた際に見つけた、土蔵に封印されていた魔人です。

二人とも青白い肌、牙のような犬歯、赤い瞳に鋭い爪を生やした、明らかな人外です。

相違点はハンベール君のほうが美形であり、カンベール君には片足がありません。

二人とも人外の魔人でありながらも秀吉君の部下であり、秀吉君の影に住んでいます。

「なあ。ハンベール、カンベール。ねねは言ったでヤンスよな？ 武田に買ったなら好きな茶器を買っていいって」

ハンベール君とカンベール君は顔を見合わせました。

確かにねねはそう言いました。

しかし秀吉君が欲しがっている茶器は純金製の茶碗です。

高いうえに趣味も悪く、秀吉君の評判および財力を失墜させる逸品に間違いありません。

『我は覚えておらん』

ハンベール君は言いました。

『カンベールのメモリーにも記憶されておりませぬ故』

カンベール君も追隨します。

「ええ！ そんな。確かに言ったでヤンスよ。だからオイラは頑張ったでヤンスよ！」

「忙しいときに、あまり戯言を言わないでくださいませ」

なおも縋り付く秀吉君を、ねねは冷淡にはねのけました。

秀吉君はさらにバタバタと暴れましたが、ねねはじっとそれを冷淡に見ているだけであり、二人の魔人も困った顔で黙っているだけです。

しばらくして疲れた秀吉君は、仕方なく暴れるのをやめました。

「もう知らないでヤンス！ 家出するでヤンス！」

「はい、わかりました。夕飯はいかががしますか？」

「いらないでヤンス」

秀吉君は出て行きました。あわててその影にハンベールとカンベールが戻ります。

ねねは深く嘆息すると、侍女を呼んで裏門の鍵を開錠と、夜食の準備を指示しました。

「いえ、構いませんよ。見字料をお支払いいただければ」

「え？」

「冗談です。それで用事はすみましたか？」

「あ、ああ。うん。もう帰ろうと思っ」

「そうですね。ではお見送りを……あっと、その前に終礼をしませんと」

「え？」

ねねは中庭えへと出ていってしまいました。

信長君とお市も、ちょっと離れてその様子を眺めます。

ねねの姿を見ると、ひとりの若武者が駆け寄りました。

「奥方！ 本日も滞りなく訓練いたしました」

「ん」

ねねは無表情のまま頷きました。

それをみて若武者は太鼓を鳴らし、太鼓の音を聞いて中庭にいた武者、離れた場所にいたであろう者たちが全員集合してきました。

ズラリと整列する武者をみて、離れて様子をつかがう信長君は驚きました。

これほどの規律を保っている軍団はめったにません。

しかも平常時の訓練であると考えれば、ほとんど皆無です。

「今日も大儀。戦は近い。全員より一層励みなさい」

ねねは軍団長のように挨拶をすると、全員が深く頭を下げて、その場は解散となりました。

そしてねねがまた信長君のところ近づきました。

「失礼を」

「う。あの軍団って、ねねが訓練してるの？」

「訓練なんてできません。私は女です」

「そりゃそうだけども」

「訓練しやすい環境を整えているだけです。夫の秀吉は、武力に難がありますので」

もともと小男で武芸のたしなみもない秀吉君は、武将としての戦鬪力で他の四天王に一步後れを取ります。

それを補うための訓練機構が、この屋敷だということなのです。

「見どころがあるものは取り立てますの」

ねねは若武者を七人呼びました。みんな優秀そうですが、特に清正君、正則君と名乗った二人は今すぐにも戦場に出れそうな若武者です。

信長君は素直にいいなあ、と思いました。

「家を守るのは、女の仕事ですので」

ねねは笑いました。

信長君とお市はその笑顔に圧倒され、そのまま屋敷を後にしました。

その帰り道にて。

「えーと。結論から言つと」

「うん」

「秀吉、頑張らなすぎ」

「そつねえ」

家にいる秀吉君は、我がまま放題の子供と全然変わりません。大きな幼児です。

一方で、ねねの力は絶大のようでした。

「俺も濃に頑張ってもらえば、いいのかな？」

「濃さんに？」

信長君の妻の濃姫はおしとやかで、とてもそういったことはでき
そうもありません。

というか、利発なお市にもできる気はしません。

「あれは、あの家だからできるんじゃない？」

「そうだな」

こうして信長君は何一つ人心掌握術を得ることなく帰りましたが、
大好きな妹と一日外出できたのでそれはそれでいい日だったと思う
ことにしました。

第二十一話 『とても可愛らしい悪意』の巻

京を中心に近畿、中部地方を手中に収めた信長君。

公家集の工作により相変わらず敵は多いですが、もはや一対一で負けることはありえないほどの大大名となりました。

間違いなしの天下人です。

そんな信長君の居城にて、少女たちが話し合っていました。

茶々。初。江。

お市と滅亡した長政君との間にできた三姉妹です。

戦国一の美少女であるお市と、戦国一のイケメンである長政君との間にできた娘だけあって、三人とももちろん美少女です。

傍から見ると美しくも仲むつまじい三姉妹の会話でした。

が、その内容はそういった穏やかなものとはかけ離れておりました。

「公家衆は失敗したYO」

茶々がいいました。

それに呼応して、妹の初が質問を返しました。

「どづいづことかＹＯ？」

「信長の敵をたくさん作ったのはよかったＹＯ」

『信長』とこの三姉妹の間では、信長君を呼び捨てにしております。三姉妹にとって、信長君は大々々好きなおとーさまこと、長政君を倒した宿敵です。

「うん。もうちょっとで信長を倒せたＹＯ」

「ノンノン。それだけじゃだめなんだＹＯ。敵が増えたら、その分信長の軍も団結しちゃうんだＹＯ」

「茶々ねーさま、どーいうこと？」

三女の江が聞きました。その言葉を、厳しめを茶々が窘めました。

「江。言葉使いをなおすんだＹＯ」

「ああ。ごめんだよう」

「いいのＹＯ。でも気をつけるんだＹＯ」

「こお言葉遣いは、長政君からの受け継いだものです。三姉妹にとってとても大切なものなのです。」

「わかったよう。それで茶々ねーさま」

「うん」

説明の続きを催促する江に対し、茶々はおもむろに将棋の駒を並べました。

「これが信長だYO」

玉将を置きました。王将ではないのが、茶々なりのこだわりがあります。

「それで勝家、利家、秀吉、光秀だYO」

金将二枚と、銀将二枚を玉将の周りにがちりと並べます。

ふむふむと、初と江が将棋の駒を見ながらかわいらしい顔で頷きました。

「それで。これが包囲する敵」

その外周に、駒と敵対するように別の駒を並べました。

「信長、包囲されてるYO」

「倒されるのも時間の問題だよ」

初と江が嬉しそうに口々にいいました。

「違うの。これじゃあ信長は倒せない。四つも駒が信長を守っている」

玉将と四つの駒を同時に動かして、茶々は包囲する駒を倒しました。

「あ……」

「まずはお父様がやられた。次に本願寺。雑賀。こないだは武田も」
茶々は玉将を包囲する駒をどんどん倒しました。

初も江もようやく理解できました。包囲したところで、一致団結している織田家を倒すのは至難の技であると。

しかし反信長軍を団結させるのなんて、不可能です。

「これじゃあ、誰も信長を倒せないYO」

初の言葉に、茶々は人差し指を横に動かして、チツチツチと言いました。

「策があるYO」

「どうするのかよう？」

「まずこつ」

茶々はおもむろに、四つの駒を玉将から引きはなしました。そのうえで一駒ずつを敵に近づけました。

「北陸の上杉、関東の北条、四国の長宗我部、中国の毛利に、それぞれ四天王をぶつけるんだYO」

たしかにこつすれば、もう玉将を守る駒はありません。

「……それで？」

「……」

そのうちの銀将一枚を裏返し、玉将に敵対するように動かしました。

玉将はひっくり返った銀将に倒されました。

「茶々ねーさま、すごいよう！」

江が感心していいました。

しかし次女の初は懐疑的です。

「そんなにうまくいくかYO？」

「いくわ」

「どーやって？」

「私たちの知恵と魅力で。絶対いかせるの。出来なかつたら、お父様のかたぎは誰が取るの？ 信長がそのまま天下人になっていいのかYO？」

「よくないYOー！」

「ぜったいおとーさまの敵をとるよう」

「そう。お父様の敵の信長も、お父様を捨てた市かーさまも、二人とも絶対許さない。だから絶対うまくやる。絶対成功させて、絶対信長を倒すんだYO」

「うん。わかったYO」

無理やりな理屈でしたが、その理論を押し切る茶々の心強さに初はうなずきました。

「くししし。がんばるよう」

江ものりのりです。

茶々は右手を差し出しました。

「浅井家、ファイ、YO！」

「YO！」

「よう！」

「この日ノ本を、浅井の血筋で支配するんだYO！」

三姉妹はそう誓い合つのでした。

第二十二話』とても可愛らしい策謀』の巻

茶々、初、江は信長君を裏切らせる人の人選にかかりました。

まず目に付いたのは光秀君です。

光秀君は一番の新参者で、しかも金にうるさい人物です。一番儲かる地位の、つまり支配者である信長君に取って代わりたいと思う気持ちは強いはずです。

「光秀を裏切らせるYO」

「うん。がんばるYO」

「くしし。江も。江もがんばるよう」

三姉妹は張り切って光秀君の身辺調査を行い案じた。

その結果。

『ドウフフ。やっぱり国づくりの根幹は金融ですな。織田家にはそれがわかるものが少ない。私がかんばらねば』

光秀君は意外な程に忠誠心が熱く、それ以上に天下日との信長君の下で新たな国づくりをすることに生きがいを感じているようでした。

「こりやダメっばいYO」

「そうだYO。次、次」

「茶々ねーさま、初ねー様。光秀って、信長のお嫁様の濃姫と親戚みたいだよ」

「そうみたいだけど。関係ないかYO?」

「むしろ光秀の忠誠の理由のひとつになってるっぽいYO」

「うーん。むりかよう」

江はしよぼんとなりました。

「つぎ、いくYO」

茶々が二人を奮起鼓舞するように言いました。

三姉妹が次に目をつけたのは利家君でした。

利家君は信長君の幼馴染であり裏切る可能性は薄そうですが、ともかく派手好きなので、一番目立つトップに立ちたいと思う可能性もあります。

三人は利家君を調査して弱みなどを探りました。

その結果。

『としくーん。ラブ』

『まつー。俺もラブラブだぜい!』

あきれほど利家君の脳内は奥さんのまつのことです。いっばいであり、それ以外の余暇で戦い好きの、派手好みなようでした。

「これは……弱点かY O?」

茶々が微妙な口調で二人の妹に聞きました。

まつを誘拐すれば、利家君のいうことをきかせるのは簡単そうです。

「でもまつがないと、利家はダメダメっばいY O」

初がやんわりと否定しました。

利家君とまつは、おしどり夫婦の域を超えています。なにしろ戦のない日はほぼずっと二人であり、しかもずっと手をつないでいるか抱き合っているのですから。

依存度が高すぎて、利家君にまつがいなくなったら廃人になってしまつ可能性すら考えられました。

「そつえば利家は、むかし奥さんが難産で戦を休んだことが合つたらしいよう」

江の話の聞き、茶々はあきれるとともに利家君の裏切りをあきらめました。

「利家もダメ。次いくYO」

三姉妹は次に、勝家君に目をつけました。

三姉妹が調査すると、あきれほどあっさり勝家君の操縦法がわかりました。

織田家の筆頭家老にして、オタでニートでデブの勝家君。

その性癖は……。

『これはすごいんだな！ 小学生でシスターで先生で妹で生意気でこんなに詰め込んでる設定なのに脇役って。新たな時代を感じる口りなんだな!!』

冷たい汗を流しながら、美少女三姉妹は顔を見合わせました。

「……ロリコンだYO」

茶々がいました。

「オタの上にペドだYO」

「幼女趣味だよ」

三姉妹とも深い恨みと復讐を誓ってはいますが、まだまだ年若い少女です。

というか幼女です。

三女の初にいたっては十歳にすらなってます。

「誰かが、恋人になれば。いうことを書かせられるYO」

それは間違いありません。

しかし……。

少女たちが我慢できる許容範囲を、勝家君の性格と容姿は大幅にオーバーしておりました。

「ここは、茶々ねー様に譲るYO」

初が素晴らしい笑顔で言うと、茶々の体がビクッと震わせました。

「え！……いや、わたしはその……。勝家からすればもうオバサンだろっから、一番若い江に譲るYO」

にっこりとほほ笑みながら、茶々は華麗に江にパスを回しました。

「振られ、今度は江が目を丸くしました。

「ええええ！ いやいやいや。むりむりむり」

「無理とかじゃないYO」

「ええーと。江はちっちゃいから、ぜったいむり。つぶされちゃうよっ」

「そりゃ私だってそうYO」

一番年上の茶々でもまだ11歳。体重30kg。

一方、勝家君は50歳近い上に150kgの巨体です。

年齢、体重ともに5倍の差があります。

「じゃあ間を取って、次女の初に……」

茶々と江の視線が初に向かいました。

初は猛烈な勢いで手と首を横に振っていました。

「ごめん。あれと同じ人類と思えないYO」

「うん。なんか獣っぽいよう」

初と江が口々にいいました。

「筆頭家老なのに……。絶対いっこと聞かせられるのに……」

茶々は断腸の思いで、勝家君を裏切らせることをあきらめました。

最後の望みは秀吉君です。

三姉妹は秀吉君を調査しました。

その結果。

『お金大好きでヤンス〜。女の子大好きでヤンス〜。お市さま大好きでヤンス〜』

調査の結果は非常に好ましいものでした。

「秀吉、すっごい俗物だよYO」

「好都合なことに、お市かーさまを好きみたいだYO」

「ってことは、私たちのことも好きに違いないYO」

三姉妹の意見は一致しました。

「どっつするっ？」

確認をする意味で、茶々が再度二人の妹の顔を見ました。

「……勝家に比べれば、ぜんぜんへいきだよ」

不細工だけど我慢する、と江は言いました。

「うん。わたしもぎりセーフだYO」

手を横に広げてセーフっぽいゼスチャーとともに初が言いました。

「じゃあ、やるYO」

茶々は妹たちの決意を確認して強く頷き、三姉妹は秀吉君にター
ゲットを絞ったのでした。

第二十三話『モテキ』の巻

秀吉君は女の子が大好きです。

そして信長君の妹であるお市が大々大好きです。

「ひびびびよっし」

そんな秀吉君を、かわいらしい少女が呼びました。

どことなくお市にしているその美少女に、秀吉君は見覚えがありました。彼女はお市の娘である茶々です。

「おお、茶々様。どうしたでヤンス？」

「秀吉って、あの墨侯にお城を築いたんだYOね？」

「おお？ おお、そうでやんす。あれは大変な仕事でヤンシた」

墨侯築城は魔人ハンベールの魔法に頼った結果でしたが、秀吉君はその手柄を全面的に自分のものにしていました。

「すごいYO。さすが織田家の四天王だYO」

「いやいや。まあたいしたことないでヤンス」

「秀吉が筆頭家老になれば、織田も安泰だYO」

「え！……いや、でも筆頭家老には勝家殿がいるでヤンスから」

「でも茶々は秀吉のほつが筆頭に向いてると思うYO」

「ま、まあ」

「というか勝家君が筆頭家老であることに肯定的なのは家中でも少数派です。」

「秀吉のほつが、かつこいいし！」

「え！？ えええ、まあ勝家殿に比べれば」

いくらサルっぽい秀吉君でも、スーパーデブで引きこもりがちのオタである勝家君に比べればなんぼかましです。

しかしそんな自虐的な回答を、茶々は真っ向から否定しました。

「秀吉はかつこいいんだから、もっと自信を持つべきだYO。……」

……茶々は自信がある秀吉のこと好きだYO」

少しだけ頬を赤らめて、茶々は秀吉君に言いました。

「えええええ！ いや、その。おいらにはねねがいるでヤンスし……」

「奥さんを大切にする秀吉も、茶々は大好きだYO」

茶々は秀吉君の胸に飛び込んで抱きつきました。

「あああ」

金縛りにあつたように動きができなくなる秀吉君。

「今度、おうちに遊びにいったいいかYO?」

「も、もちろんでヤンスよ。もちろん大歓迎でヤンス」

秀吉君はいきなりやってきた好感度100%の状況についていけず、しどろもどろになりながら言いました。

今度遊びに行く予定を二人で決め、茶々は去っていきました。

「いやー。驚いたでヤンス。まさか茶々殿がおいらのことを好きだったなんて……。お市様とはどうやっても結婚できそうもないし、ここはいつそ茶々殿に乗り換えるべきでヤンスか」

ぶつぶつと勝手な独り言を言いながら歩く秀吉君。

そんな秀吉君を、後ろから美少女が抱きついてきました。

「ひでよっー」

「うわ！ ええと。初さま」

「江だよう。間違えるなんて、ひどいよう」

「あ。すまないでヤンス。江様」

「くしし。でもそんな忘れっぽい秀吉も、江は好きだよ」

はにかんだ笑顔も可愛い江です。

「えええ？」

「秀吉つて、草履取りからここまで出世したんでしょう。すごいよ。江は頑張り屋な秀吉が大好きだよ」

「いやいや。そんな……」

「このまま出世したら最後は……天下人になっちゃうじゃないかよ？」

「ええ！ いや、それはいくらなんでも……」

「謙遜する秀吉もすてきだよ。こんど遊びに行っていいかよう？」

「ええ。もちろん」

秀吉君は江いも後日、屋敷に招く約束をして分かれました。

「これは驚いたでヤンス。まさか江様もおいらが好きだとは……。サル顔だとみんなに言われてたでヤンスが、オイラは実は幼女にもてる顔なのかも」

秀吉君が持ちなれない鏡で自分の顔を眺めていると、その顔のほほにくつつくくらしいの至近距離に少女が顔をだしました。

「あ、え？」

「どうもだYO」

「は、初様？」

「わあ。初のこと思えてくれてたんだね。嬉しいYO」

「ま、まあ」

秀吉君は憧れのお市の娘である三姉妹の茶々と江に、今日会っているのです。残る一人は初に決まっています。

「鏡をみて、どうしたんだよYO？」

「いや、別に……。白髪がないかな、なんて調べてたでヤンス」

「全然ないよ。秀吉は髪も黒いし、男前だよ」

「そ、そうでやんすか」

「鏡よ鏡よ鏡さん。織田家でいーちばんかっこいい男はだーれ？」

初は鏡を取ると、それを秀吉君に向けました。

鏡の中にはもちろん、秀吉君のサル顔が映っています。

「えへ。秀吉、鏡さんもかっこいいーって言ってるYO」

「え。……えへへ」

「照れてるよYO。照れてる秀吉もかわいいYO」

「あ、ありがとう。でダンス。……よお」

「うふ。YO」

唇の動きを見せるように、初がゆっくりといいました。

「よ。よう」

「YO」

「ヨ」

「まだまだだYO。今度、秀吉の家に言って教えてあげるYO」

「あ、ありがとうでダンス」

「秀吉君は初とも遊ぶ約束をして、分かれました。」

「こうして、秀吉君は浮かれました。」

「超浮かれました。」

「キタでダンス！ オイラの人生初！ モテキでダンス。モテモテの大フィーバーでダンスよ」

秀吉君は自室で意味もなく転げまわったり、悶えたりしました。

「これはどうするでやんしょう。もういつそ茶々様が初様か江様をお迎えするしか」

お迎えするとは、家に遊びに招くという意味ではもちろんありません。

側室に加えるということですよ。つまり愛人にしてしまう。

しかし主君の妹の娘を愛人にするのは、いくらなんでも身分上、無理があります。

「ああー。でもお市さまに似た美少女が、三人もオイラに惚れてる。オイラはどうすればーいいでヤンスか。こんなことならねねと結婚してなければよかったでヤンス」

秀吉君はぐるぐるとその場を転げ回りました。

「重婚、はダメでヤンスよねえ」

いまさらのように頭を悩ませます。

悩んだことのない『モテテモテテ仕方がない』という苦難に、秀吉君は嬉しくって仕方がない一方、やっぱり悩んでいました。

「いつそ……ねねと離れるでヤンスか」

秀吉君はそこまで思いつめました。

悶々としたまま秀吉君は日々を過ごし、そのうち茶々や初や江が秀吉君の屋敷に遊びに来ました。

訓練場のようなつくりの屋敷に三姉妹は面喰らいながらも、秀吉君はその場でもモテモテでした。

女の子にモテたことがない秀吉君にとって、生涯最良の日々でした。

「……楽しいでヤンス。女の子にチャホヤされるのがこんなに嬉しいなんて思わなかったでヤンス。ちょっと三人ともちっちゃいけど、それもまたよしでヤンス。ペドの勝家殿の気持ちが、いまよーやくわかったでヤンス」

わりとおっぱい星人な秀吉君をとるかすほど、三姉妹はかわいらしかったのでした。

「ねね……貧しい時からずっといっしょでヤンシたが。ここはもう離縁の一択でヤンス。幸い子供もいないし。ぶっちゃけねねってすごい怖いし。三行半をたたきつけて、オイラは茶々様か初様か江様と、新たな愛の船出に出るでヤンスよ！」

色に狂った秀吉君がそんなわけのわからない決意を固めました。

そんなある日のこと。

ねねが秀吉君を呼びました。

「おう！ おいらもねねに話があるでヤンス！」

秀吉君は離縁状を胸に秘めて、ねねの部屋に行きました。

ねねの部屋は、屋敷の一番奥まった、本来であれば一番偉い人がいるべき大部屋にあります。

「入るでヤンス！」

秀吉君が勢いこんでふすまを開けると、

「おそつございました」

部屋の中央には、ねねがいました。

それは当然として、ねねの脇には弟の秀長君もいます。

そして屋敷で訓練をしている特に成長目覚しい七人の少年武者。

さらにハンベール君とカンベール君までいます。

「あ、あれ？ みんなおそろいで。どうしたでヤンス？」

「それはご自分の胸に聞いたほうがよろしいのでは？」

ねねがいつも通りの冷徹な目で言いました。

秀吉君はブルッと震えました。懐に離縁状が潜んであることは、誰も知らないはずです。

いや、知らないというのは、思い込みかもしれません。

いつも秀吉君の陰に潜んでいる魔人のハンベール君とカンベール君が向こうにいるということは、むしろ秀吉君の行動は筒抜けという可能性もあります。

(えーい。だったらぐずぐずしててもしょうがないでヤンス！)

秀吉君は覚悟を決め、懐に手を入れました。

「あ、あの。それでヤンス」

「はい？」

「お、お、お、お」

「『お』が如何しました？」

「オイラは、愛に生き……」

「兄上！」

弟の秀長君が急に口を挟みました。

「何でヤンス。オイラは大事な話をしているでヤンス」

「こちらも大事な話でゴザル。秀長は、ねね様が大好きです。いついかなる時も、ねね様をたてて生きていく所存でゴザル」

「はあ、それでヤンスか」

秀吉君が考えました。

ねねと離縁したら、秀長君とねねが結婚するかもしれせん。

(ま、いいでヤンスかな)

色ボケしている秀吉君は特に深く考えませんでした。

が、その後に控える二人の魔人たちの言葉を聞き、秀吉君の血の気が消えました。

『わが主秀吉よ。ねね殿は立派な御仁だ。魔人の主にふさわしい。我もねね殿から離れことはなかるう』

とはハンベール君。

『カンベールも、ねね殿をマスター登録済みです』

とはカンベール君。

ねねと離縁したら、知恵袋の二人は秀長君(と、ねね)に付いて行ってしまいそうです。

「や、ちょっと待つでヤンス」

「われわれも！」

と、大声で言ったのは七人の若武者の中心に立っている清正君です。

「われわれもやがては秀吉様に忠誠を誓いますが、ここまで育ててくださったねね様のご恩は忘れません！」

清正君は堂々といいました。周りの少年武者も同感とばかりに強く頷きます。

ここでねねに三行半をたたきつけたら、彼らも秀吉君から離れていくでしょう。

そこで秀吉君は気がつきました。

今現在、秀吉君の軍隊を構成しているものたちは、大半がねねが奔走してかき集めてくれた者たちです。

次世代の育成もねねがやっています。

懐刀の秀長君もねねが好きなようです。

知恵袋の魔人たちもねねを支持しています。

「あ、はははは。でヤンス」

秀吉君はねねと離縁したら最後、もう軍団を維持できません。

四天王という地位はあるものの、一人ぼっちのサル顔男に逆戻りしてしまいます。

いまさら一から軍団を再編成することなんて、秀吉君にできるわけありません。今までやってこなかったんですから。

「えーと」

秀吉君は懐の離縁状を深く深く押し込み、絶対に出ないように仕舞い込みました。

「それで、だんな様」

「は、はい!」

ねねの言葉を、秀吉君は直立不動で聞きました。

「何かお話があるのでは?」

「ないでヤンス! なんにもないでヤンス!」

「そうですか。ではこちらからは」

「はいでヤンス!」

「あまり屋敷に幼女を連れ込まないでください。悪い噂が立ちますので」

「わかったでヤンス!」

秀吉君は大声で返事をしました。

それかも秀吉君に茶々、初、江の三姉妹がアプローチをかけた。だが、秀吉君は鉄の意志でなんとかそれを拒否しました。

「ううー。辛いでヤンス。モテキがこんなに辛いものとは思わな

「つたでヤンス」

秀吉君は泣きました。

その影で、大きな畏を秀吉君は知らず知らずのうちに回避していたのでした。

「ちえ！ 失敗だＹＯ」

茶々は秀吉君の顔がかかれた半紙を破りました。初も江も憎々しくその破られた秀吉君の顔を見降ろしました。

「惜しかったよう。途中までは秀吉もノリノリだったのに」

「誰かが邪魔しに動いたに違いないＹＯ。でも、あきらめないＹＯ」

「あきらめたらそこで」

「御家断絶だよ」

「頑張るわＹＯ。じゃあいつものね。浅井家、ファイ、ＹＯ！」

「ＹＯ！」

「よう！」

三姉妹たちはまた新たな策謀を練ることにしました。

第二十四話『よくお似合いな兄妹大作戦』の巻

ついに理性の限界点が超えた信長君が、お市にとびかかりました。

「おいちー。お市、可愛いよお市」

「きゃああ！ お兄様やめて。すとーっぷー！」

「お市たんは俺の嫁！」

「お兄様の嫁は濃さんでしょう」

「お市たんペロペロ」

「舐めないでっばー！」

必死で耐えるお市。そこに信長君を支える四天王が現れました。

「信長のアニキ、実の妹を押し倒すなんてサイテーだぜ」

「ドウフフ。こんな倫理観のない主君には仕えられませんな」

「がっかりでヤンス」

「さよならなんだな。バイバイなんだな」

四天王は信長君を見捨てて去っていきました。

こうして信長君は独りぼっちになって、どっかの雑兵に討ち取ら

れてしまったのでした。

おしまい。

「……という作戦を練ったんだよう」

江の紙芝居が終了しました。

ここはお市の娘三姉妹がいつも織田家滅亡の作戦を練る秘密の部屋です。

もちろん紙芝居を見ていたのは茶々と初です。

「江。ちょっと聞きたいんだけど、いいかYO？」

長女の茶々が微妙な顔で聞きました。

「なにかよう？」

「信長はどうやってお市かーさまに襲い掛かるのかYO？」

「それは応相談だよ」

「信長がすっごいオタ臭いのはなんでかYO？」

次女の初が同じく微妙な顔で聞きました。

「変態はこんな感じだとおもったんだよう」

「あ、そう」

茶々と初はお互いの顔を見合いました。

三人は前回、秀吉君を誘惑して離反させる作戦に失敗したばかりです。次なる行動を何か起こしたいのですが、よい策が思い浮かびません。

何もしないのでしたら、こんな穴だらけの作戦でもいいかも知れません。

「まあ、いいかYO」

「だめもとだYO」

「大丈夫だよ。江はてんさいだから、絶対うまくいくよう」

「はいはいじゃあいつもの行くわよ。浅井家、ファイ、YO！」

「YO！」

「よう！」

三人の美少女達は、澁刺と掛け声とともに織田家滅亡へむけて再度行動を開始したのでした。

翌日のこと。

三姉妹たちは安土城で政務をとる信長君に遊びに行きました。

「信長さまー」

「おや、茶々に初に江。どうした？」

「遊びに来たんだYO」

「そーかそーか」

信長君は結構忙しかったのですが、仕事をとりあえず脇に置いて三人と遊びました。

基本的に思考が子供である信長君は、同じく子供な三姉妹たちとぴったり波長が合い、四人は城の中庭でへとへとになるまで遊びまわりました。

「あー楽しかったYO」

「そうか、そりゃーよかった。じゃあ俺はそろそろ仕事に戻る」

「頑張ってYO」

「YO」

「よう」

「おお。わかった。それじゃーな」

三姉妹は信長君を見送ろうとしました。そこでようやく、最年長の茶々がはつと気が付きました。

「ちよ！ ただ遊んでちゃダメじゃんYO」

「あ、そうだったYO」

「なにが？ 江は楽しかったよう」

「あんたが考えた作戦でしょうYO！」

「ああ、そうだったよう。おかーさまの魅力を要所要所に教え込んで、信長をコロツと色に狂わせるはずだったのに」

三人とも楽しくお遊びまくっていたため、当初の目的をすっかり忘れておりました。

三姉妹が抜けているというよりは、信長君の遊びが面白すぎるのが原因です。

「信長様〜。ストップだYO！」

茶々が信長君を大声で呼びとめました。

「うん なんだ？ 遊びはまた今度な」

「そうじゃなくって……。信長様はおかーさまのことをどう思っているのかYO？」

「大好きだ！ 多分宇宙で一番！」

信長君は一切の迷いなく、堂々と言い切りました。

「そ、そうかYO」

もはや魅力を教え込む必要ななどなさそうなくらいのきっぱりとした態度です。

望むべき最高の答えなのに、聞いた茶々の方がたじろいでしまうほどのド直球な回答でした。

「だから娘のお前たちも大好きだぞ」

「ど、どうも」

「えへへ嬉しいYO」

「よう」

なぜか照れる初と江の頭を、茶々がパシンと叩きました。

「じゃあ今度、おかーさまをお芝居に誘って欲しいYO」

「え？　なんで？」

「おかーさまは寂しがつているYO」

「そうなのか？」

もちろんそんなことはないのですが、そうでないと三姉妹にとっ

て都合が悪いのです。

「そつと優しく包んでほしいんでYO。それは兄の信長様の義務だYO」

「兄って、そういうこともするもんなのか？」

「もちろんだYO」

「当たり前だYO」

「とーぜんだよ」

三姉妹に力強く頷かれ、信長君もそんな気持ちになりました。

「わかった。じゃあ今度な」

「今度じゃだめだYO。明日、チケットあげるから、ちゃんとおかしさまを誘うんだYO」

茶々は信長君に強引に芝居のチケットを渡しました。

男女の恋仲を題材に扱ったアツアツなカップル向けの芝居です。

「明日か……。濃と食事の約束があるんだが……」

「奥さんと妹とどっちが大事かYO！」

「え そりゃー。その」

信長君は先ほどの堂々とした回答とは打って変わって口ごもりました。

「濃さんとはいつでも食事できるでしょう。でもおかーさまは今とてもさみしがってるんだYO」

「そっか……それもそうだな。わかった。じゃあ濃には謝っておいて、お市を誘うをおう」

信長君はお芝居のチケットを受け取りました。

「それでこそ天下人だYO。ちゃんと誘うんだYO」

「ああ、わかった」

「あとわたしたちに頼まれたと言っちゃだめだYO。おかーさまは誇り高いから、あくまで信長様が、自主的に誘ったことにするんだYO」

「それもそうか。うん、わかった」

基本的に人を疑うことを知らない信長君は、快諾しました。

「頼んだYO」

三姉妹は遊んでいた時とは全く異なる、悪意のこもった暗い笑顔でにんまりとほほ笑みました。

第二十五話 『よくお似合いな兄妹大作戦2』の巻

茶々、初、江の三姉妹にお芝居のチケットをもらった信長君。

さっそく翌日、信長君とお市はお芝居を見に行くこととなりました。

「お兄様がわたしを芝居に誘うなんて、どっという風の吹き回し？」

「ああ。それは茶々が……」

言おうとして信長君は口を閉じました。

自分が自主的に誘ったことにする約束です。

「茶々？ 茶々がどうかした？」

「いや、違う……赤ずきんチャチャって、今さうだけど可愛かったなあと思っただけだ」

「……………はあ」

お市は返答に困りました。

「それはともかく、たまにはお市と芝居に来たかったんだ。迷惑だったか？」

「……………そんなことは、ないけど」

「いやなら蘭丸といってもいいぞ。チケットやるから」

「嫌じゃないって言うてるでしょう!」

お市に急に大声出されて、信長君は目を丸くしました

「う、ごめん」

「……こっちこそ、ごめんなさい。お兄様」

二人は微妙な雰囲気のまま、茶々が厳選したラブラブカップルむけのお芝居を観にいきました。

「これって、お兄様の趣味？」

「う、……うん」

全然違いますが、信長君は強引にうなずきました。

「ありえない展開ね。なんで記憶喪失とか簡単になるの？ そんなにありふれてるっけ、あの病気って？」

「よくわからん」

「まったく。こんなストーリー、普通じゃ絶対おこないわ。現実感なさすぎ」

「そつだな。まあ俺もこういうのはあんまり好きでは……」

信長君の趣味はもっとわかりやすい、大立ち回りがある派手な芝

居です。

「けど。……でも、悪くない、かな」

一方、お市はベタなラブストーリーがバカにしつつも嫌いではありませんでした。政略結婚した挙句、相手が実家を裏切った経験が、恋愛への憧れとなっております。

お市が楽しんでいるとわかって、信長君もほっと息をつきました。

「そっか。ならよかった」

「これで相手がお兄様でなければサイコーなんだけどな」

「む。そりゃ悪かったな」

「うそうそ。楽しいわよ、天下人様」

「てんかびと……お市にそう呼ばれると、ちょっとつてれるな」

「……そうっ？」

「うん」

お市は信長君と手を組みながら、仲よくお芝居を鑑賞しました。こうして天下人とその妹のお忍び芝居鑑賞は、滞りなく終了したのでした。

一方そのころ。

お芝居を鑑賞する信長君とお市のはるか後方で、オペラグラスを見ながらその様子を観察している三つの影がありました。

もちろん茶々、初、江の三人です。

「二人とも、いい感じだYO」

「これで二人がキスをすればオツケーだYO」

「くしし。江のさくせん、かんぺきだよ」

江が誇らしげに言いました。

「そうね。こんなにうまくいくとは思わなかったYO」

茶々は江の髪をくしゃくしゃと撫でました。

「芝居小屋からお城までの間には、最短ルートでいくとラブホテル街があるYO」

「二人はしっぽりと」

「で、それをフォーカスして、ばらまけば……くししし」

三人は笑いあいました。

が、三人の思惑と反して、信長君とお市は手をつないでラブホテル街を通過し、安土城に戻っていきました。

「あ、あれ？」

「????? なんでご休憩しないのかYO」

「わけわかんないよう」

三人とも？マークを浮かべて不思議がりました。

雰囲気からいって、信長君とお市はそのまま間違いを犯してもおかしくない感じでした。

ではなぜ？

その理由は、信長君の天下人を目指した理由でもある『お市にだけはカッコよくありたい』という顕示欲が理由でした。

信長君にとってお市は絶対的な価値観の基準であり、ラブホに入ろうなんて言った途端嫌われるとおもつと、どんなに雰囲気がよくなくても紳士（草食系）になってしまうのでした。

しかしそんなことは、三姉妹にはわかりません。

「なんでだYO?」

「信長、おかーさまには興味がないかYO。子持ちは嫌いかYO?」

「ロリかよう?」

「それはないよ。間違いなく、信長はお市が大好きだYO」

三人は頭をひねりました。その結果、アプローチが足りないという結論に達しました。

それから三人はことあるごとに信長君にお市を遊びに誘うように仕向けました。

信長君はお市が大好きなので、それをすべて受け入れ、お市と遊びに行きまくりました。

お市も天下人となり、立派になった信長君が気に入っていたので、遊びに行くのに断ることはありません。

そして二人はこっそり近くの温泉に行くまでになりました。

が……！

「なんで手を出さないんだYO！」

混浴温泉のチケットを手配してもなお、絶世の美女お市に手を出さない信長君の草食っぷりに、三姉妹はヤキモキするばかりでした。

「この作戦、失敗だYO」

初が言いました。

「というか、もうお小遣いがないYO」

天下人の妹の娘という立場では三姉妹が動かせるお金はそう大きいものではありません。

三姉妹は少ないおこずかいをやりくりして、三時のおやつも節約してせつせと信長君とお市の遊興費を負担しておりました。

甘いもの好きの女の子としては決死の儉約精神でこれまで頑張ってきましたが、それももう限界です。

さすがに二人の温泉旅行を手配した段階で、財布の底をつきました。

「しっばいかよう」

作戦を考えた江も、さすがにこれ以上お菓子を我慢するのは嫌だったので、失敗を認めました。

「信長め……据え膳くわねばって言葉を知らないのかYO」

「紳士すぎるのも考え物だYO」

「お菓子代返してほしいよう」

三姉妹がぶつくさ言いながらお城を歩いていると、何か鳴き声のようなものが聞こえてきました。

三姉妹は瞬時に障子の影に隠れ、その声を聴きました。

「うつつうつつ。みっちゃーん。信長様ったらヒドイのよー!」

「濃様、落ち着いてください」

その声は、信長君の奥さんの濃姫と、四天王のひとり、光秀君でした。泣いているのはもちろん濃姫です。

「だって信長様は、わたしとは夕飯も最近食べないのに、お市と遊びに行ったり、お市お芝居に行ったり。この間なんて二人で温泉に……。わたしとは新婚旅行もいかなかったのに！」

「いや。お二人がご結婚した時には情勢が不安定だったので……」

「じゃあ今行けばいいじゃない！　なんで妹との温泉旅行が先なのよー！」

「う……その。あの……信長さまには何かお考えが」

「どんな考えがあるの！　実の妹と遊びほうけて！」

「ま、その……」

「う……う……。愛しの信長。もう信長様は濃を愛していないのね」

「そんなことはありません。濃姫は、その、お美しいですし」

「憎い……。出戻りのお市が憎い……」

「濃姫様！　そのようなことを軽々しく口にはいけません」

「ぐすぐす。みっちゃーん！」

光秀君は、一生懸命になって濃姫をなだめておりました。

三姉妹はにんまりと笑いました。

「いいアイデアが浮かんだYO」

「うん。わたしも。たぶん茶々ねーさまと一緒に」

「くしし。江もね。いいアイデアが浮かんだよ。あのね。あのね」

なにかを言おうとする江の唇を、茶々がそつと人差し指を押し当てて止めました。

「うふ。じゃあ部屋に戻って作戦を練りましょうか。今度こそ成功する。織田家の滅亡の作戦を」

「うん」

「くしし。ねーさま、いつものやるうふよ」

「……小声でね」

「うん」

「浅井家、ファイ、YO」

「YO」

「よう！」

予想以上に大声を上げた江を笑いながらたしなめ、三姉妹は秘密の部屋へと戻っていきました。

第二十六話『よくお似合いな兄妹大作戦3』の巻

信長君はちよつと気がかりなことがありました。

奥さんである濃姫の機嫌が、最近すこぶる悪いのです。

「あの一。濃さあ」

「（ギロ）……はい？」

濃姫は振り返っただけなのですが、他者の機微に敏感な草食系の信長君は、その臆病さから濃姫の不機嫌を的確に感じ取りました。

「あ、いえ。なんでもないです」

そして天下人になった今でも喪男な習性を引きずっている信長君は、奥さんが不機嫌な理由がちーっともわかりませんでした。

「なんだろう。何にもしてないのに。濃がすごく不機嫌だ」

原因は奥さんに『何にもしてない』うえに、妹のお市とは『ちよくちよく遊びに行っている』からなんです、そこいら辺が信長君にはわかりません。

信長君は二人とも大好きでした。

が、もてない暦の長すぎる信長君は、それを表に出す行動がすこぶる苦手だったです。

事態は刻一刻と悪化の一途をたどっていきました。

一方。

ここは茶々、初、江の三姉妹の秘密会議の部屋です。

「作戦は順調だYO」

茶々は含み笑いを浮かべました。

「でも後一步だYO。大願成就のためには、もう一押しが必要だYO」

次女の初が言いました。

それは茶々もわかっていたので、すかさず答えました。

「信長がおかーさまを誘うのは限界が来ているYO。次はおかーさまが、信長を『お礼』に遊びに誘うんだYO」

「くしし。ナイスだよ」

「あとちょっとこれを続けられ……」

「濃はきつと耐え切れなくなるYO」

濃姫が耐え切れなくなった時。

それが三人が考えた織田家崩壊作戦が生きるときです。

その日がくるまで、この状況をなんとかしてでも維持しなければなりません。

「でも、もうお金がないよう？」

維持するためにはお金が必要です。

しかし三姉妹のお小遣いは、もう底をついておりました。

手元にある物で金品に替えられるものは、全て質入してしまっています。

「……ここが勝負どころだYO」

茶々は覚悟をこめて、短刀を手にしました。

「それ、売るのがYO？」

「違うよ。茶々ねーさまは、押し込み強盗をするんだよう？」

次女と三女が口々にいう言葉を、茶々が首を振って否定しました。

「どっちもバツテン。二人とも、ちょっと目をつぶっててYO」

「うん？」

「わかったよう」

姉を信頼する初と江は、言われたと折り目をつぶりました。

ザク、ザク

短く鈍い、何かが切断される音が、部屋に響きました。

パラパラパラっと、初と江の美しい黒髪が、床へと落ちました。

「えー!!」

「わーわー!!」

強制的に髪を切られた二人の少女は、大声で叫びました。

このまま放っておくと人が来てしまうので、茶々は二人の口をふさぎました。

「二人とも、黙んなさいだＹＯ。このきれいな黒髪を売って、最後のお金にするんだＹＯ」

暴れるのをやめた初が、茶々に聞きました。

「髪って、お金になるのかＹＯ?」

「もちろんだＹＯ。初や江みたいな綺麗な黒髪は、カツラ屋さんに売ればとつてもいいお金になるんだＹＯ」

「……茶々ねーさまは、髪を切らないのかよう?」

恨みがましい江の質問に、茶々はにっこり笑って答えました。

「もちろん切るわYO。わたしが妹二人を犠牲にして、のうのうとできる人だと思っっているのかYO?」

その一言を聞いて、二人はにっこりと笑いました。

「じゃあお姉様。ばっさりとおねがいするYO」

「ええ……」

茶々は鏡を見ながら自分の髪を切るうとしました。

が、そこでぴたりと動きを止め、さらに短刀を床に置いてしまいました。

「茶々ねーさま?」

「……やっぱ、とりあえず二人の髪売ってお金に換えましょう。これで予算が十分かもしれないし」

茶々は満面の笑みをうかべ、美しい黒髪をたなびかせて二人に振り返りました。

「えー! それはないYO」

「ずるいよう。おねーさまずるいよう」

「いいの。よくよく考えたら、三人ともいきなり髪きってたら周りがびっくりするでしょ。二人までなら洒落で通じるから、ね?」

「……」

「……」

じつとりとした目で、初と江が茶々を睨みます。

「な、なにYO」

「江。GO!」

「うん。茶々ねーさま。だいすきだよー」

江は跳ねるように茶々へと抱きつき、その両腕をがっちりとホルドしました。

「ちょ。離しなさい、江!」

「ふっふっふ、だYO」

そして初は、茶々が二人の髪を切った短刀を手にゆっくりと近づきました。

「きゃー。やめてー。髪はやめてYOー」

「わたしたち三人は生まれた日は違えども、死すべき時と、髪を切る時は一緒だYO」

「いっしょだよ」

「ぎゃー！」

ザックリ。

バサバサバサ。

一番年長の、一番長い茶々の黒髪がぱさりと落とされました。

「うっうっう。私の黒髪が、こんなみつともないおっぱに……」

鏡をみて嘆く茶々。

「これで三姉妹おそろいだYO」

初と江が微笑みました。

「うっうっう。そうね。もうこうなったら、この作戦は絶対成功させるわYO」

「もとよりだYO」

「がんばるよう」

「うっう……じゃあ、いつものね。……浅井家、ファイ、YO……」

「YO！」

「..!」

「……とりあえず、カツラ屋さんに行くYO」

「うん」

「高く売れるといいよう」

三姉妹は城内の人々の注目を微妙に集めつつ、カツラ屋で大量の黒髪を売却し、お金を手にしました。

そのお金を使ってお市に船遊び、芝居などのペアチケットを購入。三人の母であるお市に、信長君と遊びに行くように進めたのでした。

「あら？　ありがと。そうね、最近お兄様に遊びに誘われてばかり出し、たまにはこっちからも良いかな？」

お市はさして疑問も持たず、愛する娘たちの好意としてそのチケットを受け取りました。

こうして信長君とお市は、どんどん気の合う兄妹となっていきました。

その一方で。

お城ではいつもお留守番となっている濃姫と信長君との不仲説とともに、お市と信長君との禁断愛の噂まで流れ始めておりました。

噂の出所は、もちろん茶々、初、江の三姉妹です。

ですがこの手のゴシップは出所に関係なく口から口に伝染するよ

うに広まっていき、お城に始終いる濃姫の心を苛んでいきました。

「うづうづうづ……のぶながさま。なぜわたしではなくお市と……。しくしくしく……。おいちめえ。おいちがにくいにくにくにくにく」

こうして濃姫の精神は、徐々にヤンデレ方面に病んでいったのです。

第二十七話『ヤンデレラ帰蝶』の巻

いうまでもありませんが、信長君の周りは敵だらけです。

北は上杉、南は長宗我部、東に北条、西に毛利と、敵には大国がそろっております。

ですが武田や本願寺を倒した信長君は、それ以上の大々国となっております。

天下人としての余裕が生まれたのです。

「よし。これからは各個にぶつかろぞ」

「どういうことでヤンス？」

秀吉君の質問に、信長君はホワイトボードに書きながら説明をしました。

「越後の上杉には勝家がいけ。毛利は秀吉、北条は利家、長宗我部は光秀な。それぞれが敵を分担して戦うんだ」

「ほうほう。なるほどでヤンス」

「それでも戦力は集中するぞ。毛利と長宗我部は本気で行けよ。上杉と北条は守りでいい」

「んー。ってことは、オイラと光秀殿が主力でヤンスか」

秀吉君がふむふむとうなずきました。

主力で敵を落とせば、また手柄が立てられて偉くなれます。

「ちえ。俺は主力じゃねーのかよ。つまんねえ」

派手好き、戦好きの利家君が唇をとんがらせました。

「そういうな。まつが住み慣れた尾張に行きたいって言うから、なるべく尾張に近い敵を選んだんだぞ」

「まあそういうことなら信長のアニキに従うけどな」

利家君は戦好きですが、それ以上に奥さんが好きでした。

「おでは寒いのは……」

不満を言おうとする勝家君に、信長君が口を挟みました。

「そんだけ脂肪があれば平気だろ。がんばれよ、勝家」

「こ、これは脂肪じゃないんだな。柔らかく鍛えた筋肉なんだな」

「なんだそれ？ これ以上肥満しないためにも、北陸の風に当たって引き締まって来い」

「ううー。しかたないんだな。頑張ってくるんだな」

「よし。じゃあみんな大丈夫か？」

とそこで信長君が、主力の一つを率いる光秀君が何も話していないことに気が付きました。

「光秀、大丈夫か？」

「……」

「おい、光秀」

「……」

「光秀！」

「ドウフ！？ いや、なんでしょうかな？」

「大丈夫か？ ボーっとしてたみたいだけど」

「ええ。ああ……ドウフフフ。問題ありません。わたしは……毛利ですか？」

「ちがう！ 毛利は秀吉だ。お前は四国の長宗我部を攻めろ。任せたぞ」

「ドウフフフ。おまかせあれ……」

そこで思いつめたような顔の光秀君が、急に話題を変えました。

「……ときに、信長様」

「うん？ なにか質問か」

「まあそのようなものです。その……夫婦仲は最近いかがでしょうか？」

「は？ いやべつに……普通だぞ」

夫婦仲は決して良好ではありませんでした。しかし信長君には濃姫が『なんだかよくわからないけど怒っている』という認識しかありません。

部下に言うほどではないうえに、みっともなくって言える話でもありません。

「そうですね。ならばよいのですが……」

光秀君はまた思いつめた顔で、黙って考え事をし始めました。

光秀君は軍議が終了するまでまた口を開くことはなく、またその表情が晴れることはありませんでした。

カッーン、カッーン

最近、濃姫には日課ができました。

毎日毎日、規則正しい時間に行く濃姫の新しい習慣です。

これが朝の体操とかだったら健康的で良かったんですが、実情は

違いました。

その日課が行われているのは深夜二時〜三時。

白装束に蝋燭をつけた鉢巻。五寸釘と木槌をもって行われる牛の刻参りです。

「お市め。お市め。お市めえええ」

カッーンカッーンカッーン。

濃姫は必死の形相で藁人形に五寸釘を打ち付けておりました

過去のおしとやかな雰囲気は既になく、血走った目とやつれた頬をした、とてつもなく好戦的な顔となっておりました。

「濃姫様。……おいたわしい」

そんな様子を、光秀君は隠れてみておりました。

光秀君と濃姫は、滅亡した土岐一族の末裔同士です。また濃姫の父親であるマムシの道三は、かつて光秀君に兵法を伝授してくれた尊敬すべき師匠でもあります。

光秀君は濃姫が好きでした。

ただそれは男女の愛情と言うよりも、とても大切な宝物のような気持ちでした。

そんな光秀君にとって、今の濃姫の状況は耐え難いものでした。

ある日の牛の刻、覚悟を決めて光秀君が濃姫の前に姿を現しました。

「濃姫様」

濃姫は白装束です。手にはワラ人形と五寸釘があります。

「あ、みつちゃん？」

濃姫は慌てた様子はありませんでした。

とても重大な秘密を見られたにもかかわらず、濃姫は手にした藁人形とか五寸釘とか木槌を隠す様子はありません。

「みつちゃんもやる？ これをやるとね。信長様を苛む悪い妹が死んで、みんなが幸せになれるんだよ」

濃姫の瞳は明らかに常軌を逸しておりました。

「濃姫様……」

「うふふふ。はやく死なないかなあ。お市。この。この。この！」

濃姫が隣にいる光秀君を、まさに傍若無人（傍らに人が無しがごとく）に無視して、五寸釘を藁人形に打ち付けました。

「濃姫様」

「しねしねしね。お市死ねえええええ！」

「濃姫様！」

耐え切れなくなり、光秀君が濃姫の後ろからかぶさりました。後ろから抱きついたらともいいます。

「……みつちゃん？」

「この光秀にお任せを。全てをお任せください！」

いったい何を？、とも何も具体的なことは言わずに、ただ光秀君は任せて欲しいと連呼しました。

「お任せください。槍の光秀に、全てお任せを」

濃姫は後ろから抱きかかえられるようにされたまま、じっと動かずにいました。

硬く握っていた手を広げると、木槌が落ちてカーンと乾いた音が響かせました。

「……みつちゃん。昔みたいに呼んでよ」

光秀君は黙りました。

思い出しているわけではありません。片時も忘れたことのない名前です。ただ主君の奥方を、その幼名とも言える名前で呼ぶことのためらいがあったのです。

しかし光秀君は覚悟を決めて言いました。

「はい……………帰蝶様」

「……………そう呼ばれるって、久しぶり。……………もうその呼び名を知ってる人って、誰もいないのかな。信長様がそう呼んでくれたら、素敵なのに……………」

「はい。そうですね」

光秀君が焦点も定まらぬ濃姫を抱きしめながら、そのまま頭をたれました。

「やったYO」

その牛の刻参りのはるか後方。

灯籠の陰に隠れている影が三つ。

一人は茶々、一人は初、一人は江です。

「浮気の決定的な瞬間だYO」

「YO」

「よう」

三姉妹の場所から見ると、光秀君と濃姫がキスをしているようにしか見えません。

三姉妹は互いに軽く手を叩きあい、作戦の成功が近いことを喜びました。

「でも安心はできないYO。むしろこれから最大の難関。信長はなんども危機を乗り越えてきた主人公補正の高い男だYO」

「奸智奸佞。謀の限りを尽くして妨害するYO」

「くしし。がんばるよう」

「じゃあいつもの。小声ね。浅井家、ファイ、YO」

「YO」

「よう」

三姉妹はほくそ笑みながら、牛の刻の間に消えていきました。

第二十八話 『場にいる二人の妹を生贄にしてトラップカードを発動!』の巻

光秀君は必死でした。

四国討伐に向かう前に、何としてでも信長君と濃姫の夫婦仲を修復せねばなりません。

そうしないと、いつか濃姫の精神が壊れてしまいます。

そしてそんな濃姫のことが心配で、光秀君も戦なんかできないでしょう。

後顧の憂いなく仕事をするには、主君の夫婦仲を取り持つ必要があるのです。

「ドゥフフフ、信長様、お話があります」

「おお。光秀か。ちょっと今忙しいんだ」

「こちららも火急のようにて。実は濃姫様のことなんです、ぜひと帰蝶と呼んでいただきたく……」

「どういうことだ？ 帰蝶ってのはなんだ」

「ドゥフフ、帰蝶というのは濃姫の幼名です」

「俺の吉法師みたいなもんか？」

信長君は元服するまではそう呼ばれておりました。

今ではこの呼び名を覚えている人は数えるほどしかいません。

「ドウフフ。ぜひ親しげにそう呼んでいただきたいのです」

「わかった後でな」

信長君は光秀君の申し出の意味が分かりませんでした。とりあえず了承しました。

「ドウフフ。お話が早くて助かります。できるだけ早くお願いします。」

「いや、今すぐは無理だ。こっちも大事でな」

「ドウフ？ いかがしました」

「なんだかこちらの軍事情報が、敵国に漏れているようでな」

「な、なんと？」

光秀君は驚きました。

秘密裏に進めていたはずの日ノ本統一のための四方面作戦が、まさか敵に漏れているとは？

「今さら変更はできないが、相手が待ち構えている可能性もある。派遣する軍を増やすぞ」

「それでは……信長さまとともに京に残る兵がほとんどいませんが」

光秀君は軍略家らしく、濃姫のことを一時脇に置いて信長君に確認しました。

「お前らが負けなければ、京周辺に敵が来ることはないから大丈夫だろ」

「まあ、そうですが」

「もし何かあったらお前らが帰ってきてくれ。頼んだぞ」

「ドウフフ……わかりました」

光秀君は頷き、そして早速派遣する兵の数やらの協議に入りました。

さすがにこの緊迫した状況では、「とりあえず全部を捨て置いて、奥さんの部屋に言って優しい言葉をかけて欲しい」なんて言い出すことはできません。

協議終了後、増やされる兵隊の編成の為に、光秀君はそのまま引き下がりました。

「だーいせーこーだYO」

茶々が二人の妹に向けてブイサインを出しました。

「さすがだYO」

「おねーさまのことを、江は初めて尊敬したよう」

二人の妹も茶々をほめたたえました。

「初めて、なの？」

茶々はちよつとショックを受けた顔になりました。

「気にしないでよう」

「でも茶々ねーさま、ほんとにすごいYO。よく敵国に内通なんてできたYO」

その点について、次女の初は驚愕せざるをえませんでした。

関東の北条、北陸の上杉、四国の長宗我部、中国の毛利。これらの軍に情報を流したのは、茶々です。いま織田軍はその話題で持ちきりとなっており、信長君もかかりつきりになってしまいました。

たとえ賢いとはいえ、幼女である茶々のできる領域をはるかに超えています。

「ふふふ。簡単なことだYO」

「後学の為に教えてほしいYO」

「よう」

「ふふ。実はね……。情報なんて、流してないの」

「……は？」

「どづいうこと、どづいうことかよう？」

「情報が流れたって噂をばらまいただけ。それもできるだけ詳細に」
茶々はいたずらっぽく微笑みました。

たしかに噂を流すだけならば、城内や家中の人間関係を把握しているだけでできます。

誰かが得する噂ながら警戒されるでしょうが、この噂話で得することは誰もいません。それが信憑性を増しました。

さらに重要なことは、この噂話は真偽を確かめる方法がないのです。

そして信長君が大急ぎで軍備増強をすればそれは他国にも波及するでしょう。それにより結果的に噂は真実になります。

「すごい。すごいＹＯ」

初も目を丸くしました。敵国に内通しているよりお凄いことを、姉の茶々はやってのけているように思えました。

「これで信長は抑えたＹＯ。あとは……おかーさまだＹＯ」

「おかーさまも主人公補正が高いから。お家の一大事になったら、何か気が付くかも」

「その為にも、次の策を打つんだYO」

三姉妹の前に、小さな紙が折りたたまれていました。

紙の中には茶色の粉末がはいつています。

「じゃあ初。頼んだYO」

茶々が妹を促しました。

「あみだけ決めたから、しかたないYO。……これ本当に大丈夫だYOね？」

「もちろん」

茶々と江は笑顔でうなずきました。

覚悟を決め、初はその粉末を口に入れ、水で一気に飲みこみました。

数秒後。

「これ……おなかない……ほんとに……仮病の薬かYO？」

「ううん」

茶々は笑って首を横に振りしました。

「……え？」

「リアリティーを増すために、本物を使うことにしたんだYO」

「そ、そんな……」

「大丈夫。お医者様の話だと、五分五分で完治するっていったYO」

茶々の何でもない言葉に、初が苦しみながらも聞きました。

「……五分五分って……絶対、大丈夫って言ったじゃ……」

「初なら絶対大丈夫。うん、あんしんしてYO」

何の根拠もなく茶々がほほ笑えみました。

「うそ……。こんなのって……」

初は恨みがましく茶々を見つめた後、そのまま顔を真っ青にして倒れました。

「お、おねーさま。本物を使ったのかよう？」

ぶるぶると震える江。

「言ったでしょう。リアリティーの問題。もう後には戻れないんだから、江も腹をくくりなさい」

「お、おっけーだよ」

実の妹に毒をもった姉に震えながら、江も目的の為に強引に感情を脇に置きました。

「じゃあ江、叫ぶYO」

「うん。せーの」

二人は深呼吸をして、大声を張り上げました。

「きゃあああ！！ だれかー！！」

「初ねーさまが倒れたよう！！」

ただでさえ騒がしかった城内に、また一つ騒動が増えました。

初は原因不明の病で倒れたことになり、嚴重な看護体制が敷かれることになりました。

娘のことが好きで好きでたまらないお市は、もちろん初につきっきりで看病です。

「お医者様がいうのだけど。何か悪いものを食べたかもしれないって。わかる？」

「わからないYO」

「江もしらないよう」

茶々と江は二人そろって首を横に振りしました。

「そう……。ちょっと最近、濃さんお加減がすぐれないから心配な
んだけど……」

「おかーさま！ そんな血のつながってない人と、初とどっちがた
いせつかYO」

「初ねーさまが可哀そうだよ」

茶々と江があわてて力説しました。

「そ、そうね。うん。大丈夫よ。初は私がきちんと看病するから」

お市は初のうえにある濡れタオルを絞りなおしてまた看病にかか
りました。

茶々と江はひそかに笑いながら、その場を後にしました。

茶々と江はほくそ笑みながら、あわただしい城内を歩いていまし
た。

「これでほとんど完璧だYO」

「くしし。じゃあ『ほとんど』ってことは、あとなにかよう？」

「察しがいいわね。じゃあ最後の詰めに行きましようか」

「わかったよう」

二人は簡単に打ち合わせた後、城内の奥の部屋へと向かいました。それは濃姫の部屋です。

「濃姫様、こんばんＹＯ。入るＹＯ」

天下人の奥さんの私室には、最近訪ねてくる者がだれもおらず閑散としておりました。

「……誰？」

「茶々だＹＯ」

「江だよう」

濃姫はすっかり病人のような顔になっておりました。食事もとらず、ただ夜更かしをして毎晩の牛の刻参りだけは欠かしません。

どんな鈍い人でもこの顔を見れば異常な状況であることはわかるのですが、茶々たちの策略の為に信長君は濃姫とここ三か月は顔を合わせておりません。

「お市の娘が、わたしになんの用？」

「いやー、別にようってほどのことは……」

「ないんだよう」

ニコニコ笑いながら、二人は部屋のあちこちを見ていました。

「なによ。わたしの部屋が、なんなの？」

「いや。もうすぐここに私たちが住むから、その確認だYO」

「……どういこと？」

「あれ？ まだ聞いてなかったのかYO？」

「貴方はもうすぐ、信長様と離婚するんだよう」

すざまじい爆弾発言でした。

濃姫は木端微塵になるほどに動揺し、身動きもとれないままじつとしておりました。が、しばらくしてようやくその口を開きました。

肩がプルプルと震えております。

「で……信長様はそのあとどなたとご結婚を？ まさか……」

お市？ と聞くまでもなく、茶々と江は答えていました。

「おかーさまは無理だYO。アツアツのラブラブだけど、さすがに
実の妹だし」

「だからお公家の娘さんをお嫁にするんだよう。天下人になって幕
府を開くのも、公家との結びつきは大切だし」

「偽装結婚だYO」

「でもほんとはおかーさまと信長様がラブラブだよ」

「……そう、そういこと」と

濃姫は下を向いたまま、じっとしていました

「年内にも離婚と結婚式になるから、早めに荷物をまとめておいてほしいんだＹＯ」

「この部屋はね、茶々ねーさまと初ねーさまと江の部屋になるんだよう」

「辛気臭い部屋だけど、まあ我慢するＹＯ。あの蛇と蝶の描いてある屏風は邪魔だし気持ち悪いから、美濃に持って帰ってＹＯ」

「……それはわたしのお父様が、わたしの嫁入りの時にくださったものです……」

「お父様って？」

「ママシの道三です。美濃の戦国大名の」

「しらないＹＯ。そんな昔の人」

茶々と江は小ばかにするように、笑いました。

「じゃ、そういことだから。ばいばいだＹＯ」

茶々と江はそう言い残すと、くるりと後ろを向きました。

そしてゆっくりゆっくりと、背を向けたまま歩きました。

じつくりと、無防備な背中を見せつけるかのように。

その後ろを、更に無防備な江が付いて歩きます。

「よくも……よくも私の信長様を……。お市目。憎いお市の娘め……」

濃姫は化粧箱に隠してあつた短刀を手にしました。

「おのれおのれおのれおのれええ！」

濃姫がすざまじい形相で、走りこんできました。

「わ。狂ったよう」

江がその声に気が付き、あわてて逃げようとしたが、

「逃げちゃだめよ。たぶん死にはしないから」

前を歩く茶々が江の腕をがっちり押さえて、江を逃がしませんでした。

「ちよ。茶々ねーさま！」

「しねええええ！」

濃姫は逃げられない江の背中を、バツサリと切りました。

「いたああい！」

重ね着した着物を切り裂いて、刃は背中まで届きました。

痛さと出血のショックで気絶する江。

「うふふ。これで完璧だYO」

茶々は冷静に計画の成功を確認すると、そのまま大声で悲鳴を上げました。

「きゃああ！！ 濃姫が、江に切りかかったYO！」

金切声で助けを呼ぶ茶々の顔は。

笑顔でした。

第29話『それは愛ゆえに』の巻

光秀君は激しく揺れていました。これほどまでに感情が高ぶったのは久しぶりです。

宝物のように大切な濃姫が、お市の娘の江姫に切りかかったというのです。もちろん濃姫はすぐさま兵士たちにつかまって、機密事項とされてお寺に幽閉されてしまいました。

（わたしのせいだ）

光秀君は落ち込みました。

もともと責任感が強く自罰的な強い光秀君は、この事態をすべて自分の責任だと思っておりました。

「……………」

織田家の敵を討つ重要な軍事会議の席でも、光秀君は無言でした。

「……………」

一方で、奥さんが妹の娘に切りかかるといふ深刻な家庭不和に直面している信長君も、事態が自分の許容量をオーバーしてしまい、腑抜けになっておりました。

「信長のアニキ、大丈夫か？」

「あー。うん……………大丈夫だから。そっちは適当に頼む……………」

ちつとも大丈夫じゃなさそうな信長君です。

「こりゃダメだぜ」

「長政が裏切った時以来なんだな。こんな信長様は」

「まあ今回の戦は信長様は京でお留守番でヤンスから、ある意味よかつたでヤンス」

利家君、勝家君、秀吉君は三人で言い合いました。

「ま、確かに俺たち四天王がすっかり敵に勝てば、問題ねーか」

「それでヤンスよ。ねえ、光秀殿」

秀吉君が光秀君に話を振りました。

が、光秀君ははまだ思考が自己の殻から出てきておりません。

「光秀殿？」

「……」

「光秀殿、ねえ、聞いてるでヤンスか！」

「あ……………ドウフフフ。はい、もちろん」

「もう、頼むでヤンスよ。光秀殿の敵は四国でヤンスから、一番京に近いでヤンス。何かの時は真っ先に信長様に駆け付けてほしいで

ヤンスから」

「だな。不測の時は光秀が頼りだぜ」

「信長様の近衛まで遠征軍に入れちゃったから、信長様は丸裸なんだな。頼んだんだな、光秀」

「…………ドウフッフ。お任せあれ…………」

光秀君は皆の言葉に、重々しく頷きました。

光秀君は遠征前に、濃姫が幽閉されているお寺へと赴きました。

面会断絶でしたが、光秀君はなんとか頼み込んで無理矢理に濃姫との面会にこぎつけました。

兵士に嚴重に囲まれてやってきた濃姫を見て、光秀君は涙を流しました。

髪はぼさぼさ。服もてきとう。部屋に閉じこもりきりの無気力な二トトという姿で、かつての清楚にして輝かしい姿もどこにもありません。

「みっちゃん…………おひさ」

濃姫は別に笑うことなく光秀君に挨拶しました。

「濃姫様…………申し訳ございません」

「何を謝るの？ みつちゃん、なにか私に悪いことした？」

「……お約束を、守りませんでした……」

「いいのよ、別に。信長様は、私と離婚するみたいだけど。……当然よね」

「そんな」

「いいのよ。もうどうしようもないし。もうどうでもいいの。私はずっとこのお寺で暮らすわ。ここも考えてみれば結構いいかもしれない。空気はきれいだし、気楽だし。……ちよっと自由がないのが玉にきずだけど」

濃姫は笑いました。

無理やりに俗世を捨てて、この寺絵の幽閉生活に慣れようとしているようでした。天下人の妻の様子ではありません。

「せめてなにか……。この光秀に、何かできることがありますんか？ 一度お約束を守れなかった身、たとえばかようなことでも、光秀は果たして見せます」

「ありがとうございます。その言葉だけで十分よ」

「なにとぞ……なにか任務を。私を頼ってください」

何も頼られないことは、『無能者！』と罵られるよりもつらかった。

光秀君と濃姫は、滅亡した土岐一族の末裔同士なのだ。なんとし
てでも、たとえどんな些細なことでも、たとえどんな重大なこと
でも、光秀君はなにかを濃姫の為にしたかった。

「なにか。なんか頼ってください」

「……いいのよ。ほんとうに」

「なにとぞ。なにとぞ」

光秀君はなんども頭を下げ続けました。

その姿があまりにしつこく、俗世をようやく離れて達観を決め込
もうとしていた濃姫の逆鱗に触れました。

「もういいって言うてるでしょう!」

「の、濃姫様……」

「もう無駄なの! 私はこのお寺ですつと一人で暮らしていくの!
天下人の妻でもないし、それどころか何の自由もないの! いま
まであったものは、もう全部なくなっちゃったの。どんなに元に戻
したくってもどうしようもないの!」

濃姫は思いのたけを思いっきり暴露しました。

叫ぶだけ叫んで、ようやく濃姫は呼吸を整えて先ほどの達観した
姿に戻りました。

「どうしようもないのよ……みっちゃんはもう私なんかに係らない方がいいわ。みっちゃんはもつと偉くなれるんだから……」

濃姫はそれだけ言って、去ろうとしました。

去り際、光秀君は濃姫の背中に語りかけました。

「頼っていただき、ありがとうございます。必ずやその望みを、お叶えいたします！」

光秀君はそう言い残して、お寺を去りました。

濃姫はいつたい何のことかとちょっとだけ首をかしげましたが、全ての興味を失っている濃姫さして気にもせず、すぐに忘れてしまいました。

1582年6月21日。その日は六月だというのにやや肌寒い日のことでした。

すでに勝家君、秀吉君、利家君はそれぞれの戦場である北陸、中国、関東へと遠征の旅に出かけました。

四国攻めの光秀君が最終です。

「ドゥフフフ。兵はそろっているか？」

光秀君の人相は、いつもにもまして悪くなっていました。

部下たちはそれを四国攻めの意気込みだと好意的に解釈しましたが、それは大きく異なっております。

「殿。出陣の合図を」

光秀君の部下の一人が促しました。

「信長様は、今日……濃姫が幽閉されておられる寺へいくそうだ」

「は？ はあ、そうですね」

「ドウフフ。信長様には兵がなく、またそれを守るものもお市に遠征に出かけた」

「……は」

察しのいい部下が、口数少なく光秀君の言葉を待ちました。

光秀君は流浪の武将です。古くは美濃の斉藤家、朝倉家、將軍家に仕えたこともあります。その光秀君についてきた古参の部下たちもまた、苦勞人たちでした。

苦勞している割に、報われることの少ない者たちの集団でした。

「この遠征に勝ったとしても……得られるものはわずか。であればとるべき道は一つ。ドウフフ」

部下たちは息をのみました。

「ドウフフ……進路を北北西にとれ。桂川を再度渡って、来

た道を戻るのだ」

「ははー!」

部下たちは驚きと紅葉のお余、平伏しつつも武者震いを止められずにおりました。

(濃姫様……帰蝶様を今一度自由に。天下人の奥方に。そうするに
は、もうこれしかない)

「敵は京。四条本能寺にあり!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4276x/>

私の妹がかように可愛きわけもなし

2012年1月9日12時45分発行